
このキノコ人間が。

天城春香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

このキノコ人間が。

【Nコード】

N8369V

【作者名】

天城春香

【あらすじ】

或る人物の日常を日記と言う形態を用いて描くものです。物語には起伏があるかもしれませんが、無いかもしれません。この人物は狂い続けるかもしれませんが、まともになるかもしれません。章数は多くなつてしまいましたが、どこから読んでもたぶん問題ありません。ご安心ください。

2011年8月15日（前書き）

これは私の日記ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は私が完全に狂った場合、連載を終了とさせて頂いたいただきます。ご了承ください。

2011年8月15日

8月15日（月）晴れ

今朝、最初に耳に飛び込んできたニュースは、県内に二つしかない動物園のうち、家に近いほうから一匹の猿が逃げ出した、というものだった。インターネットよりも先にテレビで知った。ニュースがインターネットより早く私の耳に入ってくるとは珍しい、と思っていたが、今日はパソコンの電源を入れるより先にテレビの電源を入れていたのだ、ということに、ニュースを知って五分後に気がついた。私は狂っている。

私は狂っている。体内時計が狂っていて昼夜逆転した生活を送っているとかそんなヤワな狂いかたではなく、本当に気が狂っているのである。こんなことを自称しても信じない人が大半だろうが、医師は私を指して「君、気が狂っているよ。すぐに仕事を止めて福祉で暮らなさい」と言った。とんでもない医者である。それを聞いた私は市役所へ赴き、福祉の手続きを取り、それ以来福祉で暮らしている。全く、自分が狂っていると自覚している人間を狂っていると認定して福祉として金を提供するとは、とんでもなく狂った世の中である。そしてとんでもなく狂った私である。ちなみに福祉で支給された金は親の財布に収まっている。

私は狂っている。この狂いは、きっと直らないだろう。そんな気がしているのではなく、後で書くがこれには根拠があって言っているのである。だから私は日記を書くことにした。この狂いが進行すると、きっと私は最初に人の顔が認識できなくなる。次に、絵に描かれた記号としての顔も認識できなくなる。そして最後に、文章も認識できなくなる。文章が認識できなくなると、日記が書けなくなる。この日記が途切れたその日が、私の狂いが極に達した日、とい

うことになる。そんな記録が残しなくなったので、私は今日から日記を書く。日が開いたら、二日分書く。とにかく短くても、毎日分書くのだ。そうしている限り、私は完全に狂ったことにはならない。病院や市からは完全な狂人と認定されて入るが、私の中では、まだ私は完全な狂人ではない。そう考えている。でも狂っている。少しは狂っている。

今日の晩餐にはオムレツが出た。オムレツとは通常、ホテルなどでは朝食として饗されるものである。しかし我が家では、晩に出た。何がおかしい。おかしいことなど何も無いではないか。夜にオムレツが出ることの何が変だと言うのだ。私は狂っているが私に食事を饗してくれる母親は狂っていない。狂っていないから働いているのだ。そしてオムレツにはキノコが入っていた。シメジではなかった。シイタケでもないようだった。エリンギでも、当然マツタケなどでもないようだった。味の無いキノコだった。このキノコのせいで、私は狂い続けているのではないか。そんな気はしている。しかし私にそんなことをやる母は、狂っていない。働いているのだから、狂ってなどいないのだ。

2011年8月16日（前書き）

これは私の日記ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は私が完全に狂った場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

2011年8月16日

8月16日（火）

母は通訳の仕事が続けている。父はどうなっているのか、最近音信不通なので分かっていない。とにかく働こうとすれば必ずといっていいほど断られるほど狂った私にとって、親の存在は生命線である。つまり私はいわゆるニートと呼ばれているものに分類されるということになる。不本意ではあるがそれが真実となってしまうのだから仕方がない。そんなわけだから、当然近所づきあいなど全くといっていいほど私には無い。ではどうやって一日を過ごしているのかと言うと、恐らく世の大多数のニートと同じである。何もやっていない。いつか罰が当たればいいと思う。親が死ぬクラスの罰が当たればいいと思う。

父は音信不通であると書いたが、別に行方不明なわけではない。私個人に対して音信不通なのである。狂った私に対し、全くコンタクトを取ろうとしない。つまり私は肉親に無視されているのである。それほど狂うということは罪深いのか、と考えたが、確かに罪深い。親は私が生まれたとき、きっと私に期待をかけただろう。将来は狂った人間にきつとなれよ、とは間違っても願わなかっただろう。私は死んだほうがいいかもしれない。ああ、嫌になる。こんなことに対する意見ばかりが正常だ。

明後日は人と会わなければならない。私のように狂ったもの同士が保健センターのサロン（なんという言葉を使うのだ）に寄り集まるのである。寄り集まって何をするのかと言えば、なにも建設的行為を行わないのだから困りものである。とにかくひどい。何も起らない、という事実がひどい。そんな集まりがあさってに控えている。

昨日書いている途中に書くことを忘れてしまっていたが、私が狂っている原因とは何だろう。ところで突然話は変わるが、今日の晚餐として饗された牛井にも、無味の私の知識には無いキノコが入っていた。私はこれを食べた。母親が作った牛井に入っていた無味のキノコを食べたのである。なぜなら、私に食事を残す権利など無い。狂った人間が親に逆らうと社会的制裁を食らうのである。根拠は無いがきつとそうだ。ところで私が狂っている原因とはなんだろう。

2011年8月17日（前書き）

これは作者の日記ではないことを明言させていただきます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

2011年8月17日

8月17日（水）

今日は外に出た。ということは、昨日は家から出なかった、ということだ。昨日の日記が家庭内の事情の描写に終始していたのはそのためである。ともかく今日は外に出た。しかも日中である。狂った奴が日中に出歩くと善意の普通の人と視線が衝突して酷い目に遭う。そうに決まっている。と覚悟を決めていたかもしれない。私が住んでいたのが都会であつたのならば。しかし私が住んでいるのは宮崎県という行けども行けども田舎が続く土地であるため、平日の日中に外に出ても人と会うことは少ない。この点に関してだけは、宮崎と言う土地に感謝している。しかしきつと近所での私の評判はすこぶる悪いに違いない。だって狂つてばかりで稼いでいないのだから。近所の普通の人から話を聞いたわけではないが、そう思われているに決まっている。

宮崎という田舎であつても、コンビニくらい存在する。ちなみに宮崎にローソンが来たのは90年代末である。田舎だ。実に田舎だ。悪いことは言わない、田舎暮らしなんかには憧れないほうがいい。といつても狂つた人間の忠告など誰も聞かないか。それにしても誰に見せるつもりも無いのに、私は誰に忠告しているんだ。エア友達かともかく私は家から出て、コンビニに入った。そしてコンビニに入つてしまうと、酒のコーナーに向かつてしまった。そして親の財布から抜き取った百円玉を使って酒を買ってしまった。飲んでしまった。そしてコンビニを出て三十歩歩き、吐いた。酒に関わるということだ。今度からは飲まないように気をつけなければならない。

宮崎という田舎の平日でも、たまに人とすれ違う。今日は一人とすれ違った。その人はすれ違いざまに私に視線を向けた。寝癖を見

たのだろうか、それとも狂った人間が珍しいのだろうか。私のように誰が見ても狂っていると分かる人間は、珍しいに違いない。都会だったらきつと、狂った人間が数多く闊歩しているだろうから、私が特別に視線を向けられることなく済んだだろう。田舎が憎い。都会が羨ましい。田舎で死にたくない。都会の雑踏の中で死にたい。そしてきつと、「こんな街中で死ぬんじゃない」と悪態をつかれるのだ。それでも田舎で死ぬよりずっといい。

昨日に続いて今日も晚餐は丼ものだった。親子丼だ。鶏肉がささみしか使われておらず、しかも硬い。狂った人間には豪華すぎる食事である。卵と鶏肉と玉ねぎのほかに、キノコが入っていた。味は無かった。昨日のキノコと同じキノコだ。

2011年8月18日（前書き）

これは作者の日記ではないことを明言させていただきます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

2011年8月18日

8月18日（木）

本を読むときは必ず没頭するようにしている。そうしていないと私はもつと狂うしかやる事がなくなってしまう。何でもいいから何もしないよりは何かやれ、とは母親の口癖である。……だった。でも今はあまり言われない。諦められているのか、それとも呆れられているのか。

今日は保健センターのふれあいサロンへ行く日なので、母に送ってもらって保健センターへ行った。サロンといってもやることといえば私のように狂った人たちが集まって喋ったりボードゲームをやったりするだけの集まりである。私は喋ることもボードゲームも得意ではないのでいつも本を持っていく。そしてずっと本を読む。喋りもせずに、人を見もせずに。きつとこの日記を誰かが見ているとしたらきつと私のことを軽蔑するだろう。狂った私でもそのくらいのことは予想ができるのである。

サロンから帰ってきてパソコンを開いていたらメールが届いていた。そこには「あなたの書いている日記について、お話したいことがあります。来週月曜日にバイパス下のドン・キホーテに来て下さい」と書かれていた。差出人の名前はどこにも書かれていなかった。怖かったのですぐに削除した。

今日の晚餐は豚キムチが出た。ご飯と豚キムチ、それだけである。味噌汁などと言うぜいたく品は私の食事には出ない。今日もその中に昨日と同じ形状のキノコが入っていた。もしかしたら私が狂う原因も、夕食後に必ず数時間意識を失ってしまうのも、このキノコが原因かもしれないと思い、今日は思い切って残してみた。するとキ

ノコだけ残った皿を見て母が「食べなさい」と言った。働いていない私には拒否権など無い。そんなネット内の世論のような言い方だった。その通りなので仕方なく食べた。そして今日もまた、さっきまで意識を失ってしまっていた。きっと私はもっと狂うだろう。そして文章を書くために保っているけなしの正気も失い、この日記は終わるのだ、きっと。

2011年8月19日（前書き）

これは作者の日記ではないことを明言させていただきます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

2011年8月19日

8月19日（金）

もうすぐ週末が来る。嫌だ。週末になれば狂っていない人々が外を出歩くだらう。そしてそれらの人々は、狂った私のことを注目するだらう。だから私は外に出られなくなる。家の中に閉じこもって読書とインターネットばかりやっていなければなくなる。最近読書をしていてもインターネットをやっても気分が悪くなる。暗い気持ちになる。これは狂いが進行した証なのだらうか、それとも常人に近づいている証なのか。どちらにしても嫌だ。狂うか鬱になるかの二択。どちらも嫌だ。

今日読んだ本には。狂った人間が出てきた。しかし最後には大人になって、狂いから脱した。タイトルは「時計仕掛けのオレンジ」といった。若いということは狂っているのだらうか。だとしたら私ももっと歳を取れば、狂った状態から開放されるのだらうか。歳を取っても狂い続けるとしたら、そんなひどい悪夢は無いように思える。そうなるくらいなら、狂いが臨界点に達して何も認識できなくなる時期が早く来てくれたほうがいい。読書をして心も豊かになった気がしない。これは本が本だからだらうか、それとも私のせいだらうか。近頃、悪いと感じることが全て自分のせいであるような気がする。

「お話したいことがあります。来週月曜日にバイパス下のドン・キホーテに来てください」昨日削除した匿名のメールの文面がまだ思い出せる。「お断りします」とか返信くらいしておくべきだったかもしれない。もし本当に来週の月曜日にドン・キホーテに行ったら、誰かが待ち構えているのだらうか。それともいたずらだったりするのだらうか。どっちがいいか、と訊かれれば、どっちも

気が重い、と私は答える。だからセルシンを一錠余分に飲んだ。特に何も変わらなかった。

晚餐にキノコ鍋が出てきた。エノキやシイタケやシメジや白菜に混ざっていつものキノコも浮いていた。何の工夫も無い、私にキノコを食べさせるための食事だった。母は勝手に私の取り皿に、いつも私に食べさせている味の無いキノコを入れた。やけになって馬鹿食いした。満腹になって眠くなった。だからさっきまで寝ていた。この怠け者。死ね、私め。

2011年8月20日（前書き）

これは作者の日記ではないことを明言させていただきます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

2011年8月20日

8月20日(土)

昨日の「時計仕掛けのオレンジ」で図書館から借りた本を全て読み終わってしまった。読む本がなくなるということは、インターネットしかやることがないということであり、インターネットしかやることがないということはインターネット内のふとした書き込みが気になって気分が沈んでしまう危険性が増えるということであり、それを避けるためには私は図書館へ行かなければならなかった。私に本を買う経済力など無い。狂った人間にお小遣いを渡すような親も私の家にはいない。親の財布は鍵のかかる化粧筆筒の引き出しの中に入れてしまっていた。週末は外に人の目が増えるので外出は避けたい、と昨日書いたが、仕方がないので目を伏せながら家を出た。

そして自転車に乗って図書館を目指した。母と兼用の、錆び落としが欠かせない十年以上使っている自転車である。自転車は好きではない。周囲の景色が流れるのが早すぎて混乱してしまうし、何より転ぶとほぼ確実に怪我をしてしまうからだ。しかも死なない程度の怪我だ。車に轢かれて死ぬよりつらい目に遭うことになる。だから自転車は好きではない。乗れなかったらよかったのに、と思うのだが、幼稚園児の頃、まだ両親が私に期待していた頃に、私は練習してしまい、自転車が乗れるようになってしまった。だから仕方なく自転車を使って、本を返却して新たに数冊の本を借りた。カウンター越しの相手なら声を出すのは平気だ。このあたり、私がまだ正気を保っているような気がしてほっとする。

「お話したいことがあります。来週月曜日にバイパス下のドン・キホーテに来てください」木曜日にパソコンに入っていた匿名のメ

ールがまだ記憶から消えない。メールマガジン以外のメールが届くことは稀だからだ。いや、初めてだったかもしれない。私はパソコンを使っていてよかったと思えたことがまだ一度も無い。それなのに、毎日パソコンを開いている。そしてインターネットを覗いている。あまり楽しい趣味ではない。でも、他にやることが無い。楽しくなる方法を検索すればインターネットは楽しくなるだろうか。

今日の晚餐は焼きそばだった。それなのにまたキノコが入っていた。どうしてキノコが入っているんですか、と私は母親に敬語で尋ねてみた。母親は私のことを無視した。ついに私は家族全員から無視されるようになったのだ。ついに、などという言葉を使ったところで嬉しくもなんと無い。

2011年8月21日（前書き）

これは作者の日記ではないことを明言させていただきます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

2011年8月21日

8月21日(日)

ふと思い立ち、ヤフー知恵袋に「味の無いキノコって存在しますか」と書き込んでみたが、反応が怖いので書き込んで以来まだそのページを開けずにいる。これは狂っているのではなく、単に私が元来臆病なだけである。そしてこのまま放置し、忘れかけた頃に除いてみて何の反応も返ってきていないことに少しだけ落胆し、また「私は狂っている」などとこの日記に書くのだろう。だから私はこの書き込みを自分の記憶から消すことに決めた。

今日は日曜日であり、外に出ると人の往来が平日より激しく、つまり狂っている私を奇異の目で見る眼球の数が増えるのである。だから私は外に出ないことに決め、本を開いた。しかし集中できなかったのも、座禅でも組んでみることにした。あまりにもくだらない行為である。しかし私にはもう、くだらないことくらいしかやることが無いのだ。そして座禅は十分足らずで挫折した。あまりにも頭が静かになって狂いが加速しそうになったからだ。文字や動画や音楽といった刺激を常に与え続けていなければ狂うような気がして、読書やインターネットを中断するのが怖い。まるで怠け者の言い訳である。

「お話したいことがあります。来週月曜日にバイパス下のドン・キホーテに来てください」試しに何も見ずに木曜のメールの文面を思い出してみたところ、ほぼ完璧に記憶できていたので自分でも驚いた。明日はドン・キホーテに行ってみよう、と昨日より精神の調子がいい私は決断してみた。しかしこの決断も明日の朝には鈍っているかもしれない。

それにしても、ここまで書いたものを読み返してみると、今日の私はまるで正気のようなものである。ということは、当たり前だが私は狂っていないということになり、狂っていないのに働いていない私はただのカスということになる。いや、狂っているから働けないなどと言っている奴もカスである。つまり私はカス呼ばわりされる運命から逃れられない、ということになるのか。こんなこと、とてもインターネットに書き込んだりなどできない。ただの泣き言じゃないか。

夕食は饗された。しかし母親はまだ私のことを無視し続けている。夕食に出たのは塩鯖だった。キノコはどこへ行ったのか、と思っただら小鉢にキノコが入っているものが鯖の隣に置かれていた。食べなかったら今度はどうなるんだろう、と考えながら、私はおとなしく出されたキノコを食べた。やはり味は感じられなかった。

2011年8月22日（前書き）

これは作者の日記ではないことを明言させていただきます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

2011年8月22日

8月22日（月）

目覚めた私はバイパス下のドン・キホーテへ向かった。「お話し
たいことがあります。来週月曜日にバイパス下のドン・キホーテに
来てください」という、先週木曜日に送られてきたメールの文面が
まだ忘れられなかったからだ。到着してから、もし来なかったらど
うなっていたのだろう、と考えた。そして何者かが家に襲いに来る
のではないかという被害妄想に達してしまい、私は震えた。そんな
ことを考えながらドン・キホーテを歩き回った。この店には物とい
う物が詰め込まれていて、この近所に済んでいる人間は買い物に
困ることは無いだろう、と思われた。しかし金銭を少しも持ってい
ない私にはこれらの積み上げられたものが全て無駄に思えた。どう
せ買えないのだ。

午後になっても、何も起こらなかった。もしかして私が呼び出し
た人物を特定して話しかけなければならぬのか。狂った末にコミ
ュニケーション能力を失ってしまった私にそんな高度なことが可能
なのだろうか、いや不可能だ、と帰る時間を計算して焦り始めて私
は考え始めた。すると、背中に何者かの気配を感じたので、私は振
り向いた。しかし何者かは私の視界から外れた。逆方向に振り向い
た。何者かはそれでも私の視線から外れた。何度振り向いても、一
回転してみても何者かは私の背後の視界の外から出ようとしなかつ
た。姿を見せずに何をするつもりなのか、分からなくなった私は恐
ろしくなって入り組んだ店内を転びそうになりながら駆けて、店か
らも出て自転車に飛び乗り、振り向きもせずに一目散に家へと帰っ
た。そして自室に飛び込んだ。もう自室から出たくない、という気
持ちが、自分の部屋まで戻った私を支配していた。

それでも晩餐のためには部屋から出るしかなかった。私に饗される食事は夜の一食のみである。食べなければ死んでしまう。例えばキノコが混じっていたとしても。今日の晩餐はカレーだった。当然のようにキノコが混ざっていた。諦めの境地に達していた私は、キノコ入りのカレーを腹に押し込んで自室に急いで戻って横になった。

2011年8月23日（前書き）

これは作者の日記ではないことを明言させていただきます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

2011年8月23日

8月23日（火）

あれは確か火曜日の深夜だったか。だから水曜日の日記に書いてもいい事柄だ。

私は深夜、外を出歩いていて。田舎の深夜は通行人がほぼ皆無なので安心して出歩くことができる。しかしその日は、安心できないようなものと出くわした。それは猿だった。野性の猿か、と思ったが、ずいぶん前に動物園から猿が逃げ出したというニュースをテレビで見たことを思い出した。猿と目が合った私は、歩みが止まった。猿も動きを止めた。しばらく睨み合った私と猿は、数分間静止していただろうか。双方とも、どちらからとも無く視線を外し、それぞれ別の方向へ歩み去った。通報したほうがよかったのかもしれないが、深夜だし、私は狂っているし、それは無理だ。

帰るとメールが届いていた。「はじめまして。猿です」で文面が始まっている上に匿名だったのですぐに削除した。どうも最近、不審な人々に私のメールアドレスが駄々漏れしている気がする。何か嫌なことの前兆でなければ良いのだが。

昼間、一人部屋でじつとしてしていると、自分がすごく罪深い人間であるような気がしてきた。なので、自分に罰を与えたほうがいいのではないか、と思い立ち。しかし有効な方法がすぐに思い浮かばなかった。壁に頭をぶつけてみた。ごん、と大きな音がした。家中に音が響き渡ったに違いない。しかし、在宅で通訳の仕事をしている母から咎められたりすることは無かった。ずっと無視されているのだ、当たり前だ。私はもう期待もされていないのだ、当たり前だ。死んだほうがいい、と思った。しかし、死ぬ勇気が出なかった。保留である。駄目だ。私はダメだ。

また匿名のメールが届いていた。「昨日は楽しいデートでしたね」と書かれていた。昨日、誰かに会ったか、と思い返してみたが、ドン・キホーテで姿を見せずに私の背後を付け回した人物しか思い浮かばなかった。あれがデートだと言える頭があるなら、その人物は十分狂っている。私より狂っているかもしれない。そういえば明日は病院へ行く日だ。病院へ行って狂いを治療するのである。もう二年くらい通っているが、ただ薬を処方されるだけで、一向に狂った頭が改善される兆候は見られない。あの病院はヤブなのではないかと私は少し思っている。

昨日書き忘れたが、私は背後を姿を見せずに付いて来る謎の人物に、一言だけ声をかけられた。「あなたはきつと治らない」と一声。その言葉には十分な説得力が会った。自分でも自分の狂いが治ると思えなかったからだ。そんな些細なことは覚えているのに、今日の夕食は覚えていなかった。キノコを口にしたことだけは覚えているのに、献立は思い出せない。

それと言つのも、ついさつき、冷蔵庫から酒を勝手に奪って飲んだからだ。数分前まで、私はいい気分になっていた。その拍子に晩に何を食べたのかを忘れた。だから今日の日記は時系列がとっちらかっている。明日はちゃんと書こう。読み返したときに意味不明では困るから。

2011年8月24日（前書き）

これは作者の日記ではないことを明言させていただきます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

2011年8月24日

8月24日（水）

起きると、一階から家族のものではない男の声が聞こえた。それが誰なのか、私にはすぐに予想がついた。母の担当編集者である。母は週に一度か二度、定期的に編集者と居間で打ち合わせをしている。とても部屋から出られない。狂った私などを見知らぬ他人に見せて編集者を不快にさせて編集者が母に近寄らないようになって母の仕事が減って収入が減ると夕食すら出してもらえなくなるかもしれない、そうなると私は苦しい餓死を体験しなければならなくなる、そう思った私は、編集者が帰るまで自分の部屋の自分の布団の中でうずくまっていた。一生そうしていたかったが、編集者が帰ったのと今日は用事があつたので昼ごろには布団から出た。

用事とは通院である。狂った私は狂いを矯正するための薬の処方箋を貰いに行くために、二週間に一度病院へ行かなければならないのである。診察には期待していない。いつも「何か変わったことはありませんか」「何も起こりませんでした」「そうですか。ではお薬出しておきますので」で終わってしまうからだ。きっとあの病院は収入源確保のために私のことを狂っていると診察し続け、処方箋を出し続けているに違いない。でも今は実際狂っているので通わないわけにはいかない。もし治ったら盗られた金額分の復讐をしに行こう。私は狂った頭でそう思った。

そんな気持ちに支配されていたからか、午前中ずっと寝ていてそれから起きてすぐ外に出たせいで気分が悪くなったのか、それとも昨日盗み飲んだ酒が残っていたのか、今日の晚餐は食べ終わってすぐに吐いた。吐いたものの中には原形を保っているキノコが含まれていた。いつぶりだろう、私がキノコを消化吸収しなかったのは。

2011年8月25日（前書き）

これは作者の日記ではないことを明言させていただきます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

2011年8月25日

8月25日(木)

生活そのものに価値と言うものが数値として示されたりすることの無い世の中でなくて本当に良かった、と思う。そんなことになったら人々の生活の価値の数値で順位が生まれてしまうし、私のような人間の生活などにはとても低い数値がつけられて凹んでしまうだろうし、激情家が低い数値を付けられたりなんかしたら怒り狂ってきつと犯罪に手を染めるだろう。それも派手な犯罪だ。だから人間の生活が数値化されていなくて本当に良かった、と思う。思ったからどうなんだ、とは聞かないで欲しい。ただ思いついたただだから。

今日は木曜日なのでふれあいサロンへ連れて行かれた。ふれあいサロンでは交流会が行われていて、参加者にはお菓子が配られたりフルーツポンチを作って食べたりなぜか「上を向いて歩こう」を合唱させられたりした。「上を向いて歩こう」は嫌いな歌だ。なんだか皮肉に聞こえる。それに上なんか向いたところで手の届かないものばかりが目に入って気が重くなるばかりである。そんな歌じゃないことくらいは分かっているが。

帰ってきてパソコンを開くと匿名のメールが届いていた。「先日のデートは楽しかったですね。次のデートは日曜日にしましょう」とだけ書かれていた。私にはデートなどと言う高等で狂っていない人間がやることを行った覚えなど無い。きつと間違いメールだろう。月曜日にドン・キホーテで私を付け回した人物から送られてきたメールだとしたら。だとしたら、不気味すぎて思わず震えてしまうだろう。狂っているが故に社会的な力を何も持つことを許されない私にはそのくらいしかできないのだが。

今日の晩餐にはキノコの丸焼きが出された。まるで私が昨日キノコを消化せずに吐いたことを知っているかのような献立である。そういえばキノコを食べずに迎えた今日は、やけに調子がよく、ちょっとした考えまで生まれ、気持ちも心なしか前向きになっていた、ような気がする。しかし、キノコの丸焼きを食べないわけには行かなかった。もしかしたら、と気体を込めて口に入れてみたが、やはり味の無いキノコだった。吐かなかった。

2011年8月26日（前書き）

これは作者の日記ではないことを明言させていただきます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

2011年8月26日

8月26日（金）

早朝、まだ父も母も妹も起きていない時刻に、冷蔵庫から酒を盗み飲み、昼まで寝ていた。昼間、母が部屋に閉じこもって翻訳の仕事に精を出している隙に、また冷蔵庫から酒を盗み飲んで夕方まで寝ていた。こんなに無駄に過ごした一日はそう無いだろう、と思う。そして私はきつと夜も眠るのだ。他にやることが無いんだから。

ハローワークにいかなくちゃ、と起きている間に（酔ってはいたが）私は思った。働かなければ私は一生狂ったままだ、と感じたからだ。でもそう決意してからすぐに、私は酒を飲んでしまった。狂いたいのが正常になりたいのか、自分でも自分に問いたい。そして問いかけたところでちゃんとした答えは返ってこないだろう。何せ酔っていたのだから。

酔っていて記憶が曖昧なのだが、どこかに電話した気がする。どこに電話したのかは覚えていないが、「月曜日に来てください」と返された。月曜日はどこかに出かけようと思う。どこに出かけるのか見当も付かないが、明日には思い出せるんじゃないか、と私は未来の私に余計な期待をかけた。

酔っていて眠っていたせいで、晚餐には出られなかった。深夜、ようやく酒が抜けて目が覚めて、トイレに行こうと部屋を出ると、扉の前にキノコを茹でて刻んだものが皿に盛られて置かれていた。酒のせいで空腹だったのでこれを食べた。すると意識が朦朧となつて、トイレに行ったのか行かなかったのか分からないまま、私はついさっきまで寝ていた。これを書いている今も、起きているのか起きていないのか自分では判断できない。でも、狂ってはいないと思

う。馬鹿になっているのだ。

2011年8月27日（前書き）

これは作者の日記ではないことを明言させていただきます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

2011年8月27日

8月27日(土)

昨晚食べなかったせいで、空腹で眠れなかった。そこで早朝、冷蔵庫に何か食べるものは無いかと漁ってみたがそのまま食べられそうなのは見当たらなかった。生野菜、パックのままのハム、バター等。仕方がないのでテレビをつけるとアニメでカードの対戦をやっていた。勝たないと人類が危ない、らしい。カードゲームで遊ぶ相手が居て羨ましい、と思っていたら窓の外に猿の姿が見えた、気がした。早朝だし、寝ぼけていたせいで見えた幻覚だろう。空腹を紛らわせるために部屋に戻ってまた布団を被った。

昼間、パソコンでインターネットをやっているとメールが届いた。匿名だった。「猿です。遊びませんか？」とだけ書かれていた。昨日の人物からだろうか。本当に猿からメールが送られてきた、と言うことはあるまい。どうしようもないので無視して削除し、このメールをこなかったことにした。しかしこうして日記に残してしまっただ。この段落を消すべきか、書いている今も悩んでいる。

酒の効能を思い知り、もっと飲みたいと思った。しかし飲むと馬鹿になる。その証拠として、酒に酔ったまま書いた昨日の日記は馬鹿みたいだ。だから我慢しなければならぬ。いや、狂っているより酔った馬鹿で居るほうがいいのかもしれない。そう考えるとますます飲みたくなった。しかしこれ以上勝手に飲んだら家族にばれちゃう。ただでさえ言葉を交わしてくれない家族が酒を盗んでいるという事実を知ったらどんな手段に出るのか。考えるだに恐ろしかったので、私は気合を入れて我慢した。息を止めたり、腕立て伏せをやって無理矢理疲れて昼寝してみたりした。

昨日電話したところを、夕方になって思い出した。何の前触れも無く。急に思い出した。私が電話した先はハローワークだった。「月曜日に来てください」と言われたということは、私は月曜日にはハローワークへ行かなければならない。しかし狂った私が今更ハローワークへ行ったところでまともに仕事を見つけることなどできるのだろうか。到底そうは思えない。しかし約束してしまった。約束を破るのは怖い、これ以上人を失望させることは怖い。月曜日にはハローワークへ行かなければなくなってしまうた。

晩、昨日は何も口に入れなかったせいで食事をいつもの倍のスピードで食べてしまった。いつものように味の無いキノコ（恐らく私が狂っている原因）も入っていたが、構わず食べた。食事にがつつく私の姿は、浅ましかった。母はそんな私をただ無言で睨んでいた。父と妹は、私に視線すら向けなかった。

2011年8月28日（前書き）

これは作者の日記ではないことを明言させていただきます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

2011年8月28日

8月28日（日）

家に知らない女の子が訪ねてきた。誰も応対しないので仕方なく玄関に向かった寝起きの私に向けられた女の子の一言は「さあ、遊びましょう！」だった。滝本竜彦の小説が思い出された。その人物の小説どおりの展開だと私はやたらと自罰的な人物と言うことになってしまう。自分のことを狂ってる狂ってるこんな風に日記に書き続けている私は自罰的な人間なのか。そうなのかもしれない。そう考えながら私はぎこちなく女の子と話し、おっかなびっくり一緒に遊んだ、その内容については詳しく書かない。子供がやるような他愛も無い遊びで、そのあまりの幼稚さに泣きそうになった、とだけ書いておく。

女の子がやってきたのはきっと幻覚だったのだ、さっきまで一緒に遊んでいたのも幻覚だったのだ、と私は夕方、女の子が帰ってから思った。しかし私の手元には女の子から手渡された箱があった。誕生日プレゼント、とのことだった。私の誕生日は既に通過した水曜日、つまり23日だ。遅すぎやしないか、と訊いてみたかったが訊けなかった。「ああそう、じゃあいらないね」と言われて手元から奪い取られるのを恐れたから、かもしれない。自分でもどうして素直に受け取ったのか理解ができない。

箱を開け、誕生日プレゼントを腕に巻いてみた。似合っているか似合っていないかで言えば、不釣り合いな代物だった。しかも私は特別に用事があるとき以外は外に出ないので、家の壁にかけられている時計で事足りてしまう。女の子には申し訳ないが、このプレゼントは無意味だ。

そういえば、女の子の名前を聞いたのか、聞いたとして覚えているのか自分でも分からない。今思い出そうとしても、出てこない。あれは本当に幻覚だったのかもしれない。じゃあどうして手元に腕時計があるのか。それは知らない。

死ぬ夢を見た。死のショックで目を覚ますと深夜だった。もう晚餐は出ないだろう、と予想しつつも、もしかしたら、と期待して居間に下りてみると、何の用意もされていなかった。私は絶食しなければならないようだ。餓死が冗談では済まされなくなってきた。

2011年8月29日（前書き）

これは作者の日記ではないことを明言させていただきます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

2011年8月29日

8月29日(月)

今日は月曜日であり、今日から日中に外を出歩く人の数が少なくなると思うと少しは気が楽になる。でも今日は外に出る幼児がない。これは楽だ、今日は一日寝て過ごそう…….と思っていたのだが、ハローワークへ行く約束を酔った勢いでやってしまったことを思い出してしまった。忘れていたほうが幸せだったのに。なので、昼まで寝てから私は家を出た。仕方なくだ。約束を破っても殺されはしないだろうが、狂った心が許してくれない。お前は狂っているくせに人との約束まで破るのか、お前はつくづく価値の無い人間だな。自分にそう言われそうな気がするので、仕方なくだ。

ハローワークでは狂人用の受付があり、そこで職を探すに当たつてのアドバイスを受けた。「身なりはきちんと整えてください」「働きたい、という意味を先方にしっかりと示すこと」などといった内容だった。受付の人は中年の女性だった。暇な主婦だろうか、と思った。私は暇な主婦より暇な人間だ。本当に価値の無い人間だな。

ハローワークから命からがら帰ってきてパソコンを立ち上げるとメールが届いていた。匿名のメールだった。「私の名前です。覚えて置いてください」と書かれ、その続きに名前が書かれていた。私は人の名前が覚えられない。現に今、パソコンを閉じて日記を書いている今、思い出そうとしても思い出せないくらい人の名前に関する記憶力は弱い。なぜなら人の名前には意味が無いからだ。勇、という名前だからと言って勇敢とは限らない。恵子、という名前だからといって恵まれているとは限らない。関連性の無い記号だから覚えられないのだ。だからメールは消さないでおいた。名前を思い出したくなったら見返せばいい……ん？ どうして思い出したいんだ

ろう。

晩餐にはオムライスが出た。もちろん味の無いキノコが混入されていた。味が無いくせに、そのキノコが喉に入ると急に吐き気がこみ上げてきた。しかし食卓で吐いたらきつと後処理は自分でやらなければならなくなる。自分のものとは言え嘔吐物の後処理は嫌だ。だから頑張って全部飲み込み、トイレに入ってすぐ吐いた。きつと明日も栄養失調だ。

2011年8月30日（前書き）

これは作者の日記ではないことを明言させていただきます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

2011年8月30日

8月30日（火）

起きると足がふらついた。何も食べていないせいである。しかし、キノコを食べて狂い続けるのと、こうやってキノコを消化するのを拒否し続けてやがて餓死するのではどちらがましだろう。少し考えてみた。キノコを食べずに正気でい続けたほうがいいのかもしい、という考えが頭に浮かんだ。私の死期は近づいているのかもしれない。

窓から空を眺めた。キノコを消化せずに眺める空はいつもより青く見えている気がして、空を見るくらいしかやることの無い自分の立場に珍しく危惧を抱いた私はハローワークへ向かった。しかし、私の担当者（昨日決まったらしい）は月曜日と金曜日にしか出勤していないので今日のところは帰ってください、と言われてしまった。私はこの正気でいられる時間をどう使えばいいのだろう、と悩みながら家に帰った。

家に帰ったのを狙い済ましたかのように、家の電話が鳴った。翻訳作業が忙しい母がいつまで経っても電話に出ないので、私が出てみた。すると少女の声が「はい、私です」と名乗った。誰なのかわからないので名前を訊くと、「昨日のメールに書いたけど？」と帰ってきた。昨日のメールには確か名前が書いてあったはずだ。思い出そうとしたが思い出せなかったのだから尋ねると、「榎本なごみだよ」と帰ってきた。どうして電話してきたのか尋ねてみると、「あなたが出ると思ったからね」と帰ってきた。どういうことか分からなかった。どうして私が出ると思ったから電話したのか、私にどんな用事があったて電話してきたのか、さっぱり分からなくなり、もしかやこの榎本なごみ（何度も書かないと忘れてしまう）

なる人物は私を騙そうとしているのではないか、いや自由に使える金を少しも持っていない私を騙してどうする気だ、笑うのか、嘲笑するのか、そんな頭のおかしい考えが続々と浮かんできて怖くなつたので私は電話を切った。するとすぐに電話が鳴った。取ると、「ひどいな、急に切るなんて」と榎本なごみの声が聞こえたので私は受話器を叩きつけて部屋に戻って布団を被って夕方まで震えていた。

そして夜になり、晚餐の出る時間になった。ひじきの煮物の中にキノコが刻まれていた。昨日はこれを消化しなかったから調子がよかった。しかし調子がよかったからと言って良いことは何一つとして起こらなかった。狂っていたほうがまだ、狂っていることに頭を抱えていたほうがまだ、そう考えた私はキノコごとひじきの煮物を口に入れた。

2011年8月31日（前書き）

これは作者の日記ではないことを明言させていただきます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

2011年8月31日

8月31日（水）

朝、起きると私は狂っていた。まるで現実が幻覚に用に見えていた。空の色も昨日ほど青く見えない。昨日の日記を読み返してみると、まるつきり普通の駄目な人間の生活そのものが書かれていた。狂っていないと私はこんな感じの生活を送ることになるのか。怖くなったので、私は日記をすぐに閉じた。これからは日記を書くときはキノコをちゃんと食べよう、と心に固く誓った。常人のまま駄目人間と言われるくらいなら狂った駄目人間と呼ばれるほうがましである。

部屋の中のものが壊されることに恐怖を覚える。例えば、日曜日に榎本なごみから貰った腕時計、これが壊れることを考えただけで私の胸はまるで悪い相手に恋しているかのように締め付けられる。実際、昼寝中に、何者かに腕時計を壊されるという夢を見た。それがあまりに恐ろしかったので、ショックで目を覚ましてしまった。目覚めると窓の外に猿がいた。ずいぶん前に動物園を逃げ出した猿のように見えた。というか、ここに猿がいる理由で最も納得できるものがそれだった。窓を開けて追い出そうとすると、猿が喋った。「あなた、お暇そうですね。退屈な生活、大変結構。羨ましいものです」きつと夢に違いなかった。

それから、いつ目覚めたのか、自分でも分からないが、とにかく晩になった。晚餐にいつものようにキノコが入っていたので私はむさぼるようにこれを食べた。悪夢を見てしまうのも、現実ではないようなものを現実のように認識してしまうのも、私の狂いかたが足りないせいだ。私よ、もっと狂え、そしてこんな悩みなど感じない身体になってしまえ。

2011年9月1日（前書き）

これは作者の日記ではありません。あくまで創作でありフィクションです。私は正常な人間です。

2011年9月1日

9月1日（木）

起きると、と言ってもそれまで寝ていたわけではない、だらだらと昼近くまで布団に寝転がって暇つぶしをしていたのだ、とにかく起きると、階下から母と男の声が聞こえた。情事の声などではない。私は母の浮気現場など想像したくも無かったし、大体母に浮気できるほどの魅力があるとも思っていない。とにかく、階下から母と男の声が聞こえた。男の声には聞き覚えがあった。それは毎週家に来ては母と打ち合わせをしている編集者の声だった。母と男は今度母が翻訳する本について話し合っているようだった。その詳細については、ここには書き記せない。話半分しか聞いていなかったし、もう夜になってしまった今となっては、何を言っていたのか一言も思いつくことが出来ないからだ。

それに、ちょっとした事件が起こった。母と編集者の声が途切れたと思うと、階段を上ってくる音が聞こえてきた。そのとき、二階に居たのは私だけだった、と思う。二階には私の部屋と妹の部屋と母の仕事部屋があるのだが、妹は学校へ行っているし、母はもちろん私の部屋の真下の居間に居るので、私しか居ないことは明らかだった。それなのに足音は階段を上ってくる。誰だ。きっと編集者だ。何の用があるんだ。少なくとも私に用があるわけではないだろう。母は編集者に私の存在を、私が狂っているという事実を隠しているはずだから。

ところが、足音は私の部屋の前まで来て、扉をコンコンと叩いた。「入ってますか？ 入ってますよね」と言っ、了解も得ずに編集者は私の部屋に入ってきた。あまりにも突然の出来事だったので私は呆然としていた。私の部屋に、見ず知らずの男が、無許可で闖入

してくるとは。何をするつもりなんだ、と訊きたかったが見知らぬ人間が怖かったので私は何も言えずにいた。すると編集者は調子付いたのか、私の机の上においてあった、榎本なごみに貰った腕時計を手に取った。「いやあ、いい腕時計だ。実にいいものだよ、これは。」

「君には勿体無い」そう言っただけで編集者は腕時計を握りつぶした。私はしばらく、何が起こったのか分からなかった。呆然としたままの私を置いて、編集者は部屋を出て行った。後に残ったのは微かな煙草の臭いとガラクタになった腕時計だけだった。

そういえば、今日はふれあいサロンへ連れて行かれる予定の筈だったのだが、母は私に話しかけてくることは無かった。私も、別に行かなくても問題は無い、と考えていたので何も起こらなかった。とにかく、物を壊されたことだけが鮮明に頭に残っていた。

私は自分の持ち物が壊されることに恐怖を覚える。そんなことを昨日日記に書いた。すると、それが予言であったかのようなことが起こった。これは何だ。何なんだ。私の日記には妄想を現実にする力でもあるのか。そんな気の狂ったことを考えてしまったので、今日は晚餐を食るように食べた。キノコが混じっていたが、それも含めて食るように食べた。もっと狂え。もっと狂って、こんな痛みなど感じないようになってしまうえ、私よ。

2011年9月2日（前書き）

これは作者の日記ではありません。創作です。創作に決まっています。

2011年9月2日

9月2日（金）

今、起きたところである。今が現実なのか夢の中なのか、狂っている私には判断できない。しかし机の上には壊れた腕時計が置かれている。昨日、編集者に腕時計を破壊されたことは事実のようである。いや、その事実を認識している私も夢の中にいるのかもしれない。そう考え出すと混乱してきた。だからこれ以上気にしないことにして、今日、起きているか寝ているかの間に起きた出来事をここに書く。

榎本なごみが訪ねてきた。彼女は誰に案内されるでもなく、自発的に、言い換えれば自分勝手に家に上がりこんできた。そしてそのまま階段を上って、私の部屋に入った。彼女が最初に気にしたのは壊れた時計である。「壊しちゃった？」と、榎本なごみは尋ねた。「違う、昨日母の担当編集者に壊されたのだ」と、私は真実をありのまま伝えた。「そっか」榎本なごみは怒りもしなかった。自分がプレゼントしたものが勝手に壊されたというのに。「負けちゃダメだよ。狂っちゃダメだよ」と榎本なごみは言った。何に負けるというのか、私が狂ったところで何の不都合があるのか、私には納得できなかった。しかし私が何を言い返したのか、ここで記憶が途切れているので分からない。とにかく、榎本なごみは晚餐の時間より前に帰った。それだけは覚えている。

「キノコは食べないほうがいいよ」と、どのタイミングで言われたのか思い出せないが、とにかくそう榎本なごみに言われた。「食べなくても死なないよ。死にそうになったら警察に駆け込めばいいよ」いいや、食べなかったら私は死ぬ。晚しか食事を出してもらえないのだから。私はそんな感じの反論をした、ような気がする。そ

れに対して榎本なごみがどんな反応を返したのか、それも思い出せない。きっと昨日キノコを馬鹿食いつたせいで、記憶能力が狂ってしまったているのだろう。

今日の晩餐の内容も思い出せない。しかし、きっとキノコが入っていたのだろう。今も私は狂っているから。

2011年9月3日（前書き）

この日記はフィクションです。作者は正常な人間です。こんな生活はしていません。

2011年9月3日

9月3日(土)

パソコンでインターネットに興じていると、猿脱走のニュースが再び報じられていた。未だ行方は不明なり、とのこと。ちなみにこのニュースは地域ニュースのページで見かけた。暇な私はそんなうでもいいページすら閲覧するのである。インターネットに載っている情報などほとんどがどうでもいいものである、と言う人も時々あるが、間違つてはいないと思う。ニコニコ動画や2ちゃんねるを閲覧していると、特にそう思う。

今日が土曜日だったことを午後になってやっと思い出し、先週もそうしていたように母と兼用の自転車を駆って図書館へと向かった。そこで本を返却し、本を借り、無料の給水機で大量に水を飲んだ。家で飲む水道水は残暑のせいなのか、ぬるいのである。家で飲むものと言えば水道水か、無許可で飲む酒くらいしか無い。ほとんどの家にあるという、冷蔵庫で冷やされた麦茶は我が家には存在しないのである。

家に帰ると母と聞き覚えのある男の会話が聞こえてきた。男の声は編集者のものだった。腕時計を壊された記憶がまだ鮮明に残っていたので、私は家には入らずに自転車をUターンさせて、本屋で立ち読みして時間を潰した。冷房が効いているとはいえ、何時間も立ちっ放ししていると、寝すぎて体力の低下した私は倒れそうになった。しかし、あの変な編集者と同時に家に居ることなどできなかった。来週から編集者が来たときはどうするべきか、私は真剣に検討する必要があった。

立ちっ放しで何時間も立ち読みしていると、腰が痛くなった。横

になっても腰の痛みは引かなかったし編集者が居たという恐怖のために胃袋が縮み上がっていたしなので、私は夜になっても晚餐を取りに部屋を出ることをしなかった。そのまま、深夜まで寝ていた。ついさっき目が覚め、腰が痛くなくなっていたので居間へと降りてみたが、やはり何の用意もされていなかった。私にキノコを食べさせなくて良いのだろうか。というか、私はどうして毎日義務のように味の無い名前も知らないキノコを食べさせられているのだろうか。改めて考えてみたが、分からなかった。不条理とはこのことだろうか。

2011年9月4日（前書き）

これは作者の日記ではありません。創作です。

2011年9月4日

9月4日(日)

そういえば新学期が始まっていたのか。学校など、私とはかなり縁遠いものになってしまっているため、気づかなかった。気づく必要も無かっただろう。私がまだ正常で、学生と呼ばれる身分だった頃、新学期は……思い出したくないことに気がついた。新学期を迎える暗澹とした気分をまた味わいたくなど無い。だからこれ以上学生時代のことは思い出さないことに決めた。そして私は二度寝した。

昨日の日記には「狂」の字が一度も出てきていないことに、今読み返してみても気がついた。昨日の私は正常だったのだろうか？ いや、ずっと狂っていた。狂ったままインターネットして狂ったまま図書館へ行って水をがぶ飲みして狂ったまま狂った人間に危害を与えようとたくらむ悪の担当編集に怯えて狂ったまま何時間も立ち読みしたのだ。何の実もない一日だった。きつと今日もそうだ。今日やったことといえば、電話を取ったことくらいだ。

大雨が降っていたので、今日は外に一步も出なかった。晴れていても用が無ければ出ないが。そして電話があった。母がいつまで経っても出なかったなので私が居間に下りて受話器を取った。榎本なごみからだった。「ん。あなたが取ることは予想できていたよ」榎本なごみは預言者なのだろうか。「違うよ。ところでそっちは大丈夫？ 台風近づいてるらしいけど」榎本なごみの家にも台風が近づいている、ということになるだろう。「私の家は大丈夫。住んでないから」どういふことなのか分からなかった。私は尋ねた。「だから、住んでないから。雨とか平気なんだ」分からなかった。

珍しく母に話しかけられた。「夕飯、何か食べたいものとかある

？」冷蔵庫の中にあるもので作れるもの、と私はリクエストした。
その日の夕餉は、卵とトマトを混ぜ合わせて炒めたものと、焼いたキノコが出た。私が順調にキノコを食べ続けているから、母は無視をやめたのだろうか。とにかく、私は今日もキノコを食べた。

2011年9月5日（前書き）

この日記は架空のものであり、断じて作者の日記などではありません。

2011年9月5日

9月5日(月)

また月曜日だ。学校なんか行かなくなっただけの週数過ぎているのに、月曜日になると憂鬱になってしまう。これは何症候群なんだろう。そして、こう感じる私は果たして正常なのか。医師は狂っていると判断するけど、私は果たして本当に狂っているんだろうか。次の通院日は明後日だ。

悪の編集者の手によって破壊された腕時計を、今日、ようやくゴミ箱に入れた。今までは壊されたまま机の上に置きっぱなしだったのだ。しかし、このゴミ箱の中身を回収してくれる人物は、この家には存在していない。

なので私はいつものように、深夜、つまり9月6日になったついでに、一階の居間のゴミ箱に自分の部屋のゴミ箱を移し変えに行った。そうすれば、母は黙って居間のゴミ箱の中身を回収してくれるのだ。これに気づくまで、私は捨てたいもので床が埋まりそうになって困っていた。

そしてゴミをゴミ箱に移し変えていると、偶然降りてきた妹と鉢合わせた。妹は眠そうな目で、私のことなど完全にいないかのようには私から視線を逸らし、水を飲んで電気を消して自室に戻っていた。私がまだ居間に残っていたのに電気を消したのだ。妹の私に対する無視の度合いは徹底している。

これから眠ろうと思うのだが、さっきまで居眠りしていたため少しも眠くない。仕方がないのでこれから図書館で借りた本でも読むことにする。野崎まどという作家の「パーフェクトフレンド」とい

う本だ。内容はまだ読んでいないので全く知らないが、私はフレンドと言う言葉に惹かれてこれを借りたのだろうか。まさか。今さら友達なんか、私には無理だ。

2011年9月6日（前書き）

この文章は作者の日記ではありません。架空のものです。

2011年9月6日

9月7日（火）

そういえば昨日はハローワークの狂人専用窓口の私の担当者が出勤する日だった。行けばよかったのではないだろうか、と起きてからすぐに思い出し、後悔した。しかし今後悔してもどうにもならない。時間の無駄だ。しかし狂っているためやることの無い私には、無駄な時間が沢山残っている。だから思う存分後悔できるのだが、それは気分が悪い。でも後悔くらいしかやる事が……などといった負のスパイラルに脳が突入してしまいそうになったので、パソコンを立ち上げた。後悔するくらいならインターネットでもやっていの方がまだ健康的だろう、と思ったのだ。しかし早速気分の悪い書き込み（二トに対する支援などさつさと打ち切ってしまった、といった意見）を見てしまい、さらに気分が悪くなったので読書に切り替えた。

昨日読み始めた野崎まど「パーフェクトフレンド」は、普通だった。文字は普通より大きく、なんと午前中のうちに読み終えてしまった。内容は、タイトルがそうなのだから当たり前なのだが、友情に関する話だった。狂ってしまった私などと友達になりたがる人間は、この世に存在していないだろう。もう悔しくもなんともないが、本当に、もうなんとも思っていない。

午後、午前中にやろうとして中断していたこと、つまり後悔をやっている、窓の外に猿が現れていた。まだ動物園に戻っていないのか、などと言った感想を抱きながら、部屋から見える機会の少ない自分以外の動くものを観察していると、猿は窓を叩いた。そして「そろそろ入れてくれませんか」と言った。何故？ と私は返した。「いや、まだ残暑が厳しいもんで」私の部屋にはエアコンが取

り付けられていて、これを利用することについて家族から咎められたことは無い。「当たらせてもらえませんかねえ、エアコンに」猿が言った。そうとしか考えられない風に、猿の口は動いていた。きつと狂っているせいで見えている幻覚だ。私はベッドに横になり、布団を被った。窓を叩く音は、しばらく続いた。

2011年9月7日（前書き）

これは作者の日記ではなく、フィクションです。フィクション日記です。

2011年9月7日

9月7日（水）

気力が出ない。何かをやるのも面倒だが、何かをやらないでいると気がさらに狂ってしまいそうで、しかし何かを始めるという行為には必ずストレスがついて回るものであり、その少しのストレスで狂いが極限に達してしまいそうで、空が青くて窓を開けると風が涼しくて叫んでみても家族の誰からの反応も無く、私の狂いは進行しているようだった。

病院へ行った。病院へ行く日は、居間に下りると机の上に診察費と保険証、それから診察券と狂人者手帳が置いてある。私はこれらを持って病院へ行き、診察費以外のものは病院から帰ったら机の上において自分の部屋に戻る。すると、晚餐の時間までに何者か（恐らく家で仕事をしている母）がいつの間にか回収している。

病院では、自分に気力が沸かない事を話した。「それなら、何か趣味を見つけると良い。お金がないなら、お金のからない趣味を」読書にもインターネットにも飽きた。何か他にやるべきことは無いのか。すると医師はこう言った。「それは自分で探しなさい」丸投げされた、と少なくとも私は感じた。丸投げされた、と私だけは感じた。私だけだろうか、この発言を丸投げと判断するのは。

家に帰り着くと、母と編集者の話し声が家の中から聞こえていた。だから私は逃げた。逃げても編集者は私の部屋に乗り込むかもしれない。そして何かを破壊するかもしれない。そう考えると編集者を家に置いたまま家を離れることがとても不安だった。しかし編集者に近づくのはもっと怖かった。

本屋で立ち読みして時間を潰して、夕方近くになってから家に戻ってみてもまだ編集者は家に居た。というか、私がこっそり家の扉を開けると、今まさに家を出ようとしていた編集者と鉢合わせた。「やあ」そう言っただけで編集者は私の腹を殴った。私は吐きそうになった。しかし、堪えた。「お、君、吐きそうになったね。君の胃液で僕の服が汚れたら、もっと殴っていたところだったよ」と、編集者は母と話していたのと同じトーンでそう言った。私は玄関で膝から崩れ落ちた。編集者はそんな私の脇をすり抜けて帰っていった。腹の痛みはなかなか引かず、晚餐を取ることも困難だった。だから今日も何も食べなかった。まだ痛い。気力が出ないとか言っている場合じゃないくらい痛い。痛いのは嫌だ。嫌だが、狂った私にそれを拒絶する権利はあるだろうか。

2011年9月8日（前書き）

これは作者の日記ではなく、フィクションです。作者又は主人公が完全に狂った場合、連載は終了させていただきます。ご了承の上、作品をご覧ください。

2011年9月8日

9月8日（木）

あれは何日前だったか。今日は日記を読み返すのが面倒な気分なために正確に確かめることはしないが、榎本なごみは「私、住んでないから」と発言した。あれは一体どういうことなのだろう。住んでない？ ホームレスだって道端に住んでいる。ホームレスでない人間は家に住んでいる。住んでいない、とは、一体どのような状況なのだろう。などと考えていたら、榎本なごみが家に来た。母が対応しなかったので私が応対したところ、玄関先に居たのは榎本なごみだったのだ。

部屋に上がってきた榎本なごみに相談してみた。狂った人間でも仕事をすることは可能なのか。そして質問している最中、ハローワークの狂人担当窓口の私の担当者の出勤日が明日であることを思い出した。あと、榎本なごみの私の質問に対する答えはこうだった。「人間には、可能なことと不可能なことがあります。信じていけば夢は叶う、だなんて、卑怯な言葉だと思いませんか？ まるで人間に無限の可能性があるみたいじゃないですか」意味が分からなかった。私はいくらもかと思えた。

二人揃ってもやるべきことは特に無かったので、それぞれ別の本を読書して過ごした。私はおかゆまさきという作家の本を読んだ。ものすごい文体の本だった。ものすごく、頭が悪いことを追求した文体の本だった。頭が悪い文章を書くことも、出版することも、正気ではきつとできないだろう。この作家もこの作家の作品を認めた編集者も、この本を購入した図書館も狂っているのかもしれない。私も作家にならねるのかもしれない。「信じていけば夢は叶う、だなんて、卑怯な言葉だと思いませんか」榎本なごみがさっきと同

じことを口にした。

榎本なごみは夕方には家を後にした。そして夜になり、晚餐には、珍しく凝った料理が饗された。餃子である。キノコが入っているのかどうかは、中の具が細かく刻まれすぎているので分からなかった。あの狂いの原因と思われるキノコは味が無いのだ、みじん切りにされたら全く分からない。でもきつと入っていたのだろう。あのキノコを母が私に食べさせないとはとても思えない。ところで、どうして母は私にキノコを食べさせたがるのだろう。家族が狂った人間になって、何の得があるというのだろう。狂った頭ではそれを想像することができなかった。なので、考えないことにした。

2011年9月9日（前書き）

これは私の日記ではなく、完全にフィクションです。

2011年9月9日

9月9日（金）

そういえば、昨日は毎週木曜日に連れて行ってもらっている筈の保健センターのふれあいサロンへ連れて行けなかった。いつも母に連れて行かれる時間に、榎本なごみが尋ねてきて、その間母は私に一切の干渉をしてこなかった。榎本なごみが来た事を、母は承知していたのだろうか。しかし、私を無視しながら親としての義務だけは無言で果たし続ける母が、私に対してそんな態度を取るとは思えない。狂ってしまった私なんか気遣いなどということをやるとは思えない。母は一体どうしてしまったのだろうか。

昼間、水を飲み起居間に移動すると、母と鉢合わせた。日中は翻訳作業でほとんど部屋に閉じこもっている母と偶然鉢合わせることが稀である。昨日は私を思いやってくれたような気がするのですが、もしかしたら無視されなくなったかもしれないと思い、私は一昨日のことを母に話した。あなたの担当編集に腹をしこたま殴られましたよ、と私は伝えたのだ。母は私を無視した。やはり昨日のことは思いやりではなく、単に連れて行くことを忘れていただけなのかもしれない。

それからハローワークへ行った。そして狂人専用窓口で私の担当者になってしまったパートタイム勤務らしい中年女性と話をした。そこで私は、狂人は作家になれるか、と尋ねてみた。「それは無理よ。狂った人間が編集者さんと打ち合わせができるとは思えないわ」と返された。そうだな、と私は思った。

晚餐にはやはり無味のキノコが出された。ここで少しキノコの描写をしておこう。いつも晩に出されるキノコは笠が大きく、赤色を

していてその中に白い斑点がある。インターネットでベニテングダケと画像検索したら出て来そうな形状と色をしている。しかし毒物を口にしたときのような反応は私の身には現れていないので、きっと違うだろう。精神に異常はきたしているけれど。

2011年9月10日（前書き）

これは作者の日記ではなくフィクションです。日記の書き手と作者とは何の関係ありません。全く関係ありません。

2011年9月10日

9月10日(土)

起きると母に久しぶりに話しかけられた。その内容は「これから取材旅行だから」というものだった。母は翻訳家である。翻訳家に取材旅行などと言うものが存在するのか、翻訳という職業に詳しくない私には分からなかった。もしかしたら旅行に行ったまま帰ってこないかもしれない、などという子供じみた想像で不安になりながら、私は母を送り出した。母が居なくなつた家には、父も妹も居なかった。二人とも、私が寝ている間にどこかへ出かけて行つたらしい。

冷蔵庫を覗くとそこには冷凍食品とキノコが大量に詰め込まれていた。これらの食事で凌げ、あとキノコもちゃんと食べる、そういうことなのだろう。キノコを食べると、私の気の狂いは加速する。しかし、食べなければならぬ。そう言い聞かせるような視線を、母は出かけに私に向けていた、ような気がするのである。狂っているせいでそんな被害的妄想が浮かんただけなのかもしれないが、私はキノコをちゃんと食べることにした。食べないと後が怖いからである。

夜。父も妹も何の連絡も無く、帰ってこなかった。仕方が無いので冷凍食品のチャーハンを解凍し、キノコも茹でて食べた。いつぶりだろう、私が台所用品を使ったのは。狂っているくせに私は食べ終えた食器とキノコを茹でるのに使った鍋はちゃんと洗って拭いて食器棚に戻した。こんなにも正気的な行動が取れるのであれば私の狂いはやがて解消されるのかもしれない、と期待してみたが、すぐにキノコの影響が出て私は狂った。そして気がつくと、私は自分のベッドで自分に布団を巻きつけていた。狂っている間に私はどんな

行動を取ったのか、それはいつものように覚えていない。母はいつ帰ってくるのだろう。父と妹はどこへ行ったのだろう。私はこのまま死ぬまで放置されるのだろうか。こうして日記なんか書いている場合だろうか。

2011年9月11日（前書き）

この作品は作者の日記ではなく、完全にフィクションです。実在する人物・団体・企業とは一切の関係がありません。

2011年9月11日

9月11日（日）

朝、テレビを見てみるとプリキュアが戦っていた。宮崎はプリキュアの放送地域だったろうか、と思い、見終えてから検索してみると、放送地域ではあったが放送時間は土曜日の午前中ではなかった。私が住んでいるのは本当に宮崎なのだろうか、それとも狂ったせいで自分が住んでいるのは宮崎だと思い込んでいるだけなのだろうか。一体どんな狂い方をすれば、自分が住んでいるのが宮崎だと思い込むようになるのだろうか。

私は宮崎について、思い入れも思い出したいことも一切無い。確かに私が生まれ、育ったのは宮崎で、宮崎から引越した記憶も無いのだが、その間に、墓の中に持って行きたい思い出は一切含まれていない。私の頭の中に入っているのは思い出したくないことばかりだ。宮崎という土地が私を責め苛んで狂わせた、と言っても過言ではないだろう、と私の狂った頭は考えている。郷土愛が無いのは狂っているせいだろう。それにしても今日は日記によく「狂う」という字が出てくる日だ。

こんな日はきつと嫌なものを見てしまうだろう、と思っていたら、窓の外に猿が現れた。猿は窓の外から家の中をじつと眺めていた。入れてもらいたそうだったので、家には現在誰も居ないことだし、思い切って窓を開けてみた。すると猿はするりと家の中に入ってきた。それから猿は居間で夕方までくつろいだ。その間、私は窓を開けっぱなしにしておいた。

去り際、猿は「あなたは正常になれますよ」と私に言葉を残した。猿が喋ることくらいで、今更驚いたりしない。何せ私はくるっつい

るのだ、この猿は幻覚に違いない。猿の言葉も幻聴に違いない。私が正常になれるなんて、夢にも思っていない。自分が正常になった夢すら、一度も見たことが無い。

家族は今日も姿を見せなかった。夜、冷凍食品とキノコを食べていると電話が鳴った。榎本なごみからだった。「明日、料理を作りに行ってもいいですか」とまるで私の現在の状況を知っているかのような提案をしてきた。私は承諾した。どうせ誰も私を咎めたりしないのだ。このくらいの行動、取ったところで誰も困ったりしないだろう。

2011年9月12日（前書き）

これは作者の日記ではありません。登場する人物・団体・企業は架空のものです。団体も企業も今日の分には登場しません。

2011年9月12日

9月12日(月)

ゆらぎというものが人生を変えたとしたらそれはきつと傑作な幻覚であり、堂々巡りの末に出た結論としてはとても不適切とも言ふことができるために日付が変わってからこの日記を書いている自分は本当は9月13日の人間なわけなんです、どうにもこうにも腐っているような酒によっているような気がしてならない私の私の渡しの私の私の私の私の私の私の私の太くの致す所にも大腸菌が至るところに至っていたい、そう言う願いを思っていたところ
で不徳のいたすところだったたりもするのかもしねないと考え

上の段落は、自分でも何を考えて書いてあるのか分からない。晩のキノコを食べて狂った状態で文章を書くところのようになってしまふ。だから私はキノコを食べたくない。しかし家族からはキノコを毎日食べるように、と強要に近い形で暗に言い聞かされている。だから、家族の中で最も権利のない私はキノコを食べ続けるしかないのだ。

今日も家族は帰ってこなかった。母も父も妹も、一体どこへ消えてしまったのか。警察に相談でもしてみようか、とも考えてみたが、警察に職業を聞かれたときに、私はきつと黙り込んでしまう。それが事実であるくせに、私は自分が狂った無職の人間であることを他人に話すことを恐れているのだ。生意気にも。

昼間、ハローワークへ行こうとした。しかし、自分に一体何の事ができるのか考えをめぐらせてみたところ、上のような文章を書いてしまうほど狂っている自分にはきつと何もできないだろう、そう思ってしまったため、私は家から出られなかった。そこを我慢す

るのが社会人というものだ、ということは頭では分かっている。しかし、体が動かないのだ。実際に無能であるくせに、無能であることを社会から指摘されることを恐れているのだ。これは狂っているとかいないとかではなく、単に私が臆病なだけである。

2011年9月13日（前書き）

この日記は架空の人物のものであり、作者の生活とは一切関係ありません。

2011年9月13日

9月13日（火）

午前中に目覚める。すると母の部屋からキーボードを叩く音が聞こえてくる。母はキーボードを押す圧が強いのだ。それにしても、取材旅行に行ったのではなかったのか。いつ帰ってきたのか。私には一言も声をかけてくれなかった。午前の早い時間に帰ってきたのだろうか。私の身に一体何が起こったのか、理解ができない。

昼、榎本なごみが訪ねてきた。人が来たのに相変わらず母は部屋から出てこない。編集者が来たときくらいしか応対しないのではないかとすら思えてくる。それか、宅配便が届いたときくらいか。この日記を付け始めてから、家に一度も宅配便が届いていない。誰も何も、私の家に届けていない、ということになる。我が家の家族は世間から孤立しているのだろうか。それとも普通はそう言うものなのだろうか。

母は翻訳家であり、父は役所勤務の公務員であり、妹は大学生である。妹はともかく、父は母宛の贈り物がたまには届いてもいいものではないのだろうか。ということを経本なごみに話してみると、「うーん、お歳暮なんかは届くんじゃない？ 年末に期待してみたら？」と返された。榎本なごみは私より世間というものに精通しているようだ。

榎本なごみはビニール袋に食材を入れて訪ねてきた。それは何だ、と私は玄関で訪ねた。「昼ごはん、作ってあげようと思って」と言っ、榎本なごみは家に上がりこみ、台所に入り込み、調理器具を勝手に使って料理を始めた。上に書いた会話は、その最中に行われたものである。

榎本なごみが作った料理は野菜炒めだった。とても簡単なもので、私でも材料さえ与えてもらえれば作れそうなものだった。しかし他人の作る料理の味は新鮮で、普通の野菜炒めとは味が違うような気がした。きつと、気がしただけだ。

私は基本、一日一食の生活を送らされている。だから、昼に食事を摂った今日は、夜になっても食欲が沸かなかった。だから私は、いつも晚餐を取る時間になっても居間に下りなかった。母は私を呼んだりすることはなかった。深夜になっても、ドアの前にキノコが置かれている、ということもなかった。ちなみに晚餐の時間の最中、床に耳をつけてみると、ここ数日姿を消していた父と妹の声も聞こえてきた。ここ数日、家族は一体どうしていたのか。訊いても答えとくれないだろう。私は家族に無視されているのだから。原因を究明しようとしても、きつと無駄だろう。私は狂っているのだから。きつと幻覚だ。狂って幻覚を見たのだ。しかし、今日は狂いの原因と思われるキノコを食べなかった。明日の私は正気でいられるだろうか。今更正気になることに、私は耐えられるだろうか。

2011年9月14日（前書き）

この日記は作者の日記ではなく、
実在の人物・団体・社会とはま
ったく関係ありません。

2011年9月14日

9月14日（水）

昼、今日も榎本なごみが来た。昨日まで家族が消えていたことを話すと、「薬を飲み忘れたんじゃないやありませんか？」と言われた。しかし、私の認識している限りに於いて、病院で処方されているセルシンとドグマチールに幻覚を抑える作用は無い筈だ。家族が消えていた現象は、幻覚などでない。これは確信を持って言えるが、家族は自発的に姿を消していたのである。断じて、私が認識できなかったわけではない。と話すと、榎本なごみは首をかしげ、昼食の調理に戻った。今日も榎本なごみは昼食を作りに来ていたのである。そして私たちが昼食を食べ終えるまでの間、母は一度も部屋から出てくることは無かった。トイレに立つこともしなかったのである。母は榎本なごみを嫌っているのだろうか。それとも、何か理由があるのだろうか。

大体、榎本なごみはいったい何者なのか。先々週あたりから、ドンキホーテで私を付け回して以来私に構うようになっていたが、私は榎本なごみのことをほとんど知らない。とりあえず何かしら知っていたほうがいいだろう、と思ったので、まずは年齢を聞いてみた。すると榎本なごみは指を口に当て、「ひみつです」と言った。きつと言えないような年齢だから言わないのだろうか、と私は判断した。自信を持って言える年齢であれば、それをそのまま口にする筈だ。

今日も晚餐は取れなかった。榎本なごみの作った昼食が夜まで腹に残り続けたせいである。昨日に続いて今日もキノコを摂取しなかったことになる。このままだと、私の狂いも解消されたりするのだろうか。そんなことはない、そんな気がした。なぜなら、さっきまで私は狂っていたからだ。……さっきまで。朝の時点では、私は狂

っていなかった。夕方からついさっきの深夜にかけてまで、私は狂っていた。私の狂いには時間が関係しているのかもしれない。

2011年9月15日（前書き）

この日記は作者の日記ではなく創作であり、作られた代物です。
今、同じことを何度も書いたような気がします。

2011年9月15日

9月15日（木）

見知らぬ男に殺される夢で目が覚めた。そして目が覚めた私は、夢の中で私を殺した男が見知らぬ男ではなく、母の担当編集者であることを思い出した。いったいどうしてこんな夢を見たんだ。そんなにあの編集者のことが怖いのか。と黙っていると、階下から声が聞こえてきた。それは母と編集者が居間で打ち合わせしている声だった。

話がひと段落ついたのか、母と編集者の話はいったん途絶えた。すると、これはもう「いつものように」と表現してもいいのかもしれない、階段を上ってくる音が聞こえてきた。編集者が上ってくる音だろうな、と思っていたらその通りで、編集者はまたしてもノックもせずに私の部屋の扉を開けた。今度は何を破壊するつもりなのか、そんなに私にストレスを与えて何のメリットがあるというのだろうか。愉快なんだろうか。もしそうだとしたら、私も今度やつてみようか。

夢の中で見知らぬ殺人者として登場した編集者は何も壊さなかった。その代わり私に言葉をかけた。「僕は君が生きていることに価値を感じないんだよね」私も同感だったので、首を縦に振った。「狂ってるなら、薬、飲んでるんだろ」「あれ、効かないから。いくら飲んだって無駄だよ。君は気が狂った末に自殺して死ぬ。そして死体から漂う腐敗臭で、死してなお周りの人に迷惑をかけるんだ」ならば私にどうしろというのだ。「君、死ぬときは焼身自殺するんだよ。そうすれば死体の処理も楽だし、灰になるから腐敗臭もしない」まるで私が自殺することが決まっているかのような言い方だった。「決まってるじゃないか。頭狂者の末路なんか、みんな同じだ」

東京？「頭狂」それは私の知らない言葉だった。

晩餐にキノコが出た。赤く、白い斑点のある、味のないキノコを私は今日も食べなければならなかった。うどんの具として出されたのだから残すことは容易だったが、食べないでいるといつも冷たい家族の視線がさらに冷たくなりそうで、口に入れないわけにはいかなかった。これできつと、私は明日も狂うのだろう。そしてやがて焼却炉に身を投げ込むのだろう。今日、私は、編集者に頭の中を殴られた。

2011年9月16日（前書き）

これは作者の日記ではなく、創作であり、実在の人物、団体、会社名とはいっさいの関係が無いので残念だと作者は思います。

2011年9月16日

9月16日（金）

起きてから気がついたのだが、昨日、私は母にふれあいサロンに連れて行ってもらえなかった。編集者が来ていたからか。まあ、私をふれあいサロンなんかに連れていくことと仕事の打ち合わせのどちらが大切かといえば、それはもちろん仕事上の付き合いなのだろうから、仕方がないのだ。大体、私はふれあいサロンに行きたくて仕方がないわけでもないことだし。しかし一度ならず二度も休んでしまった。来週以降、行きづらい。いつそのまま行くのをやめてしまおうか。行っても何も起こらないわけだし。

と思っていたら、母は私を呼び寄せ、車に乗せた。どこへ連れて行かれるのか尋ねてみると、保健センター、と答えが返ってきた。保健センターは毎週木曜日にふれあいサロンが開かれる施設の名前である。一日遅れの今日行ってどうするつもりなのだろう、と思って尋ねてみたが、母は舌打ちを返した。これからやりたくないことをやらなければならぬ、そのことを嫌がっている風だった。今日の母は感情が剥き出しだった。

保健センターの生活保健窓口に連れて行かれた。母が自分と私の名前を告げると、奥から私に数ヶ月前に狂人手帳を手渡した、私の担当者らしい人物が現れた。そして母は私の狂人手帳を担当者に手渡し、何らかの手続きを始めた。私にもなんだかよく分からない用紙が手渡され、氏名と住所の署名を求められた。そして母と担当者は生活補助金の話を少しして、窓口から立ち上がった。帰りの車に乗りながら、母は「ああ面倒くさい」と呟いた。保険金が入るから良いのではないか、と私は思ったが、「働くのとどっちが入ってくと思う？」と返された。入ってくる、というのは、家に金が入っ

てくる、ということなのか、と問い質してみると、またしても舌打ちが返ってきた。私の理解力の低さにイラついたのだろう、きつと

あと、これはもうついででいいだろう、今日の晩餐にもキノコが入っていた。昨日より量が多かった気がする。

2011年9月17日（前書き）

この作品は作者の日記ではありません。実在の人物・団体・組織名とは一切の関係がありません。

2011年9月17日

9月17日(土)

今日は週末であり狂っていない人間が大挙して外に出歩いているので外へ出たくなかったが、借りていた図書の返却期限が来ていたので、図書館に出かけないわけにはいかなかった。外に出ることも自転車に乗ることも好きではないが、図書館は嫌いではない、人がうるさくないからだ。と思っていたのに、図書館へ到着すると、一人の狂人が暴れていた。図書の返却期限が過ぎていることを注意されたのがきっかけで、図書館員に文句をつけ始め、それがエスクレートしたらしい。私はそそくさと図書を返却して図書館を出た。そして狂人がいなくなるまで家で待機しようと思い、一旦家に帰ることにした。

家に帰ると電話がかかってきた。今日も母は電話に対応しなかった。なので私が出てみると、やはり榎本なごみからだった。母は榎本なごみからかかってくる電話を察知することができる特殊能力でも有しているのだろうか。などと考えながら、榎本なごみと少し話した。その際、頭狂というものについて知っているか、と尋ねてみた。二日前に編集者から言われた言葉だ。「すいません、知りませんねえ」と返された。謝られたのなんて何年ぶりだろう。

図書館へ戻ると狂人の姿は消えていた。まるで最初から狂人など来ていなかったかのような雰囲気だった。それが不気味でなんとなく気持ち悪かったが、本を何冊か選んで借りた。私は図書館員に文句をつけたりしなかった。そうする理由がないからだ。しかし、私は狂っているから、図書館員になんらかの因縁でもつけるべきではないだろうか、と変な義務感に少しだけ駆られた。しかし図書館を出入り禁止にされたら本を調達する手段が無くなってしまうので、

そうはしなかった。もしかしたら私はもう狂っていないのかもしれない。

そして晩、食事に混ざっていたキノコを食べると、私はあつく狂った。そういえば私以外の家族に饗される食事にはキノコは入っているだろうか。母に尋ねてみた。「入れるわけないじゃない、狂うわよ」どうやら母は私だけを狂わせたいらしかった。その真意は分からない。なぜならキノコを食べて狂ったからだ。

2011年9月18日（前書き）

この作品は作者の日記ではなく、
実在の人物・団体・組織名とは
一切の関係がありませんよ。

2011年9月18日

9月18日(日)

キノコを食べたくない由を母に伝えてみたところ、「馬鹿じゃないの?」と一蹴されてしまった。なぜ私は母によって狂わされ続けるのか、なぜ私は来るっていなければならないのか、それらを尋ねてみてもきつと答えてはもらえないだろう。母は私に冷たい。世界が私を貶めようとしている。

昼ごろ、母は私に「部屋を出るように」と言ってきた。何かあるのかと思いきや、なんと母と編集者の会食に出席させられた。こういうことは二人きりで行くべきではないのか。それと私は編集者と顔を合わせたくない。母と編集者と私は、ファミリーレストランで昼食を摂った。母と編集者は仕事の話を変えながら和やかに話し、編集者は私がいないように振舞った。安心はしたが、母も同様だった。母も私がいないように振舞ったのだ。私はどうしてこの場に呼ばれたのか、何度も尋ねた。しかし二人は私を無視し続けた。これは何の罰なのだろう。

たった一行動だけ、会食中に母が私に干渉して来た。それは、ジップロックに入れられた刻んだキノコを、私が注文したオムライスに載せる、というものだった。食べる、ということなのだろうか。そう尋ねてみても母も編集者も私のことを無視した。なので私はキノコごとオムライスを食べた。それから狂ったので、会食がどう終わって私と母はいつ家に戻ってきたのか、わからない。

晚餐は饗されなかった。なので夜は、本を読んでいた。図書館で借りた本の中に、「頭狂」というタイトルの本があったのだ。作者はバナナ・バナナという、国籍不明の覆面作家だった。いや、これ

は小説である、とも本には書かれていなかった。もしかしたらノンフィクションかもしれない。ちなみに訳者は母だった。

2011年9月19日（前書き）

これは作者の日記ではなく架空のものであり、
実在の人物・団体・組織名とは何の関わりも持っておりません。

2011年9月19日

9月19日（月）

昼間、いつものように何もやることがないので本を読んでいるとベランダにサルが現れた。私は猿の見分けがつくわけではないが、今日現れたサルは、なぜか頭が良さそうに見えた。この間サルと話したからそういう感覚に目覚めたのかもしれない。そこで私は、サルに話かけてみた。お前は本を読むか、と。「お前、とはご挨拶ですね」とサルは言った。そこで今度は丁寧語に直して、同じことを問いかけた。「読みますよ。私は本を読むサルなのです」サルは今度は答えてくれた。

動物園に戻らないのか、と私はサルに尋ねてみた。もちろん、応対してほしいので丁寧語で。「私が動物園から逃げ出したサルだと思っっているのですか」私は8月に見た動物園から逃げ出したサルの映像を鮮明に覚えているわけではない。しかし、目の前にいるサルは、動物園から逃げ出したサルなのではないか、と感覚的に、そう思ったのだ。日本で野生のサルなんかそう生息してないだろうし、日本で会える野生のサルは大体が動物園から逃げ出して野生化したサルだろう。そうも思った。「もう少ししたら、動物園に戻ってやろうと考えていますよ」とサルは言った。そして何も言わずに、ベランダから出て行った。話相手のいなくなった私は、読書に戻った。

晩、いつものようにキノコが出た。この味のない赤くて白い斑点のあるキノコは一体何という種類のキノコなのか、と母に尋ねてみると、「マザーよ」と何の困難もなく答えてくれた。マザー。母。今日はなした相手はサルと母。昨日話した相手は、編集者と……いや編集者は私のことを無視し続けたから、母のみ。私の生活には母親というものが密接に関わっているような気がする。それから、こ

れからマザーという種類のキノコについて検索してみようと思う。

2011年9月20日（前書き）

この作品は作者の日記ではなく完全にフィクションです。そうに決まっています。

2011年9月20日

9月20日（火）

我が家には私の部屋と母の部屋にそれぞれパソコンがあつて、私の部屋のパソコンは私がまだ狂つていなかったときに買ってもらったものだ。このパソコンが壊れたらきつと買い換えてなどもらえないだろう。そして一日の大部分の時間が今よりもっと空虚なものになってしまつたろう。パソコンはいずれ壊れる。ほかの電化製品より早く壊れる。私はそれを恐れている。毎日緊張しながら慎重にパソコンに触れている。

そんなパソコンが今日、異常動作を起こした。インターネットブラウザが立ち上がらなくなったのだ。これでは検索ができない。インターネットで「マザー」を検索できない。

不安。空虚。嫌な静寂。に襲われた私は、台所の冷蔵庫から酒を盗み飲んだ。そして酔った私は、自転車を駆けていた。空は曇っていた。行先は図書館だった。図書館で植物辞典を開き、「マザー」について調べるつもりだった。

しかし図書館では、植物辞典がすべて本棚から消えていた。持ち出し禁止なので貸し出し中ということはないのだが、誰かがどこかの席で開いているのだ。仕方がないので私は全然興味のない女性作家のエッセイを読みながら植物辞典が本棚に戻るのを待った。エッセイには女性の本音が書かれていてどうでもよかった。あと酔いが回っていたため内容はあまり頭に入ってこなかった。それでもどうでもよかったことが思い出せるくらいだから、相当どうでもいいことが書いてあつたに違いない。

結局、閉館時間まで粘ってみても、植物辞典が本棚に戻ってくることはなかった。一体どのどいつがこんなに大量に植物辞典を開いているんだ、と腹を立てながら、私は思った。「マザー」はキノコである。キノコは菌類だ。植物辞典に載っているのだろうか。確かめたかったが閉館時間になったので図書館から出なければならなかった。

晚餐にいつものように「マザー」が出た。食べた。夜になってもまだ酔いの余韻が残っていた。酔って狂って、私は気持ちが悪くなった。しかし吐かなかった。トイレに行ってみたが、吐けなかった。

2011年9月21日（前書き）

これは日記という形式を使って書かれています、作者の日記ではありません。フィクションであり嘘っぱちです。

2011年9月21日

9月21日（水）

朝、急に吐き気に襲われて、ベッドから飛び降りてトイレに飛び込んで大量の昨日から残っていた酒と胃液を吐いた。どうせなら夜に食べたキノコも吐いてしまいたかったが、ほとんど消化されてしまった白いなんだかよくわからない物体しか出てこず、キノコを吐いたという実感はなかった。現に私は今、狂っている。

昼間、病院へ行った。狂っているのを治療するため、という名目で通ってはいるが、一向に狂いが治る気配はない。今日の診察でも狂いが治る兆候は見られない、とのことだった。先生に、ブラウザが壊れてインターネットができないことを話した。他に話すべきこともなかったからだ。「じゃあ、読書でもしたらどうだ？」と言われた。言われなくてもそうするしかなかった。「それが嫌だったら、何かお金のかからない趣味でも見つけるとか」それはインターネットで検索しなければ探し出せそうになかった。私には自由に使えるお金がない。大抵の趣味にはお金がかかる。そしてお金のかからない趣味とは何か。インターネットで探さない限り、そんなものは永久に見つからないような気がする。

帰り際、受付で紙をもらった。いつももらっているはずなのに、その紙の名前が思い出せなかった。狂いが進行しているからかもしれない、と思った。紙には「処方箋」と書かれていて、それを見てやっと紙の名前が思い出せた。この物忘れは何なんだろう。人間としての退化か。狂っているせいで変な生活を続けているため、人間として退化しているのか。

晩に、キノコの「マザー」が入ったスープが出された。私はそれ

を黙って食べた。食べ終えてから、トイレに入って、顔をトイレの
穴に向けてみた。吐けそうな兆候は見られなかった。兆候、と書き
たかったただだ。

2011年9月22日（前書き）

これは作者の日記ではなく、実在の人物・団体・組織名とは何の関係也没有せん。

2011年9月22日

9月22日（木）

今日はふれあいサロンへ連れて行かれた。インターネットブラウザが壊れているため、他人の言葉を聞く数少ない機会となっている。私は、誰とも話さずに本を読んで過ごした。なぜなら、狂った私には他人と話す技術がないからである。しかし、私以外のふれあいサロンへ来ている狂人たちは、ほとんどが他人と会話できている。それがどうしてなのか、私は狂っているので分からない。しかし他人と喋れているふれあいサロンの参加者たちも狂っている。これはどういうことなのか、私は狂っているのだ。

帰りの車の中で、パソコンのブラウザが壊れたことを母に伝えてみた。当然のごとく無視された。最近はまだ無視されていないので話を通じるのではないかと期待してみたが、やはり親というものは狂った子供には厳しいものなのだろうか。私は親になったことがないし、きっと今後の人生で親になれる機会も無いだろうから永久にわからない。

帰ると編集者が待ち構えていて、母と編集者が打ち合わせを始めた。私は二階の自分の部屋でじっとしていた。やがて階下から聞こえてくる言葉が止まり、誰かが階段を上ってくる足音が聞こえてきた。きっと編集者だろう、と諦め半分に予想していると、案の定編集者で、やはりノックもせずに私の部屋のドアを開けた。「パソコン、壊れたんだって」どうして知っているのか尋ねると、母から聞いた、とのことだった。「じゃあいないね」と編集者はテーブルを引っっこ抜いてテーブルから落とした。私の部屋の床には、腕時計を壊された時とは比較にならないほど大量の残骸が散らばった。編集者は片づけもせずに部屋を出て行った。

晩餐の席で、母に「そろそろ部屋を掃除しなさい」と言われた。私はいつものように食事に混ざっていたキノコを食べた。そして狂った。部屋の掃除どころではなくなった。

2011年9月23日（前書き）

この作品は作者の日記ではなく、
実在の人物・団体・菌類とは何
の関係もありません。

2011年9月23日

9月23日（金）

榎本なごみが久々にやってきた。いつものように、母が仕事のため部屋に閉じこもっている時間を狙い絞るように。そして榎本なごみはノートパソコンを持ってきていた。神かもしれない、と私は思った。もしくは天使か。そうでなければ不審者だ。ストーカーという考えも思いついた。しかしどうして私のパソコンが破壊されたことを予知したようにパソコンを持ってきたのか、と私は榎本なごみに直接尋ねた。「あなたのパソコン、旧式でしたから。可哀そうになって、買って来ちゃいました」買って来ちゃいました、で買えるような金額のものではないだろう。「私、お金持ちなんですよ」そう言つと榎本なごみはにっこりとほほ笑んだ。私は一つの可能性を頭に浮かべてみた。榎本なごみと編集者が結託している、という可能性だ。

早速ノートパソコンを、かろうじて無事だった電源とLANケーブルにつなぎ、セットアップCDを使ってインターネットに繋ぎ、「マザー」という名のキノコについて検索する。これをすべて、榎本なごみと二人でやった。その結果、何も出てこなかった。インターネットの世界には「マザー」というキノコは存在しないらしいのだ。「お母さんが嘘をついたんじゃないやありませんか？ あの人、あなたの味方じゃないみたいですから」そうか。ところで榎本なごみは母と顔を合わせたことも無い筈である。「あなたからお話を伺う限りでは、そういう気がしてなりません」そう言つと榎本なごみは憤慨したような表情を作った。ものを貰っておきながら、私は失礼なことに榎本なごみに疑念を抱いた。

部屋の破壊されたパソコンの残骸は、未だにそのままにしてある。

ごみ箱に突っ込もうと思ったが、デスクトップのモニターが分厚いパソコンだったので、入りきらなかったのだ。

それから、榎本なごみが帰ってから母によって出された晩餐にはいつものようにキノコが出た。昨日と同じく、食べた後は狂ってしまつて片づけるところではなかった。しかしインターネットくらいはできた。狂っていてもできるのだ、インターネットというものはキノコ、マザー、という検索ワードの間に、サル、という思いっきの言葉を挟んでみた。すると一件ヒットした。「隠しページによるこそ」とそのページの頭には書いてあった。キノコ関連で隠すようなことがどこにあるのか、と私は思った。

2011年9月24日（前書き）

この作品は作者の日記ではありません。フィクションです。

2011年9月24日

9月24日(土)

家族が動物園へ行った。私は家にいた。特に動物園に行きたかったわけではないし、動物園に行きたいか、と尋ねられたわけでもない。それでも家族が私を置いて動物園に行ったことは分かった。部屋でインターネットをやっていると、階下から家族の会話が聞こえてきたのだ。その話の断片をつないでみると、これから自分たちだけで動物園に行く、上にいる穀潰しには伝えなくてもいいだろう、放っておこう、という内容の会話だった。その間の戸締りをどうするつもりなのかについては、何も聞こえてこなかった。私に家から出ないよう言わなくてよかったのだろうか。とにかく、家族は動物園に行った。私を置いて動物園に、恐らく遊びに行った。遊び以外の目的で動物園に行く理由が分からなかったから、そう思ったのだ。

これはチャンスだった。私は編集者に破壊されてからずっと部屋に残っていてごみ箱にも入りきらないので捨てられないパソコンの残骸を、家族がいない隙に一階のごみ箱に捨てることにした。少しずつ分解して自分のごみ箱に入れ、下のごみ箱まで持って行ってこれを映す。これを数度繰り返し返すと、下のごみ箱もいっぱいになり、私のごみ箱にもその余りが出た。自分のごみ箱に残った余りの残骸については、後日どうにかすることにしよう。

インターネットでもう一度キノコ「マザー」について調べてみることにした。昨日と同じく「キノコ サル マザー」で検索して昨日の晩に見たページを見てみた。そこによると、このキノコを食べて自失した人がいる、このキノコを食べて動物と話せるように錯覚した人がいる、このキノコを食べて以来狂人として暮らしている人がいる、という、死にはしないが恐ろしい毒をもったキノコである、

と書いてあった。現在は絶滅している、とも書いてあった。

じゃあ、このキノコはなんだろう、と晩餐に出されたキノコについて私は思った。晩餐は母が帰り際に買ってきたほっともつとの弁当だった。そのご飯に、無理やり味のないキノコが混ぜ込んであった。このキノコの名前はマザーで本当に合っているのか、と母に確認をとってみた。「マザーで合ってる」と母は答えた。しかしインターネットで調べたらマザーというキノコは絶滅している、と私はどの方向にか分からないがとにかく念を押してみた。すると母は「あんたの分のプロバイダ、解約しておいたほうがいいわね」と言い出した。それは勘弁してください、二度と調べないから、と私は母に頼み込んだ。

2011年9月25日（前書き）

これは作者の日記ではなくフィクションですよフィクション。

2011年9月25日

9月25日(日)

早朝、私は誰も起きないうちに一階に下りて、冷蔵庫から酒を盗み飲んだ。日曜日の私にはやることなく、やることのない私は酒に狂って眠っておくくらいしか世間への迷惑をかけずに過ごす方法がないのだ。もちろん、世間への迷惑とかのくだりからあとは後付けのきれいごとである。狂った私に世間への迷惑がどうのこうの、そんなことをとっさに考える能力などない。

午後、そろそろ読書にも飽きてきたころ、猛烈に酒が飲みたくなった。アルコールというものは中毒症状があるのかもしれない。そういう点に於いてはおくすりと同じようなものなのかもしれない。そう思った私は、台所へと向かおうと何回か思ったが、今は昼だし、家族がいる可能性がある。家族の目の前で酒を盗み飲むことは、さすがに狂った私でもできない。なので私は必死で我慢した。手が震え、厚くもないのに汗が出た。酒はやめておいたほうがいい、と私は思った。

夜。晚餐に於いて、食事を前にした私は、食前酒を飲んでもいいか、と許可を取ろうとしてみた。もちろん許可は下りなかった。「あんた、酒にまで狂うつもり？」とすら言われてしまった。キノコを食べさせて狂わせているのはお前だろう、と言い返したくなかったが、酒に狂っているのは事実だし、私の発言権はこの家では猛烈に小さいのだから言わないでおいた。酒に振り回された一日だった。

2011年9月26日（前書き）

この作品はフィクションであり、作者の日記などでは断じてありません。断じて。

2011年9月26日

9月26日(月)

キノコを食べた直後はあまりにもあまりな状態に陥るので自分でも狂いすぎているのがわかるから、その時間に日記は書かないのだが、それ以外の時間である現在、日記を書いている私は、どの程度狂っているのか、自分ではわからない。狂っていることだけは自覚できるのだが、その度合いが分からないのだ。だから、この日記に書いてあることも、どの程度真実なのか分からない。私の主観で変なものが見えていて、それが幻覚だと気づかないまま日記に書いてしまっているかもしれない。家族は私が狂うより前から居たのは分かっているが、榎本なごみも、サルも、私に危害を加える編集者も、実在しているという証拠は私の中にしかないのだ。狂っている私の中にしか。

もう調べないと母と口約束したにもかかわらず、キノコの「マザー」が気にかかった。絶滅したとネットには書いてあったキノコをどうして母が持っているのか。図書館へ行って調べようとしてみた。しかし月曜日だったので閉館日だった。東京には月曜日でも開館している図書館が存在するらしい。東京がうらやましい。宮崎が疎ましい。

晚餐の直前、酒の発作が来た。体が急に酒を欲しがったのである。しかし盗み飲める時間ではなかったので、我慢するしかなかった。我慢しながら味のないキノコの入った晚餐を黙って食べた。この症状がとても嫌だ。酒の発作が起ると気分が悪くなる。しかも吐き気が伴わない。つまり、食べると狂うキノコを吐くことができないのである。苦しい。

2011年9月27日（前書き）

この日記はフィクションであり、作者とは何の関係もございません。
ん。ございませんとも。

2011年9月27日

9月27日（火）

今日は狭間の日だ、なんてことを思った。今日は何も起こらなかったからだ。こんな日の日記には何を書けばいいのか、なんだか悩むが、読むのは自分しかないのだから、「今日は何事もなかった」と書けばいいのではないか。でもそんなことを一度やってしまうと、明日からも日記が一行で終わってしまう日が続いてしまう気がする。だからこうしていただらとわざわざ「今日は何事もなかった」を引き延ばしている。

少し考え事してみた。榎本なごみとは何者なのだろう。嫌いではない、私を邪険に扱わないからだ。むしろ構ってくれてうれしい。しかし何者なのだろう。何らかの形で調べられるのなら調べたい。しかしネットで検索してもわかるわけがないだろうし、じゃあハローページ？　うちにハローページなんてあったのだろうか。探してみたが見つからなかった。

晩餐の席で、母に何気なく尋ねてみた。最近は何があったのか知らないが、母は普通に言葉を交わしてくれる。いつものように味のないキノコを口に入れながら、母に尋ねてみた。編集者の名前は、一体なんというのか。「榎本なごみっていう名前よ」母は親切にも編集者の下の名前まで教えてくれた。しかし編集者と榎本なごみの名前が一緒だと日記に書いていて混乱するので、というか現在私は混乱しているので、これからも編集者のことは編集者と表記することにしよう。それにしても、二つの意味で何者なんだ、榎本なごみは。

2011年9月28日（前書き）

この話は作者の日記ではなくフィクションです。虚構です。

2011年9月28日

9月28日（水）

二週間に一度は水曜日に病院へ行かなければならないのだが、今週は通院の週ではないので今日は家にいた。ずっと家にいた。家から一步も出なかった。昨日も一步も出なかった気がする。こんな生活を続けていても太ったりしないのは、母が晚しか食事を出してくれないおかげなのだろう。感謝すべきか。

昼間、榎本なごみが家に来た。編集者のほうではなく、私に親切なほうである。この親切に私は甘えているのだろう。こう書くことにすごく抵抗があるが、私は榎本なごみの親切に甘えている。もうすぐ依存になるだろう。私は依存しやすい性格をしている、と自覚しているから。

そんな榎本なごみは私に行った。「外を歩いてみようよ。血行が良くなって精神的にも健康的になれるよ」その提案を、私は渋った。家から出て、幼少期からずっと過ごし続けている近所の風景を眺めながら歩き回るなんて、考えただけでうんざりする。「やってみようよ、一步踏み出せば結構行けるもんだよ」私は榎本なごみに礼を言いたくなかった。こんなにも私のことを考えてくれる人物なんて、きつと今現在のところ榎本なごみただ一人だろう。私は彼女に頭を下げて、彼女の提案を断った。「そっか」と榎本なごみは「いつでもいいから、いつかやってみてね。ウォーキング」と言い残して、彼女は去っていった。

晩餐の席で、母に東京に行きたいと言ってみた。すると母は私を無視した。さすがにこの頼み事は都合が良すぎる。私は動物園に連れて行かれない程度には、家族に冷たくあしらわれているのである。

大体今から東京に引っ越すとなると、福祉の面倒な手続きをもう一度やらなければならない。それでも、旅行で行ってみるくらいはできないだろうか、私は醜く食い下がった。母は私に「キノコを食べなさい」と言った。

2011年9月29日（前書き）

この日記はフィクションであり、作者とは何の関係もありません。
もつすぐ十月ですね。でも何の関係もありません。

2011年9月29日

9月29日（木）

今日はふれあいサロンに連れて行かれた。そこでは、最近働き始めたことを自慢げに話している人物がいた。その仕事の内容とは、ビル清掃のアルバイトらしかった。サロンに集まった人々から、口々に「すごい」「すごい」と言われていた。ふれあいサロンに通うような狂人たちはまともに働くことをとても困難なことに設定している。私だつてそうだ。だから自慢げに話していた人物は、私より立派なのだろう。私より年上だし。私より太っているし。

その人物に気力を大量に使って話しかけて、オセロ（ふれあいサロンには数種の盤ゲームが常備されている。暇つぶしのためなのだろう）をやってみた。負けた。オセロの勝ち方とは、角の隣の位置に自分の色の意志を置かないことと、相手に自分の色を囲ませるようにさせることだと、インターネットで見たことがある。その人物もその勝利法を知っているらしい石の置き方をしていた。

晩に家に帰り、いつもの味のないキノコが入った晚餐が終わった後、待望の吐き気が襲ってきたのでトイレに入ってみた。しかし吐き気はこみあげてくるのになかなか吐けなかった。私にはこの吐き気の原因が分からなかった。これを書いている今も、気持ち悪さは続いている。数分おきに込み上げてくる。でも吐けない。この気持ち悪さが続く限り、私は歯を磨くことができない。食べ物と箸以外のものを口の奥に突っ込むとえづいてしまうからだ。だから今の私の口の中は非常に不潔である。

2011年9月30日（前書き）

この物語はフィクションであり、事実・実在・実存などとは何の関係也没有せん。

2011年9月30日

9月30日（金）

一昨日榎本なごみに言われたことをずっと気にしていたわけではないが、忘れる理由がなかったので忘れなかった。なので私はそれを忘れるために、とうかやさしくしてくれる人の言いつけを守るために、一人でウォーキングに出た。ネットでも吐き気というものは胃の血行が悪くなっているせいだと書いてあった。最近、常には腹の底で吐き気が渦巻いているので、少しでも歩くことでこの症状が改善されないか、と期待して私は近所を歩きに出たのだ。でも晩餐後のキノコを吐くための吐き気は必要だと思っている。

近所の情景は見れば見るほどうんざりした。何も思い出というものが無いからだ。幼少期、私には友達がいいた。今は狂っている私にも、子供のころは友達というものが存在していたのだ。ただ、中学校に入学するとともにここに引越してから、私は友達が作れない体質になっていた。転校を機に人見知りになったのかもしれない。それとも幼少期の友達は、親同士が仲が良かったからそれに影響されるように付き合っていた友達だったのか。新しく引越した先で、母は友達を作らなかった。ずっと部屋にこもって翻訳作業に精を出している。いや、子供が中学に入ってから親同士が仲がいいからと言って友達になつたりする相手なんかできるものだろうか。そんなわけないな。歩いているとそんな考えが次々と浮かんできて、私の気は沈んだ。ついでに吐き気も沈んだ。

晩餐後、母は誰かと電話していた。きっと編集者だろう。電話口で時折「榎本さん」と言っていたから。母と編集者は友達と呼べる関係を築いているのだろうか。そんなわけないだろう、きっと。仕事相手に友情を感じるなどということは、多分、無いと思う。私が

仕事をやっていた時も、そうだったからそう思ったのだ。ところで私と榎本なごみは友達だろうか。これは違う、とはつきり断言できる。何故なら、私は榎本なごみに対して何もやっていないからだ。友達というものは何かをやったりやり返したりするものだ、と私は知っている。

2011年10月1日（前書き）

これは作者の日記ではなく、フィクションです。

2011年10月1日

10月1日(土)

今日は朝に目が覚めたのだが、起きると寒かった。冷たい空気を大きく吸い込むと、吐き気がこみ上げてきた。私の胃は弱くなっているのかもしれない。何の原因なんだろう、最近飲んだ酒のせいだろうか、と思いながらトイレに行つて、便座に向けて腰を曲げてみた。しかし吐けなかった。昨晚飲んだキノコもとくに消化してしまっているだろうし、今更吐いたつて胃液しかでないだろうことは分かつていた。それでも吐き気は引かなかった。

昼ごろ、屋内が暖かくなるとともに、吐き気は引いて行つた。と同時に、榎本なごみが訪ねてきた。そしていつものように私と榎本なごみは居間に入ったのだが、そこへいつもは榎本なごみが来ている間は部屋ですつと仕事をしている母が部屋から出て、居間に入ってきて、榎本なごみと顔を合わせた。初対面である。初対面のはずである。母は榎本なごみに向かって、「あら、榎本さん、来てたんですね」と言つて、水を飲んで部屋に戻つていった。私は榎本なごみに、何も訊ねなかった。怖かつたから何も訊ねなかった。あの編集者と榎本なごみが何らかの関係性を持っているかもしれないことを、想像するだけで恐ろしかつた。恐ろしさのあまり、私は今日榎本なごみと話した内容を忘れた。今思い出そうとしても思い出せない。

それなのに、母は晩餐の席で言つた。「榎本さんがあんたを訪ねるなんて、珍しいわね」と。私はきつと狂っているのだ、だから母がそんなことを言っているように聞こえるのだ。私はそう決めつけて、晩餐に混ざっていたキノコを掻き込むように口に入れた。そして飲み込んだ。そして部屋に戻つて狂つてそれが少し正氣に戻つて、

今これを書いているのだが、本当に何者なんだ、榎本なごみという少女は。榎本なごみという編集者は。

2011年10月2日（前書き）

これは作者の日記ではなくフィクションであり、登場する人物・団体・風景は架空のもです。

2011年10月2日

10月2日(日)

朝、早く目覚めたので一階の居間で朝のアニメを見ていた。見た
くて見ていたわけではなく、今日も始まるであろう退屈な一日の時
間を潰すために見ていたのだ。こう書くと言い訳臭くなって嫌だが、
事実である。それでアニメを見ていると、妹が一回に下りてきた。
テレビの音がうるさくて目が覚めたのかと思っていると、妹は私の
傍らからリモコンを取り上げ、電源ボタンを押した。すると朝の一
週間を振り返る系のニュース番組が始まった。何が起こったのか、
私には理解が及ばなかった。なので、きつと私が狂っているせいで
こんなことになっているのだろう、と強引に自分の中で納得するこ
とにした。

吐き気が昼になっても収まらないので、仕方なく歩きに出た。見
たくもない近所の風景から少しでも離れるため、少しだけ遠出をす
ることにした。と言っても前回より少し長い距離歩くだけである。
家から40分近く(時計も携帯も持っていないので体感時間)歩く
と、私がかつて通っていた高校の前に到着した。その高校の校舎の
中に、榎本なごみと言えなくもない影を見かけた。ような気がする。
しかし今朝のテレビのこともあるから、これも私の狂いが見せた実
在ではないものだったのかもしれない。

晚餐の席で、私はテレビの電源を入れてみた。すると夕方のアニ
メをやっていた。母にテレビが今点いているか確認をとってみると
「ついでるわよ」と帰ってきた。じゃあ私が今朝見ていた番組は何
なんだろう、という思いが頭の中を過ったが、それについて深く考
えるには私は既にキノコを摂りすぎていて、頭の中が狂い始めてい
たのでそれは不可能だった。

2011年10月3日（前書き）

この作品は作者の日記ではなく、完全な純然なフィクションです。

2011年10月3日

10月3日（月）

危うく一日日記を飛ばしそうになったことをきっかけに、日記を書き始めた当初の日記を読み返してみた。すると、今より長く書いていることに気が付いた。私は今、日記を書くことを面倒くさがっているのか。他にやることもない癖に。それとも狂っているのが進行しているせいで書ける文章量が減っているのか。そんなわけがないだろう。何でもかんでも狂っているせいにするのはよくない。こんなことを考えてしまうのは私が狂っているせいだろうか。

昼間、榎本なごみが来た。学校はいいのか、と尋ねてみた。すると榎本なごみは、「私、学校行つてないよ。あなたと同じところがあるから」と言った。一昨日高校の校舎内で見た榎本なごみは幻だったのか、それとも私の見間違いだったのか、そもそも榎本なごみは私に対してため口を使うほどフランクな性格をしていたのか。何もかもが思い出せなかったのは私が狂っているせいだろう。いや、何もかも狂っているせいにするのはよくない。それともこんなことを考えてしまうのは私が狂っているせいだろうか、いや、何もかも狂っているせいにするのはよくない。

何もかも狂っているせいにするのはよくない。だから晚餐に今日もキノコが出たが、それを食べなければならぬと考えてしまうのも自分が狂っているせいだと考えるのはよくない、と思い、普通に食べた。するといつものように食後に大きな狂いがやってきて、意識が飛んだ。意識が飛んでいる間、自分が何をやっていたのか全く思い出せない。これは私が狂っているせいだろうか。いや……

2011年10月4日（前書き）

この日記は作者の現実とは一切の関係がなくフィクションです。
すべて想像であり、作者の頭の中の出来事であります。

2011年10月4日

10月4日（火）

昨日、榎本なごみが来ていた。その際、キノコ「マザー」について調べてもらうよう頼めばよかったのではないかと、昼前に起きた私はぼんやりとした頭でそう思った。自分で調べることは母に禁じられているなら、他人を使えばいいのではないか。しかし、こんなにも榎本なごみに依存するように頼るのは、いつか榎本なごみが家に来なくなったときにつまらなくなってしまっから控えるべきではないのか。このうっかり気を抜くと依存してしまう癖は、私が狂っているから出てくるのだらう、いや、何もかも狂っているせいにするのはよくない。このフリーズは昨日の日記に異様なほどの回数登場している。昨日の私には何があったのだらう。

昨日の私は今日の私より狂っていたような気がする。まず、吐き気がすごかった。ほとんどの思考が吐き気に持って行かれており、まともな想いというものが浮かんてこなかった。そんな気がする。しかし、それは狂っていたと言っのだらうか。単に体調が悪かったせいではないのか。

吐き気がずっと体を襲っていた原因は明らかである。飲酒が原因である。ここ数日、私は日記には書いていないがほぼ断続的ともいえるタイミングで、家族の目を盗んで冷蔵庫から酒を盗み飲んでいった。酒は恐ろしい。一度飲み始めると抜けてきたところに再び飲みたくなってくるし、寄っている間は驚くほど退屈な時間が早く飛び、つまり便利すぎるのだ。もし飲みすぎると吐き気がするという副作用がなかったら、私は永久に酒を飲み続けて、狂っていること以外の理由で入院していたことだらう。アル中とかで。しかし、狂っている私を母は、いや家族は金のかかる入院などというものをさせて

くれるだろうか。いくら福祉で親の財布に金が入っているとはいえ、入院するとその分の金など吹っ飛んでしまう。アル中で入院しても、狂人用の生活補助は適応されないのである。

今日は今日のことをほとんど書いていない気がする。しかし、こんな日もあるものだ。今日は昼前起きて二度寝し、夕方の前に起きて二度寝し、キノコ入りの晚餐を食べて狂って意識が飛んだ。私は今日は何回寝ているだろう。こんなものは生活とは呼べない。だから今日は私は生活していない。だから今日は日記なんか書くべきではなかったのではないだろうか？ 起こったことと言えば、母に「マザー」について自力で調べることが許可してもらおうと晚餐の席で頼み込んでもなく却下されたことくらいだ。

2011年10月5日（前書き）

この日記はフィクションであり、作者とは何の関係もありません。

2011年10月5日

10月5日（水）

今日は通院日なので病院へ行った。ちなみに、病院代は病院へ向かう前に母に手渡される。余分な金額は一切ない。自動販売機で水を買うことすらできず、私は病院へ行つて40分待たされて5分の診察を終えて処方箋を貰って家に帰る。今日もそうだった。しかし、その帰り道、私はいつもと違うことを思った。今日はまだ帰りたくない、と思ったのだ。

今日は家に編集者が来ているかもしれない、そんな気がした。大体編集者が来るのは水曜日か木曜日だ。そして編集者が家に来ると母との打ち合わせを終えた後、私に何らかの危害を加えていく。それは嫌だ。避けたい。だから私は帰りたくなかった。編集者が家を出るまで、自分が家の外で時間を潰しておこう。そう思った。

私は歩いた。他に何もできなかったからだ。自動販売機で水を買う金額すら残っていなかった。薬局による前に薬を受け取らずに薬代を使ってしまうばよかった、ということに気づいたのは、薬局で会計を済ませた後だった。遅かった。狂っているから頭の回転が鈍くなっているのだ。だから私は歩くしかなかった。見飽きた病院から家への道を、行ったり戻ったり曲がったり曲がらなかったりしながらただひたすら歩き続けた。すると民家の塀の上を四足で歩くサルを見かけた。

サルは私を見つけると、提案した。「そろそろ動物園に帰ろうと思うのですが、どうでしょう、私に何か筆記用具を貸していただませんか？」私はサルの見分けがつかほどサルに詳しくないのでそれが何度か家のベランダに現れたサルなのかそうでないのか判別

できなかったが、こうして人間の言葉でなれなく話しかけてくるのだから、きっといつものサルだろう、と判断した。そして私は訊ねた。どうして筆記用具を借りたいのか。「小説というものを、書いてみたいんですよ」それなら動物園で飼育員に人間の言葉で話しかければいいのではないだろうか。ものを書くサル。きっと動物園の新しい売りになるだろう。「それができれば、いいんですがね。あなた以外に、話を通じないんですよ」文脈が通じないのか、言葉が通じないのか、私にはわからなかった。しかし分かることは一つだけあった。私の言葉は人間には伝わらない。

病院で、私の言葉は医師に伝わらなかった。診察が始まると、医師は「最近、なにか変わったことはあった？」とフランクに話しかけてきた。私は自分なりに精いっぱい言葉を使って、最近あったことを話した。すると医師は、「そうですか。じゃあお薬出しておきますんで」と私を診察室から追い出した。私の話は他人には通じていない。榎本なごみや編集者は私の妄想の産物かもしれないのでわからない。

だから筆記用具は貸せない、と言うと、サルは去っていった。サルは動物園に帰るのだろうか。疲れたので続きは明日書く。

2011年10月6日（前書き）

この日記は作者の創作であり、フィクションです。同じ意味の言葉を二度繰り返すほどフィクションです。

2011年10月6日

10月6日（木）

昨日の続きから書く。夕方になってサルと別れて家に帰ると、部屋が荒らされていた。今日は編集者が来ていたのか、と母に尋ねてみると、来ていた、と答えが返ってきた。どうして私の部屋を荒らしていたのに、きつとここまで荒らすと大きな音が立っただろうに、どうして止めなかったんだ？ と母に尋ねてみると、「じゃあ、あんた、止めてもらえるだけ働いてる？」と尋ね返された。私は何も言い返せなかったが、働いていないだけでどうしてこんな扱いを受けなければいけないんだ、と（向こうにとって）理不尽な怒りも湧いてきた。しかしそれをぶつける相手はどこにもいない。病院にもいない。

今日はふれあいサロンに連れて行かれたが、そこにも怒りをぶつけていい相手はいない。ふれあいサロンの狂人たちが、自分より立派な人間に見えた。部屋を荒らされて心が弱っていたせいもあるだろう。ふれあいサロンでは、名前を知らない一人の中年女性に「あなた、病んでますね」と言われた。病んでなければこんなところに寄り集まったりしないだろう、と思ったが、それをわざわざ伝えるのも面倒だった。

晚餐を終え、部屋に戻り、そしてようやく荒らされた部屋の片づけを始めた。どこをどう荒らされて、どこをどう片づけたのか。それを詳しく書くと、日記がとても長いものになってしまう。それは手首が痛いことだし、自分がこの惨状（これを書いている時点でまだ片づけは終わっていない）を、「荒らされていた」という文字列を見ただけで思い出せばそれでいいので、詳しくは書かない。とにかく部屋は編集者に荒らされていた。編集者、榎本なごみに荒ら

されていた。あの人物以外、わざわざ部屋に上がりこんで荒らすような人物を、私は知らない。世界中にはいくらでも居るかもしれないが、名前を知っているのはその一人だけだ。

2011年10月7日（前書き）

この作品はフィクションであり、登場する人物・団体・事件とは一切関係ございません。

2011年10月7日

10月7日（金）

ほとんどすべてが荒らされた部屋の中で、パソコンだけは無事だった。前は編集者にパソコンを壊されたというのに、今回の編集者はどんな心変わりがあったのだろう。それとも、一度手を付けたものには二度手を付けない、などという個人的なルールでもあるのだろうか。とにかくノートパソコンは無事だった。編集者と同じ名前の、榎本なごみという人間からもらったノートパソコンだけは平気だったのだ。

パソコンを立ち上げてみると、「マザー」という文書ファイルがデスクトップに作られていた。そんなもの、作った覚えはなかった。誰かが作ったとしたら、編集者が。きつとろくなことが書いてあるわけがない。そう考えた私は、そのファイルを無視することにした。削除はしなかった。今後、読みたくなるかもしれないからだ。私は編集者に興味がない、わけではない。あいつは一体何なんだ、という疑問は頭の中にいつもこっている。

そんな疑問が残る頭の中の、残りの大半は吐き気に支配されていて、今日も吐いた。確か三回くらい吐いたと思う。三回のうち二回は胃液しか出なかった。残りの一回は飲んだばかりの酒が出た。部屋を荒らされるという惨事が起こったのだ、飲まずにやってなどいられなかった。でも酒のせいで胃が荒れているようで、ずっと胃もたれにも似た腹の重さが治まらない。それでも飲まずにはいられない。私は新しい死因を作っている最中なのかもしれない。狂い死になんて世の中の的に認められたものではない、もっとまともな、社会的に認知されている死因を作っている最中なのかもしれない。

胃が荒れていたので晚餐を口に入れるのも一苦労だった。それでも絶食が続くと吐き気が収まらない気がしたので無理して食べた。胃が荒れているのにカレーだった。キノコはルーにみじん切りになっ
て入っていた。それから、晚餐後、狂う前に思い切ってパソコンのデスクトップ上の「マザー」というファイルを開いてみた。「1・キノコ人間の作り方について」から始まる、長い文章が続いていたが、そこまで見たところで狂ってしまったので、残りは覚えていない。

2011年10月8日（前書き）

この作品はフィクションであり、作者の日記ではありません。

2011年10月8日

10月8日(土)

今日は図書館へ出かけた。母には調べるなと言われたが、私は菌類大辞典という本を探した。やはりどうしても「マザー」という名のキノコが気になったからだ。そして菌類大辞典と言う本は見つかった。誰も本棚から取り出してなどいなかった。私は索引で「マザー」を探した。存在しなかった。ページをめくって確認してみた。やはり見つけれなかった。

図書館では榎本なごみと編集者と出会った。編集者は私を視界に入れたが、さすがに人前ではやらない主義らしく、編集者は私に何の暴行もしてこなかった。榎本なごみと編集者は、仲がいい風でも家族と言って風でも険悪と言った風でもない距離感を保ったまま並んで立ち、私の前に現れた。一体何の目的があって私の前に現れるんだ、と私は私の幻覚かもしれない二人に、声に出して訊ねてみた。二人は何も答えなかった。あれは狂った頭が見せた厳格だったのかもしれない。いや、きっと厳格だったに違いない。二人は何もせず、ただ私を見て立っていたのだ。それなのに、周囲からは注目されていなかったのだ。

晚餐前に、デスクトップに知らぬ間に置かれていた「マザー」というタイトルの文書ファイルを開いてみた。それによると、「マザー」というキノコを人に摂取させ続けることで、その人間は認識を勘違いし続け、誰かに依存せずにはいられなくさせる。主に依存相手が母親になることから、子供を子離れさせたくない親が使用することがよくあるため、「マザー」と言う名がつけられている、とのことだった。しかし図書館の菌類大辞典にはそんな名前のキノコは載っていない。それに私を子離れさせないでいても、母は負担が増

える一方だろう。私のことを邪険に扱っているし、きっとこの文書に書かれていることは間違っている。それか、私の認識が間違っている。

2011年10月9日（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物・事件・依存症と何の関係もありません。もちろん作者の生活とも何の関係もありません。

2011年10月9日

10月9日（日）

いつも一階の冷蔵庫から盗み飲んでいる酒は「大八車」といつて、とにかく量だけはたくさん入っている、きつとその分安くて味も大したことがないであろう日本酒である。私はこれを、いつもつまみなどというものの無しで飲んでいる。そして今日読んだ本によると、つまみ無しで酒を飲むという行為は、胃に大変な負担がかかるものらしい。私がほぼ毎日のように吐き気に悩まされているのは、日記に書かずに酒を盗み飲み続けているせいではないだろうか、そんな気がしてくる。だからこれからは、酒を盗み飲んだことも日記に書くことと思う。今日はかなりの量の酒を盗み飲んだ。飲んで酔って寝て、起きて飲んで酔って寝ている間に昼間が終わってしまふほどの量を。このまま飲み続けると、私はやはり狂い死に以外の死因で死ぬような気がしてくる。

寄っている間に図書館で借りた、文芸誌を読んだ。さまざまな作家がまるで申し合わせたかのように似たようなシチュエーションを書いていたため、これはもしかしてテーマが決められたアンソロジーだったりするのではないかと表紙を確認してみたが、そんなことは書かれていなかった。「10年代の自意識を表現する僕らの青春文芸マガジン！」というキャッチコピーが書かれていた。青春文芸。いじめや第三者の校内暴力などで予想していたより（というか、普通のライトノベルより）楽しくない高校生活を送ることになった……というシチュエーションが、「10年代の自意識を表現する僕らの青春」ということになるのだろうか。単なる暗黒青春もののアンソロジーなんじゃないだろうか。酔った頭で、私はそんなことを考えた。

その文芸誌の中で、「猿」というただ一文字のペンネームを使っている作家が居た。これは以前道端で会ってそろそろ動物園に帰ると言っていたあのサルだろうか、などと考えてみたが、あのサルは「小説を書いてみたい」と言っただけであり、「小説を書いている」とは言っていない。きつと偶然、サルという単語に連続して出会っただけだろう。それとも、実はこれはサルが書いているとか。もしそうだとしたら、もっとその部分を押し出してもいいのではないか。しかし「猿」というペンネームの作家につけられたキャッチコピーは「10年代の文芸奇術師」というものだった。内容は暗黒小説もなかった。

とにかく一日中酔っていたので、晚餐も朦朧とした意識の中で食べた。そして吐いた。今、空腹だ。というか、吐いて以来眠れていない。深夜に書こうと思っていたこの日記も、実は10日の早朝と呼べる時間に書いている。飲まないようにしないと、私は死ぬ。狂って死ぬより、きつとひどい、同情されない死に方をする。

2011年10月10日（前書き）

この作品は作者の日記ではなく、フィクションです。

2011年10月10日

10月10日(月)

体育の日だったというのに寝てばかりいた。パソコンから聞こえてくるラジオで「今日は体育の日ですねー」と言っているのを聞いて、今日が体育の日であることに気が付いたくらいだ。今日は何の日、を話のネタにする人物は大抵話することがない人物なのではないだろうか。それから何度も、横になっている間に、つまり日中の間に、「今日は体育の日ということだ」などと言った台詞を耳にした。ラジオのパーソナリティはそんなに話すことがないのだろうか。それとも、こう話し始めるべし、とラジオパーソナリティ入門書にでも書いてあるのだろうか。入門書通りの言動を行うのがプロのラジオパーソナリティと言えるのだろうか。どうでもいい。そんなことよりこのところずっと続いている飲酒癖を止めるべきだ。狂うより先に飲みすぎで死ぬから。

ネットで見かけたニュースの中に、サルが動物園に戻った、というものはなかった。しかし動物園のホームページを調べてみると、サルが動物園に戻ったことが明らかにあった。ニュースサイトは事件の解決にはあまり興味がないようだ。

そんなサルから、電話がかかってきた。「やあ、こんにちは」と、一階の固定電話の電話口から聞こえてきたその声はサルのものであった。一体何の用でかけてきたのか。飼育係は何をしているのか。「実は私、小説を書いてみたんですよ」それで、私にどうしろというのだ。「ちよつと読んでほしいんで、メールで送りますね」私は、猿、というペンネームで活動しているらしい小説家が居ることをサルに伝えた。「ほう、それってもしかして私のことだったりするんでしょうかね。私、これまでもこっそり、飼育員の目を盗むように

小説を書いてみたことがあるんですよ。そして書き上げると、その原稿用紙がどこかへ消えているんです。もしかしたら飼育員が勝手に回収して編集者に売り込んでいるのかもしれないね」私がいまると話しているというこの事実は、きつと狂いが見せた厳格に違いない。キノコが見せた幻聴に違いない。そんな気がした。

2011年10月11日（前書き）

この作品はフィクションであり、登場する人物とかは架空のも
です。

2011年10月11日

10月11日（火）

昨日はハローワークへ行きそびれた。今日は私の担当者がハローワークへ出勤していないため、言っても無駄だ。つまり今日はやることなく、暇だ。だから歩いてみることにした。毎週木曜日に母に連れて行かれる、保健センターまで。いつもは母が車で私の運ぶのだが、歩こうと思えば歩ける距離にある。そして歩いた。息は切れていた。飲酒とだけは人の体力を奪うものだ、だからこのくらい疲れるのも無理はない。

そこで、試しに保健センターの窓口へ行ってみた。この窓口へはずいぶん前に狂人者認定手帳を手に入れるための手続きの書類を手に入れるために、それからふれあいサロンへの出席手続きを取る時に顔を出したことがある。そのときに私の担当者も決定された。綿祖が顔を出すと、少し待たされて窓口 私の担当者が顔を見せた。そこで私は相談した。自分がこれからどうすればわからない、という漠然とした相談をした。酒のせいで、そして狂いのせいで頭が回らなくなっていて困っている、とも相談した。「あー、狂ってる人はアルコール依存に陥りやすいんですよ」と言われた。「お酒をやるには、自分の意志の力しかありませんね」とも言われた。あまり頼りにできない、私ですら頭で理解できている正論を言われただけだった。あまり実のない相談になった。

母は翻訳家であり、つまり小説に関わっている。小説を訳するのは大変なのか、と晚餐の席で質問してみた。「大変じゃない仕事なんてこの世にはないのよ」と返された。しかし昨日の電話口で、サルは楽しそうに自分が小説を書いていることを話していた。もしかしたら、小説を書くのは楽しいのかもしれない。この狂いが治った

ら、いやこの日記を書き終えて寝て起きたら、自分も少し小説を書いてみようか、と思った。世の中にはついノベルというものが存在する。ツイッターで書かれる140文字以内の小説だ。あのくらいなら自分でも書けるんじゃないか。なんだか今日は妙に前向きな終わり方をしている。まだ頭の中に晩餐のキノコの狂いが残っているのかもしれない。

2011年10月12日（前書き）

この話は私の日記ではありません。フィクションです。フィクションですってば。

2011年10月12日

10月12日(水)

パソコンのメールを数日ぶりに開いた。どうせいつもメールマガジンや迷惑メールくらいしか送られてこないで、数日に一度しか開かないのである。すると、珍しくメールマガジンでも迷惑メールでもないメールが届いていた。件名は「件の小説」である。「件」は「くだん」と読むのだろう、きつと。こういう読みづらい読み方の感じを得意げに使うと印象を悪くしたりするのではないか、と思いつきながら恐る恐る開いてみると、「こんにちは、猿です」から文面が始まっていて「小説を書いてみました」と続いている、それから長い長い小説が書かれていた。この「猿」というのは先日読んだ文芸雑誌の「猿」なのか、それとも先日道端で話してそれから動物園に帰ったサルのことなのか、どっちなのか迷ったが、小説家の「猿」だったら私のメールアドレスなど知っているはずがないし、動物園のサルだとしても私のメールアドレスなど知っているわけがない。つまりこのメールは……誰からのメールなんだ？ 分からなかったが、とりあえず小説は途中まで読んだ。とても長い、本にすれば一冊分になりそうなほど長い小説だった。しかもサルのくせに人間の男と女が恋に落ちる小説だった。私はこれを読んでどうすればいいのか。感想でも返信すればいいのだろうか。とりあえず数日かけて読んで、それから考えることにした。結論の保留である。こんなことを繰り返していると、人生を駄目にする。

編集者が私の部屋を尋ねてきた。私がメールに書かれた小説を読んでいる間に、母と編集者が打ち合わせを始めていたらしい。編集者は私の肩越しに私の（榎本なごみからプレゼントされた）パソコンの画面を覗き込んだ。モニターにはいかかわしい画像が表示されていないので恥をかかずに済んだ。編集者はメールの文字を見ると、

「おお、猿先生の新作じゃないか」と言った。メールの画面はかなり下の方までスクロールしてあったので、文頭の「猿です」の文字は表示されていないのに、どうしてそんなことが分かるのか。「文章には人間が出るものなんだ。まあ、猿先生は表現が独特だから、ということもある。僕は猿先生の担当になりたくて編集者になったくらいだから、少し文章を見れば、それが猿先生の書いた文章だということが分かるんだ」と、編集者は雄弁に、しかも友好的に、私に話をしてくれた。ところで今日は私に何もしないのか、と尋ねてみると、「うん、そろそろ君のことを殺そうと思っているんだ。今はその証拠隠滅の方法を考えている最中でね、まだ思いつかないから今日は何もしないよ」と、ひどいことを言った。こんな物騒なことを平然と口にできるのは、世間知らずな中学生か編集者くらいのものだろ。う。「そんなことはないさ、僕は他ではこんなことは言わない。相手が君だから言うんだ」まるで私のことが好きみたいなのとを編集者は言った。「君のことは、気にかけているよ。いや、気に障っている、と言った方が正確かもしれないね」そうか。私の予測できる死因に、狂い死に、急性アルコール中毒に加え、編集者による殺害が加わった。

あの編集者は悪人である。私を殺そうとしている、と、晩餐の席で母に報告してみた。「ええ、分かっているわよ、あの人がいい人じゃないことくらい。でも、私の本を作ってくれるんだから、付き合っっていくしかないでしょ。私は売れっ子じゃないんだから、仕事相手を選べないのよ」母の仕事が順調ではないことを、私は今日初めて知った。

2011年10月13日（前書き）

この日記はフィクションであり、作者とは何の関係もありません。

2011年10月13日

10月13日（木）

もう週の後半である。そんな今日はふれあいサロンの日だった。いつものように母に車で連れられてたどり着くと、そこにはいつもより若い人間が多かった、ような気がした。自分以外の狂人たちの会話から推測するに、どうも今週から新しく10代の狂人が5人も通い始めることになったらしい。若者たちの間で狂うことが流行っているのだろうか。私は数年間働いていただけの、社会的には若造ではあるが、今日から来ていた若者たちに比べれば歳をとっている。私はどう見られているのだろうか、と少しだけ気になった。しかしその私を見る目たちも狂いのフィルターを通していることにすぐに気づけたので、気にしなくなった。

ふれあいサロンでは、一人の男が大きな模造紙に大きな絵をサインペンで書いていた。まるで漫画のような、輪郭のしっかりした人物画で、それも美少女だった。どんな美少女だったかと言えば、最近本屋へ行けば平積みされている漫画本の表紙に書かれているような美少女だった。他の男が、その男に、「それ、何かのキャラクター？」と尋ねた。ため口で。「榎本なごみといいます」イラストを描いていた男は答えた。敬語で。

家に帰り、晚餐までの時間を使い、やっと猿の送ってきた小説を読み終えた。まあまあ面白かった、という感想を添えて返信してみた。そのままメーラーを閉じて、まだ開いていないので、猿からの再返信が来ているのかはまだ分からない。本当に小説家の猿先生が書いた小説だったのかもわからない。どうして猿なる者が私のメールアドレスを知っていたのかも分からない。

晩餐の席で、珍しく母から話を持ちかけられた。「知ってる？
小説家の猿ってペンネームの人はね、動物園に勤務してるんですつ
て」どうしてそんな話をするのか、私は母に訊ね返してみた。「昨
日、榎本さんと話したのよ。榎本さん、猿ってペンネームの担当に
なりたくて、その人のことを調べてるらしいわ。でも、全然分から
ないらしいの」だからどうしてそんな話を私なんかにするのか、と
私は再度母に尋ねた。「だって、家族の中で本読むの、あんたくら
いですもの」私は父と妹の趣味を知らない。

2011年10月14日（前書き）

この作品は私の日記ではありません。こんなこと、実際には起こり得ません。

2011年10月14日

10月14日（金）

昨日から酒を飲まないように気を付けているが、これが意外と依存していたようで、今私はとてもつらい状態にある。このままだと飲んでしまう可能性があるので、必死で日記に集中している。インターネットでの調べによると、狂った人間や不安神経症の人間は酒にアルコール依存になりやすいのだそう。やはりアルコールには不安を和らげる効果があるからなのだろう。病院で処方されている薬にそんな効果があればいいのだが。現在病院で処方されているエビリファイなどという効果のうつすとした薬にはちっとも不安を和らげる効果がないように思えてならない。遅効性の薬なんだろう。だとしたらそんな物作るべきではないんじゃないだろうか。薬が効き始める前に即効性のアルコールに手を出してしまうじゃないか。それにしても今飲みたい。今は深夜だ。家族は既に寝ている。今なら台所へ行って冷蔵庫から酒を取り出すことができる。今飲みたい。

でも結局飲んでいない。まだ狂いきつていないから我慢が出来るのだ、と思う。完全に狂ったら、私は自制というものがきつとできなくなってしまうだろう。そして酒を盗み飲みまくってアルコール中毒で死ぬのである。うちの家族に狂っているうえにアルコール中毒な奴を病院に入れてくれる優しさがあるとは思えない。いや、私に家族愛が向けられていないだけか。狂ってるもんな。働いてないもんな。母や父や妹は狂人に対して偏見を持っているのだろうか。私は持っていると思う。今日現在の私は、うちの家族は狂人に対して偏見を持っていると思う。

今日は珍しく二日連続でメーラーを開いた。すると小説の感想を

送った猿からの再返信が来ていた。「面白がっていただけ多様で、うれしいです」と書かれていた。どうして私なんかを相手取ってかしまっているのだろう。私は狂っているのだ。小説なんか書く正常さも持ち合わせていないのだ。それなのに、下手に出られている。もしかしたら馬鹿にされているのかもしれない。ところでどうして私のメールアドレスを知っているのか。と、私はまたメールに書いて返信してみた。まるで猿がメル友になったかのようなのである。返信が来るのは明日だろう。私が次にメーラーを開くのは翌日の予定だから。

それから、電話が来た。いつものように母が出ないので、私が出てみると編集者からだった。編集者は錯乱している様子だった。「大変だ！ 猿先生は猿だったんだ！」言っていることが良くわからない。それを私に伝えてどうするつもりなのか。私ではなく母にそれを報告したかったのだとしても、どうしてそうしたいのか分からない。「僕はどうすればいいんだ！ 猿なんかを馬鹿みたいに尊敬しちまって！ ああ恥ずかしい！」恥らうのは個人の自由である。しかしそれを私に伝えてどうしようというのだ。本当に。あと今日もキノコを食べた。

2011年10月15日（前書き）

この日記はフィクションであり、登場する物や人は実在のものではありません。

2011年10月15日

10月15日(土)

今日はいきなり晩餐の席での話である。たまには時系列がバラバラの日記を書きたい時だつてある。私が晩餐を摂っていると、母が誰かと電話をしていた。どうやら相手は出版社の誰かであるようだった。「はい。榎本さんが？ ええ」などと心配そうなトーンで話していたので、何があつたのですかと尋ねてみると、母の担当編集者が色々分け合つて代わることになつた、と私に教えてくれた。昨日の電話で、今日まで母の担当であつた編集者は錯乱している様子だった。首にでもなつたのだろうか。そこまでは教えてもらえなかった。

それにしても週末である。今週は、振り返つてみると榎本なごみが現れなかつたような気がする。読み返してみればどこかで会っているような記憶が呼び起されるのかもしれないが、今週は酒に阿呆のように浸つていたという記憶の方が大きいので、榎本なごみと何らかの形で会つていたとしても、その印象が頭に残っていない。記憶を残留させない作用があるのだ、アルコールというものには。

昼間、メーラーを開いてみると、猿からの返信が届いていた。「私は珍しい天才なので、かなり大きな組織を動かすこともできます。特定の個人のメールアドレスを調べ上げることも可能なです」とのことだった。自分のことを天才と称する人間にろくな奴はいないと決まっているものだが、相手は猿かもしれない。もしこのメールをサルが打つていたとしたら、確かにタイピングができてメール送信ができる猿など珍しい天才である。だからこのメールの内容は間違っていないかもしれない。どう返したものか分からなかつたので、さらなる返信はしなかつた。

晩餐の席での記憶が、今日はもう一つある。母ではなく榎本なごみが同席していた。私が食べている席の正面の椅子に、榎本なごみが座っているのだ。あなたは本当に榎本なごみか、と尋ねてみると、「ええ、そうですよ」と彼女は答えた。母はどうしたんだ、と続けて尋ねてみると、「さあ、いないみたいですけど?」と首を傾げられた。そうか。私の狂いは進行しているらしい。

2011年10月16日（前書き）

この日記は作者の現実とは何の関わりもありません。

2011年10月16日

10月16日(日)

全てのものを一まで戻すこととゼロにまで戻すことと、どちらに価値があるのだろうか？ などと言った抽象的なことを考えてしまうのは、また酒を飲んだせいだろう。ここ数日は止められていたのに、結局また飲んでしまった。これは私が狂っているとかではなく、私の意志が弱いせいだ。

幻想文学のような光景が、最近時々垣間見えている気がする。昨日など、晚餐時の記憶が二つもあるし、最近は自分脳妄想内の人物かもしれない編集者という存在と実在に違いのない存在である母が電話で話している光景を目にした。このような光景を見るたびに、私は軽い恐怖を覚えている。私はもう現実には戻れないかもしれない。しかしよく考えてみれば、現実に戻ったからと言ってそれほど良いことが待っているわけでもない。そんな気がする。このまま狂い続けた方が人生は楽しくなるのではないだろうか。映画などで描かれる気の狂った人間は大抵楽しそうに、それが観客の恐怖を喚起するように笑っている。しかし当人は実に楽しそうに笑っている。もし今私が笑ったら、恐ろしい笑顔になるだろうか。

昨日は家に閉じこもりっぱなしだったので、今日は外に出ることにした。行先は例によって図書館である。そこで私は検索機を用いて、猿という名の作家が存在するのか調べてみた。するといくつかの本が見つかったので、本棚に取りに行った。「動物園のメリーゴランド」というタイトルの本を探してみると、そのレーベルは小早川つばさ文庫だった。つまり児童文学だった。これがデビュー作であるらしかった。

児童文学だから読まない、などという理由はないので、借りて持って帰って読んでみた。しかしこれが意外と読みづらかった。まず文字が普通の本に比べて大きすぎる。それからすべての漢字にルビが降られているのが割と邪魔である。内容は、まあ、夢がいっぱい盛られすぎていて現実感が薄いというか。

私が一人で晩餐の席に座っていると、母と新しい担当編集者が電話で話をしていた。母は笑顔で本の内容について打ち合わせをしていた。気になるのは、母が新しい担当編集者を「榎本さん」と呼んでいたことだ。榎本という名字の社員が多い出版社なのか、それとも私が見ている光景が幻想なのか、だとしたらどこからが幻想なのか、どこまでが現実なのか。そういえば母の仕事を受け持っている出版社の名前を私はまだ知らなかったもので、母に尋ねてみた。「とうきょう出版よ」と母は答えてくれた。頭狂、という単語を思い出した。それが地名だったか状態の名前だったか物体の名前だったか、聞いた覚えはあるのに思い出せなかった。もしかしたらそれをまだ知っていないのかもしれない。日記を読み返せば思い出せるのかもしれないが、結構長いこと書いてしまっているし、読み返すのが面倒だし、私が日記に書いていることがすべて真実であるとは限らないのだ。

2011年10月17日（前書き）

この日記は作者の生活とは何の関係もありませんし、思想や経験とも何の関係もありませんってば。

2011年10月17日

10月17日(月)

月曜日なので図書館は休みである。世の中には月曜日でも休まない図書館があるという。そんな東京に行きたい、と切に思う。しかし私一人で東京に引越す権利も金銭も家にはない。旅行で図書館へ行っても貸し出しなど行えない。第一、図書館というものはその土地に住んでいる人間以外には基本的に貸し出さないものである。と思っていたら池袋にある図書館はどこに住んでいる人間にも図書を貸出しするらしい。憧れる。それにしても今日は図書館が休みである。昨日一日で読み終えてしまった作家の猿の「動物園のメリーゴランド」を返却しに行くことができない。

ふと思いつき出し、ハローワークへ行くことにした。今日は私の担当者になってしまった不幸な中年女性の出勤日である、ということに急に思い出したのだ。しかし、特にこれと言ってやりたい仕事の目処は立っていない。それでも私は図書館へ行った。そして少し、仕事について担当者の中年女性と話した。特に実のない話を。それから、一応履歴書をもらった。しかしこれを書くとして、仕事を辞めてから現在までの空白の期間をどう書けばいいのだろう。それから特技やアピールポイントの欄をどう書けばいいのだろう。部屋で履歴書を眺めながらそんなことを考えているうちに、自分には働く気がないことに気が付いた。ニートが身に沁みついていたようだ。もっと積極的に行動しなければ、さらにこの症状は悪化し、きっと狂いも加速するだろう。なので行動しよう。活動しよう。今日はもうやるので明日から。

一応ハローワークで紹介された仕事を、覚えている限りざっと書き出してみる。ビルの清掃員。アパートの廊下の清掃員。パソコン

の文字入力。動物園の清掃員。清掃員ばかりである。狂っている人間は人と話さなくてもいい肉体労働に精を出せ、ほかに使い道なんかないからな、そういうわけなのだろうか。そうか。私は体力には自信がない。仕事をやっていた時も毎朝息切れしながら出勤していた。

ところで私は、狂う前はどんな仕事をしていただろう？ 思い出そうとしてみたが、思い出すことができなかった。私の頭がおかしくなっているのか、それとももしかしたら私には働いた経験などなく、最初から（どこの？）狂っていて、自分が働いていたと錯覚しているだけのだろうか。分からない。分からないことが日に日に増えていく。これがなくなったとき、私は完全にくるっているか、正気に戻っている。

2011年10月18日（前書き）

この作品は作者の日記ではなく、実在する人物・団体・菌類とは一切の関係がありません。

2011年10月18日

10月18日（火）

もう20日が迫っている。つまり月の終盤が迫っている。そのことを考えるだけで、焦りを覚える。理由のわからない、あ、昨日に続いてまた分からないという単語が出たな、でもとにかく、この焦燥感の理由が分からない。年末が迫っているだけなのに、何を恐れているんだ、私は。まだ完全に狂っているわけではない。取り返しのつかなくなるほど無職の期間が長くなっているわけでもない。いざとなったら狂人手帳をうまく活用して生活保護を受ければいい。きつと通るだろう、手帳があるんだし。そんなことを思って安心させようとしても、心が勝手に焦ってしまう。だから今日は酒を家族の目を盗んで飲んで寝ていた。酒を飲んで寝るという行為は気絶して寝るという行為と同じものであるらしい。それがどう悪いのかはわからないが、脳細胞がたくさん死ぬとか、そんなものだろう。私の脳なんかどうでもいい。この嫌な焦りを感じる頭など半分くらい死んだほうがいい。完全に死ぬ、と自分に言わなくなったあたり、これは進歩だろうか。それとも家族にとって厄介な人間が生きようとしているということ、これは悪化なのかもしれない。周囲にわたっての状況の悪化。私が生きているという悪い事態、である。

榎本なごみが家を訪ねてきた。手ぶらではあったが情報を持ってきた。「猿って作家、知ってる？」榎本なごみの切り出す話題はいつも私の近況を見越しているかのようだ。「あの人、本物の猿らしいよ。動物園で衆人環視の中、パソコンでタイピングして小説書いて、それを飼育係の人が印刷して出版社に持って行ってるらしいよ。そこまでのくらいならペンネームくらい公開したほうが売れると思うのに、どうして隠してるんだろ」ならばどうして、サルのペンネームが猿であることを知っているのか。「週刊誌に書いてあった

から「明日は本屋に立ち読みに行ってみることに決めた。それから、そんな情報が入ってきて、私は編集者ほどのシヨックは受けなかった。猿が小説を書いているから何だというのだ。完成したものがいいものであれば、それを人間が作ろうが猿が作ろうがどっちでもいいではないか。このまま知能が進化した猿に文化が乗っ取られてやがて地球は支配されるかもしれない、などという永遠のB級映画みたいな想像は浮かんだが、それは私を不安になどしなかった。そんなことが起こると思えなかったからだ。

榎本なごみは夜まで家にいて、しかも晚餐の席にまで同席した。母は榎本なごみの分の食事まで用意した。笑顔で。まるで息子が友達を連れていることがうれしい、かのように。普段はあんなに冷たいのに。メニューは親子丼で、私の分にはキノコが入っていた。榎本なごみの分にもキノコが入っていた。榎本なごみは言った。「このキノコ、おいしいね」私には味が感じられなかった。

2011年10月19日（前書き）

この作品は作者の日記ではなく、純然たる創作であります。

2011年10月19日

10月19日（水）

今日は予約が入っていた日だったので病院へ行った。いつものように40分待たされた。5分間の診療の間に、この病院は待ち時間がいつも長いですね、と医師に言くと、「じゃあ警察呼ぼうか？」と返された。どう思考が飛躍したのか、一瞬理解が及ばなかったが、まあ、狂人を相手にしているのだから、隙あらば警察を呼ぶという強めのカードを切らなければならぬのだろう。精神科の医師というものは大変なものだ。私はもうこの病院には行きたくない。しかし選択権がないので次回もきつと行くのだろう。

その帰りに、本屋に立ち寄り、週刊誌を読んできると、後半のページの隅のほうに「作家『猿』は本物の猿だった！？」というスクープが掲載されていた。しかしスクープと呼ぶにはあまりにも扱いが小さかった。しかもあまり信用のおけない雑誌なので、きつとこれを鵜呑みにするのは余程の……いや、余程の馬鹿にはなれないはずの編集者という職業についている人物はこの情報を鵜呑みにしている。ということは、私が信用できないと思っているこの週刊誌の情報は、意外と正確だったりするのだろうか。

それから、週刊誌に掲載されているコラムで一本、面白いものがあった。ほかの記事はただただ人の不安を煽ったり不満をあおったりするだけのものであるのに対し、そのコラムは人間の穏やかな生活が淡々と描かれていて、人間の日常には起伏がなくてもいいのだ、と思える心強い安心感を得ることができた。そのコラムのタイトルは、柏原歌枝の獄中記、と言った。ネットの風評被害が原因で犯罪者ということになり、収監されたい。獄中での穏やかな生活の片隅に、自分が無実であると繰り返し紙面を通じて読者に訴えられ

ている、そんなコラムだった。面白い。

面白いコラムで気分が良くなっても飲酒は癖になってしまっているようで、帰りついたところには体中がアルコールを求めている。しかし既に台所では母が晚餐の支度を始めており、台所に置かれている冷蔵庫から酒を盗んで飲むことは不可能に思われた。仕方がないので晚餐後まで我慢することにした。

その晚餐の席で、またしても家族以外の人間が同席した。それは中年の男で、名前を榎本なごみというらしい、母の新しい担当編集者だった。「君、先生のお子さん？」と新しい編集者は言うので、うなずくと、「君、狂っているね？」と、まるで医師のように私の症状を言い当てた。「君が作家になれば、話題になるだろうな」狂人を売りにして本を売るつもりか。世間が狂人が本を書くということに慣れたらどうなるんだ。「君に技量があれば、作家が続けられる。話題性だけの作家で終わったら、それまでだ」今までの編集者に比べて、この新しい編集者は随分と常識的だった。生活に起伏がなくなってしまうな、と私は無駄な心配をした。

2011年10月20日（前書き）

この作品は作者の日記ではありません。が、作者はアルコール依存になりかけています。

2011年10月20日

10月20日(木)

今日はも今日日なので、母によってふれあいサロンへ連れて行かれた。抵抗するのもありか、と思ったが、それは面倒なのでやめておくことにした。現に今、こうして日記を書くのに手を動かすのも面倒くさくて仕方がない。今日はなぜか何をやるのも億劫で仕方がないのだ。

ふれあいサロンにまた新しいメンバーが来ていた。それはあの編集者だった。母を担当し、私に繰り返し暴行を与えた人物である。直接殴ったりしたわけではなかったが、あれは紛れもなく暴行だった。しかし狂って会社を辞めたからと言ってこんなにも早くふれあいサロンへ通う手続きがとれるものなのだろうか、と思っていたら、編集者は人を殴りつけた。どうやらほかの人間から声を掛けられ、その内容が気に入らなかつたらしい。話しかけられた内容は聞こえなかつたが、元編集者は「俺は狂ってなんかいない！」と言っていた。そんなことを言う人物こそが一番狂っているのである。自覚のある私なんかより始末に負えない。

それから編集者はふれあいサロンが内包されている保健センターの職員の手によってふれあいサロンを連れ出された。どこへ連れて行かれたのだろう、隔離棟かな、ここにそんなものあったつけ、などと考えながらふれあいサロンから出てみると、保健センターのロビーに、元編集者はおそらく担当者であろうと思われる職員と一緒に、ソファに座っていた。元編集者は何かを言われており、それを聞いている元編集者は首をうなだれていた。それからしばらく経つと、元編集者は保健センターから出て行った。来週も来るだろうか。だとしたら、迷惑なんじゃないのか。それを保健センターの職員に

尋ねてみると、「来週はおとなしくしてらつて。約束しましたよ」と言った。どうやら元編集者は来週も来るらしい。迷惑なんじゃないだろうか。

サロンで本を読んでいると、急に酒が飲みたくなった。しかし保健センターに酒などない。このままではどうにかなってしまう、そう感じた私は、どうなってもしまわないはずなのに、耐えきれなくなって保健センターから外に出た。そしてその周辺をでたらめに歩いていると、比較的近くにコンビニあることを発見した。そのコンビニには酒が売ってあった。しかし私は個人的に使える金を少しも持っていないかったので、酒の缶だけを眺めていた。誰かが表れて148円を恵んでくれることを期待しなすが、缶酎ハイの缶を眺めていた。もちろん誰も現れず、店員に冷たい目で見られていた。様ない気がする。結局私は、2時間近く缶を眺めていた。

帰るとさっそく私は家に常備されている酒を盗み飲んだ。そして酔って吐いて、私は倒れた。目覚めて晚餐を済ませて、体のだるさは取れなかった。だから私はこれを書いている現在、とてもだるい。だから今日はもうこれで日記を終わることにする。

2011年10月21日（前書き）

この日記は作者の現実とは一切の関連性のない、架空の日記です。
もちろん主人公は作者とは違う人物です。

2011年10月21日

10月21日（金）

昔々、あるところにおじいさんとおばあさんとその息子と娘とたくさんの孫たちが住んでいました。孫たちが働くのでおじいさんとおばあさんは働かずに済みました。おじいさんは山へ芝刈りに行くこともなく、おばあさんは川へ選択へ行くこともなく、孫たちは誰一人として浜辺へ行く暇もないほど一生懸命働いていたので、その家族の元には何のフアンタジーも起こらなかったといえます。という昔話を思い付いた。これに少し脚色を加えれば面白くなりそうな気はするが、さてどうしたものか。

などという夢を見ているうちに私は病院で目を覚ました。昨日はキノコを口に入れていない、様な気がする。酒のせいで記憶があいまいである。キノコを口に入れていないとしたら何が原因で病院へ運び込まれたのか。酒が原因だろうか。それとも無意識のうちにキノコを口に入れ、それで狂ったせいで自分の身に何が起こったのか思い出せないでいるのだろうか。それが、今までのことは全部夢で、私は最初から入院していたのだろうか。私が日記に書き留めていたことには色々と不条理なことがあるので、それもあり得る。

病院からはその日のうちに退院させられた。医師から聞いた話によれば、私は急性アルコール中毒による二日酔いで気分が悪いと母に訴えていたらしい。母は深夜に気持ちが悪いと騒ぐ私に耐えられず、救急車を呼んだらしかった。帰ると、私は禁酒を命じられた。母の目を盗んでこっそり冷蔵庫を覗いてみると、酒は撤去されていた。これを自縄自縛というのだろうか。それとも、当たり前前の処置と言ったほうが正確だろうか。

酒がない、逃避するのに最適なものがない、そう考えるだけでイライラした。イライラするので私は本を読むころにした。本に集中している間はイライラが少しは解消されるのが救いではあったが、読み終わるとまたやることなくった。そこで、もう夕方になっていたが、散歩に出かけることにした。すると、犬と数回すれ違った。犬にはすべてリードと飼い主がくつつけられていた。私が子供のころは、この辺りにも野良犬が出ていたような気がするのだが、最近は少しもそんなことが起こらない。

晩餐はいつもより多めに、キノコをいつもより多めに食べた。すると満腹のせいかな、いつもより狂ったせいかな、私は眠ってしまった。夢は見なかった。次に起きてもまた病院にいるんじゃないか。そんな気がした。

2011年10月22日（前書き）

これは作者の日記ではなく、創作作品です。

2011年10月22日

10月22日(土)

なんだかもうすべてが嫌になってきた。それというのも酒がな
いせいだ、きつとそうだ。そうでも思わなければこの無力感、脱力
感に説明がつかない。そんな思い込みが頭を支配してしまっている。
正直、今日は日記を書くのをやめようとすら思った。でも意地で今、
書いている。体力がなくなっているわけでもないし、とても嫌なこ
とがあつたわけでもない。それでも書く気になれず、結局23日の
早朝という時間にこれを書いている。

22日、起きると榎本なごみが枕元に立っていた。なぜ立ってい
るのか尋ねてみると、私のところが急に心配になったから、らしい。
どうしてそんなに私なんかに構うんだ、それとも飲酒していないせ
いで見えている幻覚だろうか? 「飲んでないんだね」飲んでいな
いと幻覚が見えるようになる症状を離脱というらしい。アルコール
中毒用語である。それにしてもどうして枕元に立っているのか。そ
ろそろはつきりさせないといけないような気がしてきたので、尋ね
てみた。お前はいつたい何者なのか、と。親の仕事相手に同姓同名
の人間がいるが、関係があるのか。どうして私に構うのか。どこで
私を知ったのか。その優しさの裏に何が控えているのか。私は複数
の質問を一息に榎本なごみに伝えた。一気にそんなに応えられるわ
けがないのに。

矢継ぎ早の質問に、榎本なごみはたった一言答えた。「私は、当
たり前の存在じゃないんだよ」一言なのに何も分からなかった。そ
れとも、一言だったから何も分からなかったのか。その答えを言い
残すと、榎本なごみは部屋から出て行った。それから私は、眠った。
一日中、ずっと寝ていた。日が昇り切っても日が落ち始めても、部

屋の中で朦朧とベッドに潜っていた。

晩餐の席で母に伝えられて明らかになったのだが、榎本なごみは一日中家にいたらしい。私の家族に何を言ったわけでもなかったらしいが、榎本なごみは母に晩餐を作ってもらっていた。私の知らぬ間に。榎本なごみが何なのか知っているのか、と母に尋ねてみた。

「知らない」と帰ってきた。じゃあどうして食事を饗したのか。「不思議ねえ。でも、あの娘、不思議な魅力があるのよね」魅力に対して不思議なんて言葉は適応されるものではない。私は榎本なごみが帰ってから数時間後に晩餐を食べ、それに混じっていたキノコで狂ってまた寝て、そしてついさっきまでまた寝ていた。

2011年10月23日（前書き）

この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件とは一切の関係がありません。

2011年10月23日

10月23日(日)

そんなにやることがないなら本でも読んでいればいいのに、最近
は昼も夜も寝てばかりいる。こうなったらいつそのこと、このひた
すら眠っているという自己の姿を現代アートとして提出してしまう
というのはどうだろう、と思いついた。ステージ上ではバンドが激
しい演奏、そして老人ラッパーがライムで現代社会をディスリ、お
行儀のよろしくない格好をしたヒップホッパーたちがリズムを刻ん
で体を動かしている、そんな中心で、私は布団を敷いて眠っている
のである。この異様な空間で寝るという行為。この非常識さこそが
現代アートたり得るのではないか。そんな夢を見た。狂った人間の
夢なんてこんなものである。

夢に出てきた老人ラッパーのデイトールはかなりしつかりして
いて、顔中ぼうぼうに伸びた髪の毛やもみあげや髭を編みこんで顔
の8割を隠し、それでいて激しい声で……夢の話はむなしなので現
実の話へ移ろうと思う。現実の話も大概むなしいものであるが。現
実がむなしくない人間なんかこの世に数人しかいない気がする。つ
まり実は私は正常なのではないか。

現実の世界で、私は少しウォーキングを行った。寝ている間に歩
いて、歩き終わって帰ってきてまた寝たのである。キノコを食べた
直後眠るように狂ってしまうという状況を回避するために、寝だめ
という策を思い付いたのと、単純に眠いという二つの原因が重なっ
てこんなことになったのである。だから私は歩いた。歩いている間
は誰ともすれ違わなかったし、何の特別なことも起こらなかったの
で、この段落は一行で済ませていいはずなのに、こうしてたらだら
と書いてしまっている。そんなに日記を書いていたのか、私は。

じゃあ小説家にでもなればいい。きつとなれないと思うが。編集者が狂人の書いた小説を読んでもくれるとは思えない。

小説といえば、今日は図書館まで歩いたことを記録し忘れていた。昨日図書館へ行かなかったので、今日行ってみよう、と思い、いつもは自転車を通る道をわざわざ時間をかけて歩いたのである。そして図書館でペンネームを猿という作家の別の小説を借りてみた。「このキノコ人間が、」という、児童文学とは明らかに方向性が違うらしい、吐き捨てるような言い方のタイトルだった。

そして晩餐后、眠らずに本を読もうとしていたのに、結局ついさっきまで意識を失っていた。またキノコを食べて狂って寝てしまっていたのだ。これを防ぐ方法はないのか。本当はないのか。

2011年10月24日（前書き）

この作品はフィクションです。実在する人物・団体・事件とは一切関係ありません。

2011年10月24日

10月24日(月)

午前中は寝ていた。このまま眠るように死ねたら、死にざまとしてはましなほうだ。しかし私はまだ死にたくはない。そして夢を見た。雑誌の文字が小さくて、顔を近づけている、という、非常に面白くない夢だった。どうしてこんなことを夢に見るのか。私は自分の金で雑誌を買って読む、というここ数か月実行できていない行為にあこがれを抱いているのか。それにしても夢にしては現実的すぎやしないか。そしてあまりにもつまらなくはないのか。これから雑誌に関連した何事かが起こる前触れなのか。そうとでも妄想しないとこの夢があまりにも不憫でならない。つまらなさのあまり、夢に対して感情移入してしまった。

午後、ハローワークへ行ってみた。今日は私の担当となった中年女性の担当者が出勤している曜日だからである。そこで仕事を見つけてもらおうとしたが、そこで私は弱音を吐いてみた。狂ってしまった自分が働ける自信がない、と。「やる気がない限り、働こうとしても働くななんてできないわよ」と返されてしまった。私はきつと、現状に甘えているのだろう。現状が悪くないと、心の奥底では感じているのだろう。酒を禁じられ、金銭の所持を禁止され、やることと言えば寝るか図書館で借りた本を読むか、そんな寂しい老後のような現状に。打開したくないわけがなかった。

ハローワークからの帰り道、現状の象徴とも言い表せる榎本なごみとすれ違った。彼女は高校の制服を着ていて、二人の友達らしき同じ制服を着た人物と並んで歩いていた。私とすれ違う際、視線すら向けなかった。きつと私と知り合いであることが友達に露呈することが恥ずかしいのだろう。私だって自分が狂っていることが露呈

するのは恥ずかしい。そして働いていないことと、働く気がないことを言い当てられてしまったことが恥ずかしい。この宮崎という田舎において、働いていない人間は全員不審者である。そんな不審者たる私なんかに道端で親しげに話しかけてくる人物が表れでもしたら、まず私のほうが不審がる。きつとろくな目的ではないだろうか。

夜、それも深夜、晚餐が終わっていつものキノコのせいで気を失って目覚めてから、電話がかかってきた。出てみると、榎本なごみからだ。た。「今日は無視してごめんなさい」と謝罪された。榎本なごみは私に気を使いすぎなのではないだろうか。それにしてもどうしてこんなに気を使ってくれるのか。私は高校生の命を救った覚えなどないし、高校生ではない人物の命を救った覚えもない。榎本なごみは私に恩があるわけではないのだ。私が一体何をしたというのだ。不審である。

2011年10月25日（前書き）

この作品はフィクションであり、作者の生活とは一切の関係がありません。

2011年10月25日

10月25日(火)

今は秋、それも冬の迫った秋のはずである。それなのに窓を閉じていると暑くて、暑さのあまり目を覚ましてしまった。体中汗をかいていたので、シャワーを浴びることにして、階下に降りて、浴室に入った。すると一匹のなめくじが私を出迎えた。「あ、すいませんが蛇口ひねってもらえますかね。私、手がないもんで」なめくじは温水を浴びても平気なものなのだろうか。「私のようなもんにとつて水分は命の源ですからね」それから私となめくじはシャワーから放出される湯を浴びた。なめくじは、心持ち、気持ちよさそうに見えたが、なめくじに顔と呼べる部位など存在しないので、私が狂った頭で勝手にそう思っただけなのだろう。

それから、本に取り掛かった。今日は読書くらいしかやることがないのである。しかしなかなか集中できなかった。昨日の夢に雑誌が出てきたことから、体が雑誌を求めているのかもしれない。そう思ったので私は外に出て、本屋へ向かった。本屋までは家から2キロ歩かなければならなかった。秋にしては暑い気候が、喉から水分を奪ったが、私にはお金がないのだ。本屋でテレビブロスという雑誌を読んでみたが、知らない人間が充実した現状をフランクな口調で語っていたので、私はなぜか腹が立った。どうして知らない人間の日常なんか知らなければならぬのだ。こんなにも人を不快にになってしまう日記および現状報告の文章をどこにも公開していない私は正しい。

晩餐を食べていると、母が塩を瓶ごと持って食卓から出ていき、すぐに戻ってきた。どうしたのか、と訊いてみると、「風呂場になめくじが出た」と帰ってきた。母はなめくじが嫌いだったのか。ま

あ、不思議なことではない。テレビでなめくじ撃退用品のCMをやっているのを見たこともあるし、なめくじというものは基本的に人に嫌われるものなのだろう。私と一緒にだ。

2011年10月26日（前書き）

この作品はフィクションであり、現実とは一切の関係を持ちませ
ん。

2011年10月26日

10月26日（水）

今日は病院へ行かなくてもいい水曜日である。病院へ行くのは隔週なので、今週の水曜日は自由、というわけだ。なので気が緩んだ私は午後まで眠りこけてしまったが、それは仕方のないことなのである。最近朝から晩まで寝てばかりで、ろくに図書館から借りた本を読めていない気がするので、少し気合を入れて本を読んでみることにした。猿というペンネームの作家が書いた「このキノコ人間が、」という本である。

読み進めていくにつれ、体がだるくなってきた。まるでアルコールを体に入れたときのような脱力感が襲ってきた。最近本を読まなかったせいで変な疲労感に襲われているんだろうか、と思いつつ、水を求めて台所へ行き、麦茶でも取ろうかと（これは酒と違って勝手に飲んでも怒られない）冷蔵庫を開けると、そこには缶ビールが四本ほど入っていた。たった四本なので、一本でもなくなれば確実に無くなったという事実は露呈してしまうだろう。だから私はこれを盗み飲むべきではない。

それから二十分後、私は外を歩いていた。足はふらついていて。久々にアルコールを体に入れたせいである。そして缶ビールを勝手に飲んだ私は、逃避行を開始していた。逃避行と言っても近所をふらつく程度のことしかできなかった。家に帰れなくなるほど遠くへ行ってしまうと、私はきつと餓死してしまうに違いない。そんな気がした。きつと私がいなくなっても探したりしないだろう、私に冷たい私の家族は。

逃避行は夜まで続いた。というか夜までしか続かなかった。アル

コールのせいで歩くのがつらくなって、夜には家に戻ってしまったのである。案の定、缶ビールを勝手に消費したことは母にばれており、今日は夕食を抜かれた。だから今日はあの味のない食べると気の狂うキノコは食べていない。それでも、いつも晚餐を食べ終えるころになると、いつもの癖でベッドに寝転がった。すると天井にめくじが張り付いていた。無事だったのか。「九死に一生を得ましたよ」昨日のなめくじであることが自分でもわかることが不思議だった。

2011年10月27日（前書き）

この作品はフィクションであり、
実在する人物・団体・事件とは
一切の関係がありません。

2011年10月27日

10月27日(木)

今日も毎週のようにふれあいサロンへ連れて行かれた。そこには元編集者がいたが、今週はおとなしい様子だった。誰とも喋っていないし、何もしていない。まるで狂人というより廃人のようだった。一方で私も、誰とも喋らず読書をしていた。「このキノコ人間が、」の続きである。すると編集者が近寄ってきて、「そんな本読むなよ」と突っかかってきた。「猿が書いた小説だぞ」誰が書いたって小説は小説だろう。むしろ猿が書いた小説こそ、読みたがる人は多いのではないだろうか。「猿はだめだ。猿はだめだ」ならば誰が書いた小説ならいいのだろう。「絵になる人間が書いた小説だ。それが一番売れるんだ」もう編集者ではなくせに、元編集者は本の売り上げのことをばやいていた。ところで、現在編集者はどんな生活をしているのだろうか。「……妻に捨てられたよ」結婚できていたのか。あんなだったのに。ならば私も、いつか結婚できるのかもしれない。「結婚には社会性が必要だ。俺も君も、今は狂ってるんだぞ。結婚なんかできるわけないだろ」言われてみればそうだった。編集者は狂ったから結婚生活が維持できなくなったのだ。それから編集者はばやき続け、結局読書はあまり進まなかった。

帰ると榎本なごみが絵になるポーズで食卓に座っていた。このよ
うな人間が本を描けば、元編集者が言っていたように売れるのだろ
うか。本の売り上げも作者のルックスが握っているのか。だとした
ら空しいものがある。しかし綿谷りさや斉藤……なんとか、とにか
く元水島ヒロだった誰かが書いた小説は実際売れている。やはり元
編集者の言っていたことはあながち間違いでもなさそうである。

絵になるポーズで食卓に座っていた榎本なごみは、私の家族に受

け入れられているようだった。誰も食卓に他人がいることについて何も言わないし、疑問の視線を向けることもしない。何を言って私の家族に取り入ったのだろう。家族と仲の良くない私には想像もつかない。そんな榎本なごみに、二日連続でなめくじと話したことを報告した。報告するほどのことでもないが、ほかにやったことと言えば読書とネットと睡眠のみである。「それは良くない兆候だねえ」と榎本なごみは言った。「なめくじは不吉な動物なんだよ」私はそんなことを知らなかった。しかしそれをネットで検索して確かめる気にはなれなかった。検索すれば、きつとなめくじの画像が大量に画面に表示されることだろう、一匹だけ視界に入ってくるならまだ大丈夫なのだが、一度に大量のなめくじを見るのは、少しつらいものがある。だからこの件に関しては、とりあえず心には留めておく程度に留めておくことにした。

2011年10月28日（前書き）

この作品はフィクションです。作者の日常とは一切の関係を持ちません。

2011年10月28日

10月28日（金）

目覚めてしばらくの間、今日が土曜日だと勘違いしていた。なぜだろう、今週は日付けがゆつくりと進んでいる気がする。病院へ行かなかった、ただそれだけのことで、体感時間の流れは緩やかになるものなのだろうか。それとも酒をほとんど飲まなかったことが原因だろうか。私は酒を飲むと眠る。なぜなら、酒を睡眠薬がわりに使っているからである。このような酒の飲み方は、きっとよくない。良くないが、私の体がいまさら故障したところで、いったい誰が心配するのだろうか。

麦茶を飲もうと冷蔵庫を開けると、麦茶が入っている大きな容器の底に一匹のなめくじが沈んでいた。これはさすがに飲んで大丈夫な代物ではないだろう、と思った私は麦茶を流しに捨てた。流しにはなめくじが残った。なめくじは私に言った。「おや、私の体液が入っていた水は飲めないか？」当たり前だろう、人間の体液入りの麦茶すら飲む気が起こらないのだ、人間以外の生き物の体液入りの麦茶など誰が飲みたがるものか。「それは残念だ。私の粘液には狂いを強制する力があるというのに」私は思わず訊き返した。

晩餐の後、キノコのせいでふらつく足を引きずって自分の部屋に戻り、机の上にスタンバイさせておいてなめくじの体をひと撫でした。するとなめくじの体の粘液が指に付着した。私はそれを舐めた。すると急に、狂ってぼやけていた世界が鮮明になった。あまりにも急に鮮明になったので、軽い恐怖すら覚えた。そして、狂いは起こらなかった。「効果観面でしょう」なめくじは得意げな顔で（なめくじに顔と呼べる部位があるのか疑問だが）そう言った。顔はともかく、声色は得意げだった。私は、そうだな、と答え、夜を何もせ

ず^ずに過^すごした。狂^{くる}わ^わず^ずに過^すごす世界は、こんなにも退屈^{たいくつ}なのか。

2011年10月29日（前書き）

この作品は作者の創作であり、作者の日記ではありません。

2011年10月29日

10月29日(土)

朝、起きたら文学的出来事が私を待ち受けていた。私の部屋には小学生入学時に買ってもらって今も使っている机がひと揃いあるのだが、そこになめくじがいたのだ。寝起きで出会う机の上のなめくじ。これって文学にならないだろうか。そんなもんが文学になるなら文学はもつと門戸が広いはずである。文学なめんな、と私は自分に言い聞かせた。そしてなめくじは声を発した。「何なら、私に定期的に水を供給していただくのと引き換えに、体液を好きな時に好きなだけさしあげますよ」と、それは提案だった。私は、その提案には乗らないことにした。そんな取引を交わしたら、私はなめくじの体液依存症になってしまう可能性がある。アルコール依存より響きが病的で、私はそれが嫌だった。「そうですか、それは残念ですね」そう言つと、なめくじはカタツムリが這うような速度で私の机から去っていった。私はそれをずっと見ていた。他にやることがないからだ。

相変わらず狂っていた私は、狂おしいほどにアルコールを欲していた。飲めば吐くことは明らかなのに、それでも酒が飲みたいのである。それと同時に、私は気が付いた。私は自失したいのだ。私は私でなくなりたいのだ。私は自分のことが大嫌いで、狂つてまで自分を忘れてしまいたかったのだ。と気づくと、私はなぜか泣いていた。酒が欲しすぎて悲しくなんかないのに泣いていた。悲しくない。本当に悲しくない。

昼過ぎに、チャイムの音が鳴ったので玄関の扉を開けてみた。するとそこには誰もいなかった。しかし、私が扉を開けると同時に、何かに触れられた気がした。それは人間のような温度を持っていて、

柔らかくて、それが気持ち悪かったので、私は直ちに扉を閉めた。いったい何が私に触れたのか、見えなかったのでまったくわからなかった。

晩餐の席において、私はいつものようにキノコを食べた。すると私は狂い、いつもと同じ風景が見え、それから気を失った。そして深夜に起きだして、日記を書き始めた。机の上には何もいない。なめくじもいない。なめくじは私を見捨てたのだろうか。そもそも、なめくじは私をどうしたかったのだろうか。

2011年10月30日（前書き）

この作品はフィクションであり、
実在の人物・団体・建物とは一
切関係ありません。

2011年10月30日

10月30日(日)

今日は八回トイレに行った。うち三回は吐くためである。気温が下がってきたせいか、胃が飲んだ水を戻そうとばかりしている。もちろん吐くものは水ばかりである。そのうち晚餐も吐くようになるのだろうか。そうになったら私は栄養失調に陥って死ぬ。でも家族にとって、それは良いことなのかもしれない。父と妹は相変わらず私を無視し続けている。

朝、起きると家族が出かけていた。家に誰もいなかったし、靴も私のものしか置かれておらず、鍵もかけられていたので、家族が私を置いて出かけたことは確実である。この前は動物園だったから今回は近所のイオンモールあたりかな、と予測を立ててみる。家の近所には、田舎らしく非常に巨大なショッピングモールがあるのだ。そのショッピングモールの周辺は田んぼが取り巻いている。田んぼの中に突如現れる近代的なショッピングモールの姿は、とても違和感がある。しかし地方のショッピングモールは巨大なものと相場が決まっているようで、千葉も埼玉も熊本もショッピングモールは大きいらしい。逆に東京のものは小さいらしい。これらはすべて、インターネットで仕入れた情報である。私の情報源は新聞とテレビとインターネットしかない。普通か。

昼ごろ、チャイムが鳴ったので私は玄関の鍵を開けた。家族はまだ帰ってきていない。扉を開けると、そこには榎本なごみが立っていた。立っているだけで入ってこない。榎本なごみは私に触れた。「今日は、見えるんですね」榎本なごみは相変わらず口調が一定しない人物である。私の妄想の産物だからかもしれない。妄想の産物だから、設定が気分によって変わるのだ。

榎本なごみはすぐに帰り、その直後に家族が戻ってきたので、私は鍵を閉めた。勝手に鍵を開けたことが知れたら怒られるかも知れなかったからだ。母は晩に、お土産、と称して食卓に宝楽饅頭とキノコのソテーを並べた。宝楽饅頭とは東京では今川焼と称される宮崎特有の和菓子である。あんこが皮も破れよとばかりに詰め込まれているため、一個一個が重く、二個も食べれば満腹になる。それでも食卓には三個並べられていたので、私はそれを三個腹に詰め込み、さらにキノコのソテーも食べた。そして狂った。まるで狂うのが義務であるかのように、私はキノコを食べたのだった。

2011年10月31日（前書き）

この作品は作者の日記ではありません。

2011年10月31日

10月31日(月)

週明けである。今日から日中の人通りが減ると思うと、思わず外に出たくなってしまふ。これは狂いが解消されてきた証拠だろうか、それとも酒を摂取しなくなったからこんな活発なことが思いつくようになったのか。私は散歩へ出てみようと思いついた。そんなことよりハローワークへ行くべきではあるが、気分が乗らなかった。私は無目的に外を歩き回った。そしてすぐ家に帰った。寒かったからである。寒さのあまり、冷たい空気が胃を刺激して、歩きながら一度吐いた。唾と唾液しか嘔吐物には含まれていなかった。

猿というペンネームの作家が書いた小説「このキノコ人間が、」を読み終えた。読みづらい文章が余白は許さんとはかりにぎつしりと書きこまれた、退屈ではあるが嫌いではない小説だった。人が殺される様子が子細にグロテスクに描かれている小説よりは好みである。しかし普通の娯楽小説に比べれば退屈である。ペンネームが普通だったら、きっとこの本は売れなかつただろう。というか、この本は売れたのだろうか。図書館にある本は売れた本であるとは限らない。

久々にメーラーを開き、猿にメールを出してみた。内容は小説の感想である。猿というペンネームの作家が書いた小説は、嫌いではないが退屈でした、みたいな文面を作成して送信した。メーラーには出会い系業者の広告メールが届いていたのでそれらはすべて削除した。すると猿からのメールしか残らなかった。

晚餐の席に出されたのは肉まんだった。そんなに母は私のために料理するのが嫌なのだろうか。しかしキノコのサラダは添えられて

いた。私はキノコを食べて狂わなければならない。狂っていないければ平常心を保てない。なめくじとのやり取りで、私はそれを確信した。

2011年11月1日（前書き）

今日の更新内容は現実とは一切の関係がありません。もちろん昨日分も、一昨日分も、それ以前もです。

2011年11月1日

11月1日（火）

パソコンでインターネットを用いて筋肉少女帯の歌を聴いていると不安な気持ちになってくる。たとえ昼でも、である。深夜に比べ感受性が落ちると一般に言われている昼のほうが、狂っている私としては不安になる率が高い。それとも昼間に不安になるようなことをやっているのが原因か。例えばインターネット等。

実は家からは時間をかければイオンモールまで歩いていくことができる。なので歩いてみた。一時間近くは歩いたと思う。到着しただけで私は疲れ果て、入ってすぐの食料品売り場で空腹に悩んだ。それでも私は奥に進んだ。せっかく苦勞して到着したのだから、少しは見て回らねば損、そんな風に考えたのである。周囲は田んぼばかりで、特に見るものもないことだし。そして私はイオンモールの奥へ奥へと進んでいった。よく知らないブランドの洋服店、サンリオのキャラクターショップ、小規模な楽器店などを経て、私は最奥のゲームコーナーにたどり着いた。そこで私は人がプレイしているポップンミュージックをひとしきり眺めた。私は泣いていた。何をやっているんだと、私は泣いていた。

そんなにゲームができないのが悲しいのであれば働くべきである。私は金曜日には必ずハローワークへ行って仕事を探そう、と心に誓った。金曜日は遠いが、明日は病院へ行って大きく心変わりする可能性が高いが、それでも一応誓ったのである。しかしきつとこの決意は心変わりすることだろう。私はそんな人間だからだ。これは狂っているとか関係なく、生まれつきそうなのである。そういえば、以前医師が言っていた。人間には狂いやすいタイプというものが存在する、と。私はそうなのだろうか。自問したところで答えが出る

わけがない。覚えていれば明日の病院で尋ねることにする。

ゲームセンターからの帰り道、イオンモール内で元編集者とすれ違った。すれ違っただけで、言葉も交わしていなければ目も合わせしていない。元編集者は背広を着ていた。何の活動をしていたのだろうか。それから一時間弱歩いて家に帰りつくと、母と新しい編集者が打ち合わせをしていた。私は空気のようにその脇を通り抜けて自分の部屋に戻っていた。居間から漏れ聞こえる打ち合わせの音声によると、母の新しい本がもうすぐ出版されるらしい、とのことだった。タイトルは忘れたが、忘れる程度にインパクトの薄いタイトルだったことは確かである。

晚餐の席では牛丼が出された。これは牛丼の素を使って作られたものだろうか、やはり母はもう私にちゃんとした食事を作るのが嫌になったのだろうか。分からなかったが、とにかく刻んだキノコは混ぜ込まれていた。私はそれらをまとめて食べた。そして狂った。狂ったまま意識を失った。気を取り戻した現在。午前三時である。

2011年11月2日（前書き）

この作品はフィクションであり、作者の現状とは一切の関係がありません。

2011年11月2日

11月2日（水）

概念。眠りという概念。こうして晩餐に出されたキノコのせいで狂って深夜まで意識をなくし、そのまま日記を書きながら朝を迎える毎日を迎える私は、正常に眠れているのだろうか。狂って気絶することは、眠りとは呼べないのではないだろうか。だから私はこのところ、午前中から午後にかけて寝ることが多いのではないだろうか。そんな分析しても、自分の役にしかたない。いや、自分に対してどんな役に立つのかすら想像できない。とにかく明日は祝日だ。朝のテレビのニュースを見ていて、それに気が付いた。

病院へ行った。自分は狂いやすいタイプなのか、と私は医師に尋ねてみた。昨日思っていた質問内容を奇跡的に覚えていたのである。「あなたは先天的に狂いやすい体質なんですよ」と医師は教えてくれた。それを掘り下げた質問をしようと思ったが、どう掘り下げたものかわからなかった。そして掘り下げ方がわからないまま、黙っていたため、そのまま診察を打ち切られてしまった。やはり世の中の人間は私を話すことが嫌なようである。

家に帰ってパソコンのメーラーを開いてみると、猿からの返信が届いていた。「ご感想ありがとうございます。今度出る新刊をお送りしたいと思うのですが、どうでしょう」送るにしても、私の家の住所を知っているのだろうか。きっと知っているのだろうか。どうやって知ったのかはご存じない。私は、ぜひ送ってください、と返信を返した。重ね語である。

晩餐の席で出されたのはアイスと冷やし固められたキノコだった。さすがにこれは抗議したほうがいいだろうか、それとも抗議したこ

とに腹を立てて「じゃあもう作らない」と言いたいがために、こんなメニューを響したのだろうか。「文句ないの？」と訊かれた。妹に。久方ぶりに妹から話あつけられた。なので私はびっくりし、しばらく言葉を返せないでいた。数分立つてから、やっと、ある、と一言だけ返すことができた。「じゃあ言えば？」そんなことを言う資格は私にはない、と伝えた。「へー。どっちつかずなんだ。じゃあ死んだら？」妹はよく私に死ねという。子供のころから言われ続けてきた。なので慣れている。慣れているので傷つきもしなかった。

2011年11月3日（前書き）

この作品はフィクションであり、
実在する人物・団体・事件とは
一切の関係がございません。

2011年11月3日

11月3日（木）

今日はふれあいサロンの曜日なので車でふれあいサロンが内包されている保健センターまで連れて行かれた。すると保健センターは閉まっていた。私を車で運んだ私は忘れていたのだ、今日が祝日であつたことを。閉まつたままの保健センターの入り口でこれから夕方までどうすればいいのかわからず途方に暮れていると、元編集者がある気で現れた。元編集者も閉まっているため真つ暗な保健センターの中を見て呆然となっていた。しばらく呆然と立っていた。帰らないのだろうか。「帰つてもなあ。離婚したから一人だし」自分が結婚していたことがある、ということを私に自慢したくてそう言ったのだろうか。「まさか。そんな自慢、してもお前は悔しがないだろ」確かにそうである。私は結婚に幻想が抱けない。しかしそんな私の性質を見破れるとは、まさか元編集者は私に興味があるのだろうか。「まさか。狂った人間が結婚なんてできるわけがない。俺はそう思っただけだよ」しかし、元編集者も狂っている。「ああそうさ。俺は猿先生が猿だったショックで狂ったさ、だから結婚していられなくなった。

それきり、何も話さずに私たちは夕方まで待った。何の刺激もない、つらい数時間だった。母は夕方迎えに来て、迎えに来た母に今日は保健センターが休みだったことを伝えたが、「そう」としか言わなかった。まあ、母が今更どんな理不尽なことを私にやつても不思議ではない。晚餐にアイスを饗したことすらあるのだから。

家に帰りついた私は、パソコンを立ち上げてワードを開いてみた。私の新しいノートパソコンにはオフィスがあらかじめインストールされていた。私はワードに何かを書こうかと考えてみた。しかし何

も思いつかなかった。そもそも何かを書いたとして、それを誰に読ませたらいいのか、思い当るところがどこにもなかったのである。とりあえず、メール友達と呼べないこともない、しかしこう呼ぶと相手は嫌がるかもしれない、そんな程度の関係性のある相手である猿に向けて何かを書いてみることにした。すると、するすると書くことができた。「このキノコ人間が、」の冒頭と、全く同じ文面が。私はそれを削除し、ワードを閉じた。

晚餐には一汁三菜が出された。まるで定食屋で饗されるようなまともな食事である。昨日の晚餐を見た妹が母に何か進言でもしてくれたのだろうか。「そんなわけないでしょ」尋ねてみると、妹は言った。妹は私に優しくなどない。きっと母が気まぐれでも起こしてまともに飯でも食わせてやろうか、そんな気になったのだろう。

2011年11月4日（前書き）

この作品はフィクションであり、作者の日記ではありません。

2011年11月4日

11月4日（金）

朝、起きると母に呼ばれた。そういえば朝に目覚めるのは久しぶりだ。そんなことを考えながら呼ばれるがまま、命じられるがままに私は朝の食卓に座った。母は私の正面に座っていた。そして私の目の前にはキノコが置かれていた。「昨日、食べさせ忘れていたわ。今食べなさい」どうしても食べなければならぬのか、と私は尋ねてみた。「当たり前でしょう」母は言った。だから私はそのキノコを口に入れた。相変わらず赤いくせに味のないキノコだった。

目覚めたのは夕方だった。私は食卓に突っ伏した状態のまま目を覚ました。目の前には猿がいた。と思つたらそれは榎本なごみだった。どうして榎本なごみはいきなり表れるのだろう。いつもいつも。「私はあなたにとって都合がいいでしょう？」その通りである。「だからだよ」自分は妄想である、と宣言したのも同然の発言だった。私は悲しかった。少し、悲しかった。しかし涙を流すほどのものではなかった。うすうすそうなんじゃないかとは予想していたからだ。

それが喜びであれ悲しみであれ、感情の激しい動きは行動の原動力になる。私はパソコンのワードを開き、オリジナルの話を少し書いてみた。後のことなどは少しも考えないまま、登場人物を三人登場させた。この三人は恋をするかもしれないし、殺しあうかもしれない。登場人物には勝手に動いてもらうことにした。

晩餐に出されたのはカレーだった。適当である。テレビを見ていた妹に、晩餐に何を食べたのか訊いてみた。「焼きナス。あとそばの肉じゃが。味噌汁」やはり母は私の料理に限って手を抜いていた。そういえば、と私は晩餐の中にキノコを探してみたが、見つ

らなかった。キノコの処方は一日一回と決まっているのだろうか。

2011年11月5日（前書き）

この作品は作者の日記ではありません。

2011年11月5日

11月5日(土)

私が書こうとしている小説の三人の登場人物の性別の内訳は、男男女女である。女は榎本なごみに似せて描写した。他の人物に似せると私を罵倒するだけの存在になりそうだったからだ。登場人物たちは勝手に動き始め、三人で動物園に向かった。しかし男の一人が財布を忘れていたため一人だけ入場料を支払うことができず、そのまま三人は公園で夕方まで過ごした。残り二人は男の代わりに入場料を出してやるつもりはないようだった。変な話である。

見ることもないのに午後のワイドショーを見ていると、パソコンでタイピングする猿の話題が出ていた。あのサルかも知れない、と思ったが、やはり猿の顔の違いなど分からなかった。しかしあの猿が私とメールを交換している猿かもしれない、そう考えると、見たなくなっただけで私はテレビを消した。知り合いがテレビなんてものに出ているなんて、なんとなく嫌だ。

それから図書館へ行ってみたが夕方になっていたので閉館間際だった。私は「このキノコ人間が、」を返却し、急ぎ足で猿の別の小説を探してみた。すると「私とカエルについて」という文庫本を発見したので借りてみた。

晚餐にはシチューが出された。シチューのみであり。サラダも白米もない。もし私だけシチューのみという晚餐なのであれば、一人前のみのシチューを作ることはほかの二人と同じメニューを作るより手間がかかることなのではないか、と考えつつシチューを口に入れてみるとキノコが入っていた。食感的には邪魔だったが、味がないのでそれ以上の感想はなかった。相変わらず私はそれから狂った。

深夜に目覚め、「私とカエルについて」を少し読んでみると、驚いたことに恋愛小説であるらしかった。

2011年11月6日（前書き）

この作品はフィクションです。ですってば。

2011年11月6日

11月6日（日）

想像力が、創造力が湧いてこない。小説を書こうとしただけで私の気力は枯渇してしまつたらしい。だから今日は書かないことにする。と決めていたら、パソコンの調子が悪くなった。変換機能が狂つて、漢字に変換しようとしているのに半角力タカナに変換されてしまい、そのまま勝手に確定されてしまう。人の狂いは電子機器にも感染してしまうものなのだろうか。

だから今日はパソコンを閉じてひたすら小説を読んだ。「私と力エルについて」内での二人はつかず離れずの距離を保つたまま中盤まで差し掛かった。しかしやっぱりパソコンの調子が気になるのでもう一度文字を入力してみたが、結果は同じで、やはり半角力タカナで確定されてしまう。神が文章を書くなどとも言っているのだろうか。

どうしてもパソコンの異常動作が気にかかつてしまい、とてもワードを開いていることなどできない。仕方がないので登場人物たちには頭の中で動いてもらい、それを手書きで書き記しておくことにした。榎本なごみに似せた女の登場人物が男の登場人物に唐突に殺されそうになった。いったいどうした。錯乱でもしたのか。

晚餐の席でパソコンの異常について母に話していると、そこに父が食いついてきた。父と話すのは何か月ぶりになるだろう。「見せてみなさい」と父が言うので、私はパソコンを父に見せた。「箱はないのか」と父は問うてきた。そういえば榎本なごみが持ってきたパソコンは箱に入っていた。父はそれを探った。するとサポートセンターの電話番号が記されていた紙が発見された。「明日、電話し

てみなさい」父は言った。父はそんなにパソコンが好きだったか。頭の中を探ってみたが、今まで私にそんなそぶりを見せたことはなかった。新発見である。

2011年11月7日（前書き）

この物語はフィクションであり、
実在の人物・団体・事件とは一
切の関係がありません。

2011年11月7日

11月7日（月）

起きると異様に汗をかいていた。何か嫌な夢でも見たのか、それともパソコンの調子が悪いのがそんなに心配なのか。起伏のない今の生活の中、パソコンの調子が悪いのは大事件である。それ故、こんなにも体が勝手に慌ててしまっているのだろうか。とにかく目覚めたのは十時過ぎだったので、昨日父に発掘してもらったサポートセンターへの電話番号を使って電話した。そして言われるがままに「ツール」から「プロパティ」を選択し、「プロパティの設定を規定値に戻す」を選択した。すると文字入力機能は正常値に戻った。

午前中にニュースを見た。動物園から珍しい猿が逃げ出した、というニュースである。ニュースを主にインターネットで仕入れている私としては、テレビで初見であるニュースを目にすることは稀である。地域ニュースだったからだろう。最近の私は、自分が住んでいる地域のニュースを取り扱っているサイトをあまり見ない。逃げ出した猿は目がパツチリしていて背筋がピンと立っているのが特徴とニュースは報じていたが、私には猿を見分けることなどできない。時折人間だって見分けられなくなるくらいなのだ。

私が人間を見分けられないことがあるのは、狂っているからではない。と思う。これは先天的なもので、人間のパーツの特徴を頭に留めておくことができない脳というものが存在する。私の脳はそれに該当している。と、私は病院の初診時に告げられた。病院の初診時には、簡単な知能テストのようなものを受けた。人間の顔のパーツが描かれたパズルを完成させよ、というテストで、私は一分以上かけてパズルを完成させ、しかも右目と左目が逆であることに指摘されるまで気づかなかった。パズルの成績はきつと平均以下だった

のだろう。まあ、人間の顔が多少分らないくらいで生きていくのに苦労はしない。そんなことより狂ってしまったていることのほうが重大な問題である。

文字入力機能が治ったので、文章の執筆を再開させた。架空の人間が架空の物語を演じるのだから小説と呼んでもいいような気がするが、それは本物の小説に対して申し訳ない気がする。なのでこれからは文章と表記する。ただ文字が並んでいるだけの一物なのである。その文章の中で、登場人物を今日も勝手に動かした。前回は殺し殺されかけていた男と女の登場人物が、今日はベッドで二人寝していた。どうやら私が完成させようとしているのは男と女の愛憎劇であるらしい。冒頭の動物園のくだりはいったいなんだったのだろう。

晩餐の席で生姜とキノコのスープが出された。私は汁を少し飲んだだけで昏倒した。そういえば、昨日の晩餐にはキノコが含まれていなかった気がする。一日置いてキノコを食べただけで、こんなにも激しく狂うものなのか。狂いへの耐性が、私はまだ完成されていないようである。

2011年11月8日（前書き）

この作品は作者の日記ではありません。

2011年11月8日

11月8日（火）

郵便受けを覗くのは私の役割ではない。しかし、今日はなんとなく郵便受けを覗いてみた。すると一通だけ私宛の荷物が届いていた。それだけを持ち、残りは郵便受けの中に放置して部屋に戻った。荷物は手紙にしては分厚く、それ以外のものとしては一つしか思い当る大きさのものがなく、その思い当るものとはハードカバーの本だった。封を解いてみると、それはやはりハードカバーの本だった。表紙には大きなゴシック体で「このキノコ人間が。」と書かれていた。作者は猿で、訳者の欄には母の名が書かれていた。いったい母は猿の何を翻訳したというのだろうか。それにしても、タイトルである。私がこの前読んだ「このキノコ人間が、」の「、」が「。」に変わっただけである。こんなにも似偏ったタイトルの本を出してもいいものだろうか。それともこの本は「このキノコ人間が、」の続編なのだろうか。そんなもの、読んでみなければわからない。なので読み終えてから考えることにした。

しかし読書とインターネットばかりの日々にいい加減嫌気がさしていたので、少しは気が晴れることを期待して金はないが外を歩いてみることにした。やはり平日だけあって、人の姿は少ない。それ故、すれ違う人間の一人一人が印象に残りやすい。私がすれ違う相手にしても然り、だろう。今日は学校をさぼっている風の小学生くらいの男とすれ違った。相手は私をすれ違いざまに凝視していた。私はどう思われたのだろうか。きっと不審者と見られたに違いない。狂った人間は不審者に見られがちである。

帰ってきたら来客があった。扉を開くと「初めまして」と来客が言った。しかしそれは榎本なごみだった。「どうして私の名前を知

っているんですか？ あてずっぽうで当てたとしたら、それはすごいことですよ」私も榎本なごみの態度を不審に思った。どうして関係がリセットされてしまったのだろう。

晩餐の席で生姜とキノコのスープが出された。その汁を飲んだだけで、私は昏倒した。そして深夜に目を覚ました。机に突っ伏したまま目を覚ました時、主菜は片づけられていたが、スープのカップだけはそのままだった。今日は狂いの発作が激しい。そういえば、昨日はキノコを食べていなかったような気がする。一日抜いただけで、狂いに対する耐性は落ちてしまうものなのだろうか。以前はそんなことはなかったはずだ。どうしてなのか。

2011年11月9日（前書き）

この作品は日記という形式をとってありますが、作者の日記ではありません。

2011年11月9日

11月9日（水）

今の自分に何ができるのか？ 履歴書を買う金もなければ何かをやるうという気持ちすら起こらない、パソコンを使って文章を書いているがそれを見せようとしている相手は猿なのだ。しかも猿は動物園を脱走した。あの猿なのかは分からないが、猿が私の書いた文章メールで送信ても読んでもくれるとは限らない。私は何もできないのだ。そう考えると泣きそうになったが、止めておくことにした。まるで自分が何もできないことを認めるみたいだったからだ。

昼ごろ目を覚ますと、自室の階下の居間で母と誰かが話している声が聞こえてきた。こっそり見に行ってみると、母と元編集者が話していた。しかもその内容は仕事の話のようである。どうして編集者をやめて狂人の仲間入りをしたはずの編集者が母と仕事の打ち合わせなんてやっているのか、どうしてなのかわからなかったのを見つからないように部屋に戻った。昨日の榎本なごみのことといい、どうもおかしい。もしか、と思ってしばらく待つてみると、階段を上ってくる足音が聞こえてきた。

ノックもなしに部屋に入ってきた（元）編集者に私は尋ねてみた。この部屋の何かを破壊するつもりなのか。「よく知っているね」この前退職したのではないのか。「そんなわけじゃないか」やはり、編集者との関係もリセットされてしまっている。そこで、編集者から聞いた話をしてみた。猿というペンネームの作家は本当に猿であるらしい。と。「そんなわけないだろ。あの猿先生が猿なんてそれにしても、どうして僕が猿先生を尊敬していることを知っているんだい」上から目線で編集者は言った。そして続けた。「それにしても、この部屋にはこれ以上破壊できそうなものがほとんどない

なあ」私の部屋のは編集者にあらかた破壊されてからそのままになっている。修繕費や代わりのものを用意する金などを私を見損なっている私の家族が用意してくれるわけがない。壊されていないものと言えばノートパソコンくらいだ。というわけで、編集者はきつとノートパソコンを破壊するだろう。しかし、私はそれを死守するつもりである。例えどんなにみつともない格好になろうとも、泣きながらしがみついて破壊するなこの野郎とズボンの裾を掴むつもりである。「そりゃあ不気味だ。ぞつとするね。分かったよ、やめておこう。君がこれ以上不幸になるとも思えないし」そうだろうか？　と思っただが、せつかく引き下がってくれるのだから、と、私はそれを口に出さずに編集者が立ち去るのを一歩も動かずに見送った。

晩餐の席に鍋が出された。具はウィンナーと白菜と肉団子と鮭とネギと豆腐と糸こんにやくと練り物の団子と、とにかくなんだか名称のわからない鍋だった。私の取り皿にだけ、キノコが入っていた。父も妹も、私と同じ鍋をつついた。まるで今まで何事もなかったかのように、私と普通に言葉を交わした。何があっただろう。

2011年11月10日（前書き）

この話は作者の日記ではありません。

2011年11月10日

11月10日（木）

仮説が浮かんだので、実践してみることにした。仮説と言ってもそれはもう簡単なもので、あの操作をやったらまた同じことが起こるんじゃないか、という仮説である。なので私は実践してみた。パソコンの文字入力機能の「ツール」から「プロパティ」を選択し、「プロパティの設定を規定値に戻す」をクリックした。何かが起こった気配はなかったが、母が私を呼ぶ声が聞こえた。ふれあいサロンへ連れて行かれる間にこの操作を行ったのだ。

ふれあいサロンでは、以前働き始めたことを自慢げに語っていた男は来ていなかった。人が話しているのを本を読みながら聞いたところ、仕事が忙しくなった、らしい。きっと木曜日に清掃のシフトが入られたのだろう。それは幸福なことだろうか。私は当人ではないので分からない。何もやることのないサロンで、そんな話を聞いていたので、「このキノコ人間が。」を読むという作業はあまり進まなかった。

帰ってくると榎本なごみが表れた。チャームを押して玄関に現れたのである。「初めまして」と彼女は言った。どうやら仮説は真実で、パソコンの文字入力設定を規定値に戻すと私にかかわる人間の環境もリセットされるらしい。メカニズムは分からない。そんなことを考えている私を前に、榎本なごみは首をかしげた。

そのまま榎本なごみは晚餐に同席した。家族は驚くほどフレンドリーに榎本なごみを受け入れた。榎本なごみとはいったい何者なのか。昨日はまともに言葉を交わしてくれた家族に尋ねてみたが、答えは返ってこなかった。私は晚餐に交じっていた味のないキノコを

口に入れ、
気絶するほどの狂いが始まったのを自覚した。

2011年11月11日（前書き）

この物語は作者の日記ではありません。作者と登場人物には何のかかわりもありません。

2011年11月11日

11月11日（金）

気が付くと私はベッドのままショッピングモール内を移動していた。ベッドには動かすためのレバーが備え付けられていて、それを操ることで私は寝ころんだままショッピングモール内を自由自在に動き回ることができた。しかし、ついにベッドを出なければならぬ時が来た。尿意が襲ってきたのだ。私はベッドのままトイレに入り、ベッドを何とか傾けて用を足そうとした。しかしベッドに寝転んだままだと何をどうやってもどうにもならない。仕方がない、ベッドから降りるか、と思い、ベッドから降りるとそこは現実世界で私の部屋だった。夢の話で段落を一つ使ってしまったのだ。なんとこの無意味な日記なのだろう。いや、夢日記は無意味ではないかもしれない。

私の周囲に起こる出来事は、すべて本当の出来事ではないのではない。夢に妙なりアリティがあったため、そんなことを考えた。編集者はもちろんのこと、榎本なごみも本当に存在するものではない、のではないだろうか。パソコンの文字入力機能の設定をリセットしたことでリセットされなかったことと言えば、ふれあいサロンでの光景くらいだ。しかしふれあいサロンは週に一度しかない。私はこの悪い夢のような現実を生きていかなければならないのか。そう考えると寝たくなつた。しかしもう目覚めてしまつて眠くなくなつた。

こんな時は無理矢理にでも何か行動を起こしたほうが良い、そのくらいの知恵は持ち合わせている。私は指を動かすことにした。猿に見せる（といっても猿がまだ動物園に居るという保証はないが。という猿の正体は不明なのだが）ための文章を書くことにしたの

だ。登場人物の男は女をあつさりさし殺してしまい、もう一人の男が警察を呼んだ。どうしよう。このままでは単なる犯罪劇で終わってしまう。しかも何のトリックもない。私は新しい登場人物をこさえることにした。明日までに。

晩餐後の狂いのあまりの気絶から目覚めると、頭の中に新しい登場人物が誕生したので慌てて深夜にパソコンを起動してワードに書き付けた。通報した男の妹である。女を殺した男をかばって、通報した男の妹は女を殺した男と二人で逃避行を開始した。通報した男は二人を追い始めた。これで、まだ物語を続けることができる。私は安堵した。直後、どう物語を続けるつもりなのか、と自問して、安堵は吹き飛んだ。

2011年11月12日（前書き）

この作品はフィクションであり、
実在する人物・団体・事件とは
何の関わりもありません。

2011年11月12日

11月12日(土)

寝ている夢をよく見るようになった。最近昼まで寝てばかりいるせいなのか。昼まで寝ているうえに晚餐後に気絶して眠っているのである。一日の半分は寝て過ごしているかもしれない。それでも、誰も困らないのだから睡眠時間はなかなか減らない。誰かにとっての大切な人に慣れるよう努力すべきだろうか。だとしたら、どう努力すればいいのだろうか。金もないのに。

私が書いている文章の現在の登場人物は、逃避行を続ける男女とそれを追う男の三人である。追う男に手がかりを渡すため、私は逃げる男に殺した女との思い出の品を落とさせた。これで文章の展開に少しは緊迫感が出るのではないか、と思ったのである。緊張感のない文章は、読まされてもただただ苦痛を感じるだけだろう、きつと。

見知らぬ男女が訪ねてきた。扉を開けると見知らぬ男女が経つていて、男が叫んだ。「助けてください！」そして私は、なぜかその明らかに怪しい男女を家に上げてしまった。男女に水を与えると、それを飲んでしばらくの間は落ち着いた。しかし、すぐに男が慌てだした。「思い出の品がない。思い出の品が」それはいつたいたんなのか。「それはたいへんだわ」と女も慌てていた。そういえば、私はまだ文章の登場人物の男が落とした思い出の品を「思い出の品」としか書いていなかった。それがなんなのか、思いつかなかったからである。私は慌てる二人を残して自室に戻り、「思い出の品」を「手品用のハートのエースのトランプ」と書き換えた。降りると男は「トランプがない！」と騒いでいた。

晩餐の間、自室に男女をかくまっておいた。どうしてこんなことをやってしまうのか、自分で自分が謎である。変に情が移ってしまったりしてしまう前にさっさと男女を追う男に引き渡してしまわなければならぬ。そうしなければいつまでもだらだらと逃避行が続いて、起伏の少ない文章になってしまうのではないか。そんなことを考えながら食べ終えた晩餐后、部屋に戻ると、ほとんどのものが編集者によって破壊された部屋で、男女が破壊されていないノートパソコンを開いていた。男女は、やばい、みたいな顔をしていたが、私は晩餐に出たキノコのせいで狂いが回って倒れそうになり、それでもこらえようとしたがこらえきれずに倒れた。男女によってパソコンが荒らされてしまうのではないか。そんな不安が頭をよぎった。

2011年11月13日（前書き）

この作品はフィクションです。作品内作品も当然フィクションです。

2011年11月13日

11月13日(日)

深夜のことである。狂いから覚めてみると男女の姿は消えていた。ノートパソコンは開かれっぱなしで、スクリーンセーバーが作動していなかった。画面は真っ黒だった。私はスクリーンセーバーを「なし」に設定しているためだ。それでも起動していることが分かったのは、電源ランプがついていたからだ。マウスを少し動かして真っ黒のスクリーンセーバーを終了させると、ワードが開かれていた。どうやら男女は私の書いた文章を読んでいたらしい。それどころか書き足されてすらいた。逃げる男女は無事に逃げおおせ、それからというものの幸せに暮らしましたとさ、めでたしめでたし。と書かれていた。私はそれを消した。すると部屋に男女が表れた。「私たちの未来を消さないください」女は言った。しかし、それだと文章が面白くならない。「面白くなくていい。平穩で、平凡でいいから、そんな穏やかな生活を送れるように、そう書いてくれないか」男はわがままを言った。しかし、人殺しが平穩を手に入られる、なんて展開が、許されるわけがないので、私はそれを却下した。無下に却下したので、そろそろ襲い掛かってくるかな、と思ったが、男女は脱力しただけだった。そしてしばらく経つと、女が口を開いた。「それじゃあ、」

それからしばらく交渉は続いた。そして交渉の末、妥協案として男女の逃避行がまだ続く、と私は書き足すことにした。そしてさっそく逃避行は続いた、と書き足した。すると男女は部屋から逃げ出した。私が男女は捕まったと書かない限り、男女は男から逃げ続けるだろう。人殺しを警察に通報した、世間的に正しい行いをした男から、ずっと。しかし、ただ走らせるだけでは単調でつまらなくなってしまうので、私は男女に出会いを用意することにした。手っ取

り早いところで編集者に似た男を登場させた。男は男女を自宅にかくまった。そしてその夜、編集者に似せた男は男女から金品と金を奪おうとした。男女は逃げ出した。

ひどいことを書いてしまったな、と思っていると、男女が部屋に戻ってきてまた抗議を始めた。その時は晚餐後だったので、晚餐で食べさせられたキノコのせいで倒れる寸前だった。「人の不幸を書くななんて信じられない」と女は小説というものを否定するようなことを言った。小説というのは大体人の不幸を書くものだ。それなのに、この人物ときたら。とにかく、パソコンに触らないでほしい。いくら文章を書き換えたとしても、この部屋から逃げ出す男女と違ってこの部屋に残り続ける私は、いくらでも文章の内容を書き換えることができるのだから。それだけ言うと、私は倒れた。今日はほとんど部屋から動かなかったのに、怒涛の一日だった。

2011年11月14日（前書き）

この作品はフィクションであり、登場する人物・団体・事件は架空のものです。

2011年11月14日

11月14日(月)

猿に宛てる文章をどのような結末にしようか、などと考えていたり文章に出てきた逃げる男女に翻弄されたりしているうちに昨日は終わってしまったていて、今日はすでに週明けになってしまっている。働いていないと時が経つのが異様に早い。いや、働いているときも時が経つのが異様に早く感じられた気がする。しかし働いている間だけは時が経つのが異様に遅かった。子供のころからずっとそうだ。面白くない時間ばかりが長い。不公平だ。誰に文句を言えばいいのだ。自分の感性か？

ハローワークへ行き、私の担当者になってしまった中年女性に、人と顔を合わせなくてもいい仕事はありませんか、と尋ねてみた。これを口にできただけでも大きな進歩である。こうして少しでも自分を褒めないとやっていられない。別に私なんかがやっていられないからうがまともに世の中は回っていくことが、ますますやっていられない気分にする。とにかく人と会わなくていい仕事を一つ、紹介してもらった。エクセルを用いてパソコンで文字入力するアルバイトである。エクセルの使い方なら授業で習ったことがある、と、日記には書いていないが、以前、中年女性に伝えていたので、このアルバイトが紹介されたのだ。

家に帰り、そのことを母に話し、決死の覚悟で、履歴書を買う金が欲しい、と頼んでみた。すると母は、自分の部屋から履歴書を持ってきた。また働き始めることがあった時のためにと、私が狂い始めると同時期に買っておいたらしい。ありがたいが、久しぶりに金銭を手にする機会を失ってしまった。

ここまで事が運んでしまつては履歴書を書かないわけにはいかな
くなくなつてしまったので、私は履歴書を書いた。狂つて仕事を辞めて
から現在までの空白期間が痛い。趣味特技欄に書いてあることが大
嘘であることも痛い。面接は明日である。そして明後日は通院日で
ある。今週は忙しくなりそうだ。

晚餐を榎本なごみが作っているのを偶然目撃した。そういえば、
こんなことが以前にもあつた気がする。でもその時は晚餐ではなく
昼食を作ってくれたのではなかったか。それにしてもどうして榎本
なごみが何の違和感もないかのように家に溶け込んでいるのか。母
は榎本なごみをどう思っているのか。そうこうしているうちに晚餐
が完成してしまい、榎本なごみは私と家族を食卓に読んだ。榎本な
ごみが作つたものはポークビッツとほうれん草の炒め物である。母
は私の席にキノコ粥を置いた。私だけはキノコを食べる、というメ
ッセージなのだろう。

榎本なごみは母に言った。「キノコ、食べなきゃいけませんか？」
私が、だろうか。榎本なごみの席にキノコ粥は置かれていない。き
つと、私が、キノコ食べなきゃいけませんか、なのだろう。「あな
たのためでもあるのよ」と、母は榎本なごみを向いてそう言った。
どうということなのかわからない、ということにしておこつ。と、私
は心に決めた。

2011年11月15日（前書き）

この物語なフィクションであり、現実とはずいぶん違います。

2011年11月15日

11月15日(火)

今日は面接、明日は病院と、今週は急に忙しい。しばらくの間、週にいくつも家から出なければならぬイベントがあつたことはほとんどなかったため、そう感じられてしまつのである。面接は午前十時に行われた。そして失敗した。向こうの「何か訊きたいことはありませんか」という質問に、「特にありません」と答えてしまったのだ。きつと熱意無き人間に見られたらう。「結果は一週間以内にご連絡します」とのことだったが、良い連絡が来るとはとも思えなかった。十五分間の面接で、私は疲労困憊し、悪い気分になつてしまつた。

そんな不安を文章にぶつけた。感情をぶつける相手がいるのは良いことである。先々月あたりのころと比べればかなりの進歩と言つても良いのではないか。ただし問題は、進歩と言つても実質何も結果らしい結果を残せていないところにある。状況は何も変わっていない。何も好転していない。

文章の中で、今度は男女を追う男にスポットを当てた。妹との思ひ出を書いてみた。追う男は幼少期、いじめに遭つていた妹をかばい、「一生俺が守つてやるからな」とありがちな台詞を口にした。そんな妹は、人を殺した男と一緒に逃走中である。世の中そんなものである。

晩餐の席に当然のように榎本なごみがいた。榎本なごみは私に尋ねた。「今、何に熱中しているんですか」そのくらい、知っているのではないのか。榎本なごみは現実の存在ではないらしい。「あなたの口から確かめてみたいんですよ」それならば答えるが、今は

文章を書くこと、である。生産性はほぼゼロである。どこかの賞に宛てる当てもなければ、不特定多数に公開するつもりもない。「私としゃべることには、熱中できませんか」榎本なごみは寂しいのだろうか？ そんなことはあるまい。榎本なごみは高校生で、学校に友達がいて、しゃべる相手には欠いていない筈である。何度か目撃したことがある。どうも、ついさっき書いたことと矛盾しているような気もするが、とにかく榎本なごみには榎本なごみの生活というものがある。私なんかに構っている暇などあるのか。「あなたが見たのは、私のモデルですよ」そうか。じゃあ榎本なごみは一体なんなんだ。「それはですね、」私はとっさにその先を遮った。なぜかその先を知るのが怖くなったからだ。

2011年11月16日（前書き）

この作品は作者の日記ではありません。

2011年11月16日

11月16日（水）

夢の中で私は、アルバイトをしていた。単純作業のつらいアルバイトだった。確か車と子供と食べ物に関係していたと思う。おそらくお子様ランチの車の形をしたプレートに食べ物をひたすら乗せていく、そんなアルバイトだったと思う。もちろん夢の話なので、実際にそんなアルバイトは存在しない。ほかのみんなは一般用の盆に普通の食事を載せているのに、私だけお子様ランチである。ある日、私はそんな仕事が嫌になって、一日さぼってしまう。罰則として、同じ班の人間全員の配給食が抜かれることとなり、私はますます肩身が狭くなる。しかしこれ以上休むともっと罰則が厳しくなるので、休むことができない。そんな夢を見た。久々の悪夢らしい夢だった。「苦役列車」なんか読むんじゃないかった。

酒の味は好きではない。酔うために私は飲んでいた。その酔うために飲んでいた酒を、私は欲していた。酔いたかったのである。酔えるなら酒でなくても構わない。錠剤とかでもいい。世の中には粉末状の酒がある、そんな話を聞いたことがある。それで酔えれば酒を飲むよりきつと楽だろう。台所の冷蔵庫を開く。酒はもちろん入っていない。

面接の結果がもう出た。私が病院から帰ると、母が、面接した先から電話が来たことを教えてくれた。結果は、「今回は縁がなかったということ」とのことらしい。縁の問題で採用不採用が決まるのであれば、私は手当たり次第あちこち受けまくっていれば縁のある会社が見つかって再び働き始められるはずである。つまり私はきっと、狂っているから、という理由で不採用になったのだらう。列車は苦役方面へ向かっている気がする。

「面接、落ちちゃいましたね」と榎本なごみになぐさめられた。なぜか榎本なごみは昨日からずっと家にいる。帰る様子はない。何者なのかわからない相手がずっと家にいるのは不思議である。不可解である。「でも、大丈夫ですよ」いったい何に対して大丈夫と言っているのか、私には分からない。

晩餐になってもやはり榎本なごみは帰らない。「今日、病院はどうでした？」なんて世間話すら降ってくる。いつも通り、40分待たされて5分の診察で処方箋をもらって帰ってきた、と私は正直に答えた。「その医者、私より藪ですね」榎本なごみは医師だったのか。「いえ、そんな存在じゃありませんよ」じゃあ一体なんなんだと訊くと正体が明かされるかもしれないので訊かないでよい。謎の存在でいてくれた方が今のところは気が楽だ。晩餐のメニューは味のないキノコが入ったチキンライスだった。お子様ランチと違って旗は立てられていなかった。

2011年11月17日（前書き）

この作品はフィクションです。

2011年11月17日

11月17日（木）

自分がいなくなっても世の中は何も変わらない、そんな人間は世の中に五十人や百人や、そんな程度ではない筈である。そんな人々をもっと役立てられるように世の中がなればいいと思う。具体的には、すべての人間が他人と関わらなくてもこなせる程度の仕事を用意する。その内容までは、まだ思いつかない。だからこうして日記に書いているのである。日記とはほかに書いても無駄なものを記すものだ。

ふれあいサロンへ連れて行かれた。そういえば2週間ぶりである。この前仕事を始めたことを自慢していた男は今週もおらず、代わりに水をがぶ飲みしている男がいた。理由は分からなかった。男には誰も話しかけなかった。やがて男は、水を飲み終えると、酔ったような足取りでふれあいサロンを出て行った。男が飲んでいたのは2リットル入りペットボトルのミネラルウォーターだった。ペットボトルの表記が正しいのであれば、その筈である。酒ではないはずだ。酒臭くはなかったし。

帰ると相変わらず榎本なごみがいた。榎本なごみが家にいる限り、編集者は現れないのではないか。そんな気がする。キャパが決まっているんじゃないのか。そんな気がする。一度に登場する架空の間は一人までと決まっているのではないか。そういう決まりがあるような気がする。

晩餐に出されたのは野菜とキノコが入ったラーメンだった。もちろんコスト削減のため袋ラーメンである。「タンメンですね」と榎本なごみは言っていた。おそらく違うと思われる。私はそれを黙っ

て食べ、気絶した。自室で目を覚ますと、隣に榎本なごみが寝ていた。私に付きまとうことで、榎本なごみに何のメリットがあるのか。尋ねてみたかったが、榎本なごみは眠っている。

2011年11月18日（前書き）

この作品は作者の日記とは違います。創作です。

2011年11月18日

11月18日(金)

世界は区切られている。宇宙から見れば地球に国境なんかないんだ、なんてだれが言い出したのかは知らないが、国境線は存在し、県境も存在し、番地だって区切りで作られている。私が出歩ける範囲の番地は決められている。私が歩いて帰ってこれる範囲が、私が動ける区切りである。それ以上出ることは、私にはできない。金がないからだ。金がないから電車にも乗れないし、歩いて脱出するには宮崎県は面積が広すぎる。私が住んでいるのは宮崎の海岸線沿いの中心にある県庁所在地なのである。北へ出ようにも南へ出ようにも西へ出ようにも歩きでは一日や二日では済まない。船に乗るには電車に乗るより金がかかる。金もなければ免許もない私には、近所から脱出する手段がないのだ。

そう思うと宮崎が監獄であるような気すらしてくる。そうつぶやくと、「そんなことないですよ」と、相変わらず家から出て行こうとしない榎本なごみが言った。自分がその一言を期待していたから、榎本なごみはそう言ったのかもしれない。そう考えると自分が嫌になる。私は自分に都合のいい妄想を出すことしかできないのか。「家のほうが居心地がいいですよ」と榎本なごみは続ける。榎本なごみは悪魔なのかもしれない。もしこの世に悪魔が実在するとしたら、きっと美形だろう。そうでなければ人間を騙すことなどできない。

そして今日の晩餐。今日は家から出ることがなかったのであまり食欲はわかないが、朝も昼もいつものように食べなかったので食べなければならなかった。一日食事を抜くと、きっとそれが二日三日と習慣化してしまって私はきっと死に至る。それに晩餐は雑煮だった。流し込むように飲み込んでしまえば簡単に食べることができた。

餅と一緒に入っていたキノコもほぼ丸のみである。キノコの中の何か嫌な物質が頭に回って気絶しようとする、榎本なごみが私の隣に寝転んだのが分かった。気絶中の私に何かするんじゃないか、と思ったが、そう尋ねるより前に私は気絶してしまった。

2011年11月19日（前書き）

この作品はフィクションであり、作者の日記ではありません。

2011年11月19日

11月19日(土)

日が空いてしまったので、そろそろ文章を書くことを再開しなければならぬ。そう思ったので、さっそく再開することにした。逃亡中の男女は海岸線沿いを走っていた。あくどい男に騙されて金を奪われた拳闘襲われそうになったことにより、世の中は善人ばかりではないことを心の底から思い知った二人は、盗みを働いた。自分たちを襲った男のように、人を襲い、車を奪ったのである。二人は逃亡者として、車で海岸線沿いを走っていた。……というところまで書いた。そこから先は、あとで考えることにした。

「書くことに何か意味があるんですか」と、文章を書いていた私に榎本なごみは尋ねてきた。何かしている、という実感が欲しくて書いているだけである、と私は答えた。「じゃあ、その文章の感想を述べさせていただきますとですね」なにが「じゃあ」なのかは知らないが、意見は貴重なので聞いておくことにした。「あなたはいつでも文章が下手です」当たり前である。創作の文章など、作文で書いたきりなのだから。

晚餐の席でのことである。榎本なごみはいつものように自分は何も食わずに、私が食べているところをじっと見つめていた。ずっとこうなのだ。だからここ数日、なんとなく食べづらさを感じている。榎本なごみは食べなくて平気なのだろうか。「もう、私の正体に気付いているんでしょう」そう、私はもう既に榎本なごみの正体に気付いている。一応尋ねてみただけだ。一応。

2011年11月20日（前書き）

この作品はフィクションであり、
実在する人物・団体等とは一切
関係ありません。

2011年11月20日

11月20日(日)

いつも日記を書いているのは深夜である。健康にはよろしくない気がするが、一日のまとめとして書く日記は夜か深夜にしか書くことができず、夜はキノコのせいで気絶しているので、いつもこうして深夜に書くしかない。もちろん寂しい。榎本なごみは相変わらず私の部屋で寝ているので、寝ている人間の隣で書く日記は余計にさみしい。

時間は遡り、今日の昼間のことである。日記と違い、猿に見せるつもりの文章は火が出ているうちに書いている。日が出ているうちに家に閉じこもって一人(一匹?)にしか見せるつもりのない文章を書いていると、自分がとてつもなく不健康な人間であるような気がしてくる。精神衛生上、これはよろしくない。

それを考慮してくれたのか、榎本なごみは私が文章に集中しているすきにコンビニへ行つて発泡酒を買ってきた。誰も咎めなかったので、私はそれを飲んだ。久々に飲む酒の味は、ただひたすら苦くただひたすらに炭酸で、味の印象としては、薬品、と称するのが最も適していると思われた。榎本なごみは私に酒を渡すなどという墮落を促進させるようなことをして、いったい何が目的なのだろうか。

なので、晚餐の席にて、榎本なごみにいつまで家に居続けるつもりなのかと訊いてみた。「ずっとです」私は驚愕して、家族にそれでもいいのかと尋ねてみた。母は「構わないわ」父は「いいんじゃないか」妹は「別にいいけど」と答えた。そこで旗と気が付いた。どうして家族には榎本なごみの姿が見えているのか。それに発泡酒を買って来られたということは、コンビニの店員にもその存在が認識

できているはずである。それなのに、どうして食事を与えなくても平気な顔をしていて、私が勝手に榎本なごみの正体について考えてみたときに「知ってるくせに」なんて言ったのだろう。

2011年11月21日（前書き）

この作品はフィクションです。

2011年11月21日

11月21日(月)

このところ毎日榎本なごみが家にいる。それもずっとである。こんなものが見えてしまう私は、もはや入院するべきと判断されるほど狂っているのではないか。そう考えた私は一人で出かけた。いつもは毎週木曜日に親の車で送られている保健センターまで歩いて行ったのである。保健センターに息を切らせながらたどり着くと、幸いなことに私を担当している職員がいた。そして私はその職員に相談した。ずっと見てはいけない筈のものが見えている、と。「最近、お酒飲んだ？」と尋ねられた。昨日呑んだ、と答えた。「じゃあアルコールを控えなさい」と諭された。発泡酒一杯で人は幻覚に見えるようににはならないだろう、と思っただ、その日の対応はそれで終わりだった。

その足でハローワークへ向かうという手もあった。しかし行く気が起こらず、そのまま同じ道のりを息が切れるほど歩いて家に帰った。そして文章の続きを書こうとしたが、読みかけの本があつたことに気が付いた。「このキノコ人間が。」というタイトルの本である。日記形式になっている割に読みづらく、ゆっくりとしか読み進められない妙な本である。読み進めてみた。まるで私の生活のようなものが描かれていた。この本にオチは存在するのだろうか。なかなか本文は終わる気配を見せない。結局、今日も途中までしか読めなかった。

晚餐の席で、ようやく気が付いた。今日は榎本なごみの姿を見ていない。ようやく帰ったか、と思つて晚餐を終えた部屋に戻るとそこには榎本なごみの姿があつた。「どうして今になって私が姿を現したのか、説明しないとわかりませんか？」榎本なごみは言った。

「それとも、永久に知らないままで、永久にこの暮らしを続けたいですか？」榎本なごみは続ける。「そんなことが、可能だと思えますか？」可能ではない。親だっぴいずれ死ぬ。そうなれば、きっと私は、「福祉でもらえる額では、生活するのにちよつと厳しいですよね」私はいつものように気絶しようとした。「でも、いいんです」と言つただけに、私は存在しています」その試みは成功し、だんだん意識は薄れてきた。

2011年11月22日（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物・団体等とは関係ありません。あ、100日目だ。

2011年11月22日

11月22日（火）

珍しく夢を見ない夜だった。深夜から昼にかけて、私が寝ていた時間帯を「夜」と称するのであれば、であるが。そんな言葉の定義を考えてしまうほど私の生活には変化がなく、やることなく……いや、「やること」は自分で探さなければならぬものだ。そして少し探せば見つかるものだ。

なので私は文章の続きの展開を考えることにした。これが「やること」なのか、という疑問は頭に残っている。しかし今私が「やること」と言えば、これか職探しくらいしかない。そして今日はハロウィークの狂人窓口の私の担当者の中年女性が出勤しない日である。なので文章を書くことにしたのだ。家の中では相変わらず榎本なごみがうつっている。榎本なごみには「やること」はないのだろうか。尋ねてみたかったが、それより文章を書くことを優先させた。続きの展開を考えてみた。逃亡中の男か女の死でしか話の動く気配がない。そんな発想しか浮かばない自分の脳味噌が嫌になる。もつと柔軟な脳みその持ち主と交換できないものだろうか。きっとできないだろう。柔軟な脳みその持ち主は柔軟な考え方を持っているから、私なんかの脳みそと交換しても損しかしないことくらい分かっているだろうから。それでも一応、男が女に公園の水道で貯めておいた水をほとんど飲ませて死にかける、というところまで、文章を書きすすめた。男を死なせるべきか。悩みどころだ。

ついでに親が死んだときのことも考えてみた。今、親が死んだら。遺産はいくら残るだろう。遺産でいつまで暮らせるだろう。当たり前だが私の親は自分が死んだとき子供である私たちに遺産がいくら渡ることになるのか明かしていない。でもきつと非常に面倒くさい

手続きを取ることになるだろう。親には長生きしてほしい。いや、狂った子供を抱えているのだから、いつそ死んだ方が楽、とか考えているかもしれない。……そんなわけがない。もしそうだとしたら、親は自殺しているだろう。しかし親は生きていて、私に一日一食を与え続けている。親は私をどうしたいのだろう。

画期的な視界の改革法を編み出した。榎本なごみが目の前にいるときに目を閉じて深呼吸し、ここには誰もいない、と信じ込んでから目を開けると、榎本なごみの姿が消えるのだ。逆に、目を閉じて榎本なごみはここにいて、と思って目を開けると榎本なごみはここにいる。私の目は新たなステージへと登ったのだ。狂いの新たなステージへ。「どうしたんですか」と榎本なごみに言われて、私は目を覚ました。「寝てるんだか寝てないんだか分からない瞼の動きをしていたので。起こしてしまっただけでしたらごめんなさい」気が付けば私は晚餐を終えて自室で気絶していた。今日見たものや考えたことは、どこまでが夢だったのだろう。これは狂いが一段階進んだ証拠かもしれない。

2011年11月23日（前書き）

この作品は作者の日記ではありません。

2011年11月23日

11月23日（水）

ところで私はこんな日記帳に生き恥とも呼べる生きざまをさらして、いったい何がやりたいのだろう。自分が書いている日記の存在意義について疑問に思えてきた。が、すぐに思い直した。意義なんてない。暇だからやっているだけなのだ。狂いが治ってまた仕事を始めれば、私は日記を書かなくなるだろう。

祝日である。そんなめでたい日に、私は榎本なごみに襲われた。気が付けば、榎本なごみは私の首を絞めていた。絞めながら榎本なごみは言った。「今、死にたいって思ったでしょう。思いましたね？」自分がどうして抵抗しないのか、自分でも不思議だった。きつと死にたかったからだろうな、と客観的に予想することは、今ならできるが、その時の自分の心の中が分からない。

ふと気が付けば、私は昼寝をしていた。隣に榎本なごみが寝ていた。私が目覚めると同時に榎本なごみも目を覚まし、「ご家族はどこかへ出かけましたよ」と教えてくれた。私は榎本なごみに殺されかけていたはずではなかったか。「そう思っただら、殺されかけていたんじゃないですか？」どうして急に態度が投げやりになるのか。

帰ってきた母により晚餐として出されたのは、出かけた先で買ってきたというたこ焼きだった。もちろんキノコも添えられていた。私は黙ってキノコを食べようとしたが、食卓の正面には榎本なごみが座っていた。榎本なごみは今日も何も食べる様子を見せなかった。ので、私はためにキノコを差し出してみた。「いいんですか？じゃあ、いただきます」榎本なごみは私の手からキノコを食べた。

そしてキノコをすべて榎本なごみに食べさせ、たこ焼きは自分で食べ終え、自室に戻ると私は狂って気絶した。なぜか。

2011年11月24日（前書き）

この作品は誰かの日記ではありませんが、作者の日記ではありません。
ん。

2011年11月24日

11月24日（木）

ふれあいサロンへ向かう車に榎本なごみが同乗していた。どうも最近現実には榎本なごみがなじみすぎている気がする。それとも何か、私がそれを望んでいるのか。

保健センター内のふれあいサロンへ到着すると、そこには誰も来ていなかった。いつもは参加者の狂った人々と共に保健センターの職員が数人は待機しているはずなのだが、今日はなぜか職員の姿すら見えない。「将棋盤がありますよ」と榎本なごみはサロンの奥の棚から将棋盤と駒のセットを持ち出してきた。それから定石を知らない二人で将棋をやった。

午後になってもふれあいサロンには誰も現れなかった。先々々週あたりには顔を出していた編集者はどうした。職員はどうした。いつも働いていることを自慢げに話していた男は、水ばかり大量に飲んでいた男は、その他大勢の狂人たちはどこへ消えた。でも榎本なごみはそこにいた。そこで一丁、やってみた。目を閉じて、そこに榎本なごみはいない、と思い込む。そして目を開く。すると榎本なごみは消え、代わりに職員と狂人たちが表れた。彼らの視線は私に一点集中していた。職員の一人が私に言った。「どうしたんですか今日は、まるで一人芝居のようなことを延々と続けたりして」私は言葉少なに榎本なごみと将棋をやっていただけである。

そのまま夜まで、私は榎本なごみを再出現させなかった。深夜、この日記を書いていると、母がどこかへ出かけていく音がした。なぜ母が出かけて行ったのか分かったのかと言えば、車の発信音が聞こえたので玄関へ向かってみると、母の靴がなくなっていたからで

ある。私は目を閉じ、榎本なごみは私の背後に立っている、と思いい込み、瞼を開けた。榎本なごみは「大丈夫ですよ、お母様があなたを捨てるわけがありません」と言った。それは私にとって都合のいい言葉だった。

2011年11月25日（前書き）

この作品は作者の日記ではありません。フィクションです。

2011年11月25日

11月25日（金）

またしても夢の話である。母と編集者の密会の夢を見た。母とあの編集者、私の腕時計を最初に破壊した編集者が浮気をしている、という夢を見て目が覚めた。昨日の深夜、母が出かけたのも、もしかしたら。そんなことを思っていると榎本なごみが大丈夫大丈夫うるさいので姿が消えるよう念じて目を閉じ、そのまま横になった。

すると違う夢を見た。作家になった私が仕事をしている夢だった。それも、書店巡りの営業、という、やったこともないのに自分に向かない仕事を涙目になりながらこなしている、という夢だった。作家の仕事に書店巡りの営業、なるものがあることを、私は先日インターネットで知ったばかりだった。だからそんな夢を見たのだろう。夢から覚めた私は、小説、という言葉ばかりを思い出し、我慢できなくなって本に手を伸ばした。「このキノコ人間が。」の続きを読み始めた。しかし、一向に本は終わる気配を見せない。そこで重力に任せてパラパラと一気にページを進めてみる。そして気が付いた。この本にはページ数がない。そしていつまでもパラパラとめくられ続けている。私は怖くなったので紐を挟むことも忘れて本を閉じた。

晚餐に餃子が出された。恐らく冷凍のものだろうと推測されるものだった。それからゆでたキノコが添えられていた。どうしてわざわざ調理してまでキノコを食べさせたがるのだろうか。私は一昨日と同じくキノコを再出現させた榎本なごみに食べさせてみた。「私が食べてもあなたが食べても同じことですよ？」榎本なごみは言った。私はその意味を理解はしていたが、それでも、自分の口にキノコを持っていくのには抵抗があったのだ。

2011年11月26日（前書き）

この作品はフィクションであり、
実在の人物・団体等とは一切の
関係ありません。

2011年11月26日

11月26日(土)

図書館へ本を返しに行った。使用手段は自転車である。自転車は相変わらず好きにはなれないが、少し前よりは使用するのが楽になった気がする。酒を飲まなくなったおかげだろうか。まだ酒がどうか言っているのか、私は。そんなに酒が飲みたいのだろうか。とにかく私は自転車で図書館へ本を返却しに行った。返却した本は「このキノコ人間が。」という本である。どこまでめくっても終わりがなかったのが怖くなって、返却することに決めたのである。しかし、受付へ持っていくと、職員に「こんな本を貸し出した記録は残っていません」と言われてしまった。その本を調べてみると、なぜか図書館の刻印が消えていた。もしかしたら何らかの偶然でこの本を手に入れてしまっており、それと借りた「このキノコ人間が。」を取り間違えて持ってきてしまったのだろうか、と思ったが、「貸し出した記録ありませんね」とのことだった。仕方がないので持って帰った。ついでに他にいくつかの本を借りた。

いい加減榎本なごみについて決着をつけなければならない、と妙な使命感に支配された。榎本なごみは居た方がいいのか、居ないほうがいいのか。決めなければならない。私は目を閉じ、そう考えてから目を開いた。すると榎本なごみは目の前に座っていた。私の進む先は狂いの道に通じていることがよくわかった。もうどうとでもなれ。

晚餐は流水麺と思われるざるそばが出された。もう寒いのに、である。めんつゆの中にキノコが沈殿していた。私はそれをつまみ上げ、口に入れた。私はもう決めたのだ。狂いの道を進むことを。決めたらきつと進行は早まるだろう。きつと一週間以内に、私は日記

が書けなくなるほど狂うだろう。

2011年11月27日（前書き）

この作品はフィクションであり、登場する人物はすべて架空のも
のです。

2011年11月27日

11月27日(日)

パソコンを起動させるたびに恐怖に苛まれる。今回はまともに動かないんじゃないか、という恐怖である。その恐怖から目を背けるため、気を紛らわせるために私は酒を飲んでいた。しかしその酒が封じられてしまっている(冷蔵庫からなくなっている)現在、私はいちいち恐怖しながらパソコンを起動しなければならない。面倒である。しかしパソコンを開かずには退屈を紛らわせる方法を、私は読書くらいしか知らない。読書だっけすぐ飽きる。インターネットと読書を交互にやることによって、私は何とか余り過ぎている時間をやり過ごしている。きっとこれは無駄な時間の過ごし方である。こんなことするくらいなら働いた方がいい。そして稼いだ金で酒を買って気を紛らわせながらパソコンを起動したほうがいい。

榎本なごみが「そろそろ書いたらどうですか?」と急かすので、文章の続きを書くことにした。死による展開は陳腐である。それに苦し紛れ感が出てしまう。そう考えたので、逃走中の男女の行方を死を使わない方向で考えてみることにした。そのためには、新たな出会いが必要となった。そのくらいしか私の頭からは生まれなかったのである。逃走中の男女は一匹の猿と出会った。猿は喋った。男女は猿とコミュニケーションを取るという世にも珍しい体験をすることにした。という展開を書いた。また自分の実体験をネタにしてみた。少しは大嘘をつかなければ、すぐにネタは枯渇してしまう。何とかしてネタをひねり出さなければならない。

文章を書いたらパソコンを閉じて、昨日結局返却できずに自分のものになってしまった「このキノコ人間が。」の続きを読んてみた。どうにもリアリティの薄い日記調の文章が延々と続いている。終わ

りのない本を読むのは苦痛なので、この本はしばらく放っておくことにした。思い切って捨てられないのが私という人間である。これは狂っているとかいないとかは関係ない。

妹が珍しく、しかも深刻な様子で私に話しかけていた。母が知らない男とデートしているのを目撃してしまった、というのである。何気なく出かけていたら、母と知らない男が腕を組んで歩いているのを見た、という。「腕組んで歩くんなんて付き合ってる以外考えられない」のだそうだ。妹の想像力は、私に、ああ、この人間は私の家族なのだなあ、と思わせた。

晚餐の席で妹が目撃したことを母に伝え、本当にその男と付き合いっているのか、と尋ねてみた。「ああ、お父さんには黙っていてね」と母は言った。「離婚の手続きって面倒なのよ」父にばれると話が離婚方面に富んでしまうらしい。父は嫉妬深い性格をしていたのか、と、こんなに長い間家族をやっていて初めて知ることになった。

2011年11月28日（前書き）

この作品はフィクションであるため、登場する人物・団体等は架空なのです。

2011年11月28日

11月28日(月)

久々に吐きそうである。それもこれも酒が原因である。どうやって酒を入手したのかは、書きたくない。とても卑怯な手段を使ったからだ。具体的な方法はとても書くのに勇気が必要なほど卑怯である。とても親不孝なことをした。しかし親は私を大事にしてくれてはいないので、別に孝行する必要はないのではないのか。単なる言い訳である。

起きたら家に人の気配がなかったのがそもその原因である。どうも人がいない気がしたので、母の部屋を覗いてみると、いつもはそこで仕事をしている母の姿を見つけることができなかった。家に一人、の状況だった。そこで私は机を漁った。すると母の財布を見つけた。きつと出かけているはずなのに、母は財布を二つ持っているらしい。その証拠に見つけた方の財布には少額しか入っていないかった。しかし三千円も入っていればこれをコンビニへ持って行って酒を入手することくらいは可能である。迷った挙句、私は榎本なごみを出現させた。「やめましょうよ、犯罪ですよ」と言わせた。そして私は結局コンビニへ向かった。榎本なごみの健闘むなしく、私は愚行に走ってしまったのであった。

母は夕方ごろ帰ってきた。何があって家を留守にしていたのか尋ねてみると、「デートよ、お父さんには黙っていてね」と帰ってきた。母は浮気にお熱のようで、おかげで罪悪感も吹き飛んだ。親の財布から148円(ビール1本分)勝手に使ったくらいがなんだ。このくらい浮気を黙ってやる代金としてはお釣りをもらってもいいくらいだ。

母が返ってくる夕方までの時間は、酔いながら文章のネタ出しをやってみた。しかし酔った頭ではまともな考えが浮かばず、結局インターネットを巡回しただけで終わった。

晩餐の席、今日は父が仕事から早く帰ってきていたので、父が同席していた。その父に、もし母が浮気をしていたらどうする、と尋ねてみた。148円ぶんの仕事を不意にしかねない蛮行である。父は、「はは、ははは」と笑った。それだけだった。

2011年11月29日（前書き）

この作品はフィクションであり、登場する人物・団体等は架空のものです。

2011年11月29日

11月29日（火）

榎本なごみに自由意思は存在しているらしいことを、今日は思い知ることができた。いつものように昼前に起きて水を求めて台所まで降りると、父と母が深刻そうな顔をして食卓で向かい合っているのを見つけた。父とは母は別れるの別れないのと深刻な話題を話していた。それを聞いていると背後から榎本なごみが現れた。「すいません、どうしても私は黙っていることができませんでした」と榎本なごみは告白した。どうやら榎本なごみが母の浮気を父にばらしてしまっただけらしい。「ええ。残念ながら、私は操り人形とはちよつと違う存在ですから」意外だった。「意外ですいません」榎本なごみの正体が、再び謎に包まれた。

両親の話し合いは難航し、火が陰ってきても話がまとまる様子を見せなかった。父は母を責め立て、ハハハ堂々たる言い訳でそれに立ち向かった。やがて妹が学校から帰ってきた。榎本なごみが母の浮気を父にばらしてしまっただけらしいことを妹に伝えると、「えつちやん、何やってんの？」と妹は榎本なごみを責めた。榎本なごみは妹に平謝りだった。ますます榎本なごみの正体が不明になっていく。

そんなわけで家庭が混乱していたので、晚餐は出なかった。空腹のまま深夜を迎えて、これを書いている。今日はキノコすら食べていない。よって気絶せずに夜を超えてこの深夜を迎えている。榎本なごみは風呂に入っている。妹と知り合いのあの少女は一体何者なのか、今のところ不明である。榎本なごみが上がったら、私も風呂に入るつもりでいる。

2011年11月30日(前書き)

この作品はフィクションです。作者の日記ではありません。

2011年11月30日

11月30日（水）

榎本なごみという存在について少し深く考えてみたかったが、そんなことを考える間もなく、起きると診察時間が迫っていたので私は病院へ行かなければならなかった。いつものように40分待つて5分の診察を受けるために。病院の診察室で、体がアルコールを欲してたまらない、これはもしかしたらアルコール依存症の前触れなのかもしれない、と相談してみた。一笑で処理された。「飲んでないのにアルコール依存になるわけがないでしょう、はは」とのことだった。

帰ってから文章の続きを書いた。新たな出会いの続きである。猿と逃亡中の男女は仲良くなり、猿の朗読する即興の散文詩に二人は感動した。そしてこれからのみの振り方について、二人は車の中で並んで寝転びながら話し合った。というところまで書いた。二人がどういう結論を下したのか、そこはまだ書いていない。結論は後回し、である。私は結論を出すことをいつも躊躇してしまう。

榎本なごみの目の前で目を閉じ、姿が消えるよう念じてから再び目を開ける。すると榎本なごみは姿を消している。そうしてから、意を決して妹に話しかけてみた。昨日は緊急時だったので咄嗟に声をかけることができたのだが、今日のような通常時は意を決さなければ話しかけることができない。私は妹が怖いのである。「クラスメイトだけど？」妹は、榎本なごみについて総証言した。その妹の目の前で、私は目を閉じ、念じて目を開け、榎本なごみを出現させた。そして再び同じことを訪ねてみた。「最近、家に来てみたいけど？」榎本なごみという存在は、私の妄想ではなかったのか。それとも妹もろとも私の存在だったりするのではないだろうか。な

にせ私は狂っているからな。自分に妹がいるなどといった妄想にずいぶん前から取り付かれているなどという可能性も捨てきれない。

晩餐の席で、私に妹が本当に存在するのか、母に訪ねてみた。母は、確かに妹は存在する、と証言した上で、私に訪ねてきた。「お父さんと私、どっちについてくる？」離婚の話し合いは順調に進んでいるらしかった。

2011年12月1日（前書き）

この作品は架空のものであり、作者の日記とは性質を異なるものです。

2011年12月1日

12月1日（木）

書店で立ち読みをする、という一種異様なまでに地味な夢を見たあと、目を覚ますと、珍しく朝だった。そこで、榎本なごみを出現させた。しばらくすると妹の「行ってきます」が聞こえてきた。学校へはいかないのか、と榎本なごみに尋ねてみると、「あなたを置いて出かけることなんてできません」と意地を張った。

パソコンにインストールされているメディアプレイヤーの自動更新と同時に、新しいIMEの導入を勧められた。今使っているIMEはいつまた半角カタカナの強制変換が起こるか分からないので、試しに導入してみることにした。すると少し使い勝手が違った。まあ、そのうち慣れるだろう。そのままインターネットで時間を潰していると、妹と一緒に榎本なごみが帰宅してきた。いつの間にか榎本なごみは私の前から姿を消し、登校していたようである。

晚餐の席で、榎本なごみは母の料理を手伝ったといった。ついでに報告しておくと、今日は榎本なごみの座っている前に食事が並んでいた。私の食事は唐揚げにキノコ混じりのあんがかかったものである。「私、今日、食事の準備、手伝ったんですよ」と榎本なごみは得意げに行った。私の皿の料理も手伝った、ということか。「もちろん」榎本なごみも私にキノコを食べさせようとしている、ということか。また状況が変わってしまった。恐らく新しいIMEを導入したせいだろう。パソコンの環境を変えると私の周囲の環境まで変化する。原理は不明だし、きつと調べてもわからないだろう。世の中とはそういうもので構成されている。ところで、離婚の話は進んだのか、と母に尋ねてみた。「もう少し、結論を先延ばしすることになった」と母入った。私の結論を先延ばしにしがちな性質は、

母譲りのものらしい。

2011年12月2日（前書き）

この作品は作者の日記ではありません。

2011年12月2日

12月2日（金）

昨日の晩は、正確に言えば一昨日の晩は書店で雑誌のテレビ欄を立ち読みしているという地味すぎる夢だった。しかしそういう夢を見るということは、私はテレビに飢えているのだろうか。そう考えた私は、朝からテレビを見てみることにした。朝といえばニュース番組である。どうでもいいニュースとどうでもいいニュースの合間に、動物園からサルが逃げたというニュースを5回連続でやっていった。全国5箇所で計5匹のサルが逃げた、ということになる。1つのニュースにまとめればいいだろう、と思った。それとも1つの怪現象を5つに分割しなければならぬほどネタがないのだろうか。そんな筈はないと思うのだが。

今日は榎本なごみが家から登校していった。私が登校するよう命じたのである。「そんなことより、あなたが心配なんです」と榎本なごみはぐずったが、登校させなければきつと近所さんに不審がられる、と伝えると、渋々ながら学校に向かっていった。妹と同時に。妹と榎本なごみは顔見知り、ということにいつの間にかなっていた。私がいけない間、二人はどんな会話を交わすのだろうか。分かるわけがない。だって他人のことだし。

久しぶりに一人になった私は、文章の続きを書いた。猿に宛てるつもりで書いているのだが、もはや目的は文章内の物語を完結させること、である。それが終わってから送信するかしないか考えることにする。そして文章の内容だが、猿の散文詩に感動した男女が出した結論は、そろそろ追ってくる男に会って懺悔しよう、というものである、ということにした。逃亡劇は終わってしまうのか、と思わせる展開である。読者はどこにもいないが。しかし、私はまだ逃

亡劇を終わらせるつもりはない。男に捕まる直前で再び心変わりさせ、逃亡を続けさせるつもりである。しかしいつかは終わらせなければならぬ。物語は終がないと成立しないものなのである。

新たなIME導入のせいで環境が変わってしまったことを痛感した。今日になって、やっと気がついたのだ。今週はふれあいサロンに連れて行かれなかった。その代わり、今日は家にいた母に命じられた。「歩こう会にはいかないの？」と。そして家を追い出された私は、どこへ向かえばいいのかわからなかった。歩こう会とはなにか。どこに存在するものなのか。仕方がないのでしばらく外をふらふらと歩いてから家に帰った。

晚餐の席で、両親から発表があった。とりあえず来週から別居することになった、とのことだった。母は近所のマンションに引っ越し、父はこの家に残るらしい。私は来週までに結論を出すことを迫られた。家に残るか、マンションに映るか、である。

2011年12月3日（前書き）

この作品はフィクションです。実在する人物・団体・場所等には一切関係ありません。

2011年12月3日

12月3日(土)

今日は文化の日である。違う。それは先月の3日である。こんな出だししか思い浮かばない私の脳は壊死しているのかもしれない。とにかく私は一日かけて引越しの準備を進めた。とはいえ簡単なものだった。なにせ部屋のは編集者にほとんど破壊されてしまっているのだ、残っているものといえはいくらかの着替えとノートパソコンくらいしかない。ダンボール一箱に全ては収まった。

私はこの家に残るかマンションに移るのか、父を選ぶのか母を選ぶのか選択を迫られ、マンションに引っ越すことを選択した。結論を出すのに時間がかかるだろう、と昨日書いておきながら今日になると結論が出ていた。こんなことを長々と考えていても気分が沈降するだけだということに気がついたのだ。狂っているくせに今日の私は賢いな、などと自画自賛しながら、私はダンボールに荷物を詰め終え、それを部屋でデスクトップパソコンを解体していた母に告げた。「そう。ついてくるのね」と母は言った。きつと父を選んでも父は「そうか。残るのか」と言っただろう。私が付いてくることによつて親にもたらされる利益は皆無である。きつと選ばれないことを期待されていたに違いない。

「環境が変わるのは、いいことですよ」と今日も家に居座っていた榎本なごみ入った。榎本なごみが通っている高校は土曜は休みらしい。最近の高校で土曜が休みなのは珍しいと思うのだが、きつとそれ相応の偏差値を誇る高校なのだろう。どんな子供でも受け入れますよ、という、門戸の広い高校。それがいいことなのか悪いことなのかは、狂っている私には判断しかねる。

晩餐の席に、今日は家族が一堂に会していた。「どうして母親について行く気になったんだ」と父は私に、母の名前を用いずに尋ねた。「キノコを食わされるんだぞ」それもそうだな、と思った。しかし、父も母も、私が付いてくることを望んでいないだろう。ならばどちらを選ぼうと、私にとっては同じことだ。どちらにしろ邪険に扱われるだけなのだから。と言ったら父は私を殴ってきた。「子供を思わない親がいるか！」じゃあ今の扱いは一体なんなんだ、と問いたかったがさらに殴られそうだったのでやめておくことにした。

2011年12月4日（前書き）

この作品は作者の日記ではありません。

2011年12月4日

12月4日（日）

一日中引越しをしていた。今日からマンション暮らしである。新居には妹も付いてくることになっていた。私は今日まで知らなかった。母はもちろん承知していた。ということは、父は一軒家に一人で残されることになるのか。それは寂しい、などとうっすら考えながらダンボール一箱分の荷物を解いた。パソコンを電源に接続して着替えを畳んだまま部屋の隅に置くだけの簡単な作業だった。あまりにも簡単に終わったので他の部屋の手伝いを命じられた。ついでに自分の分の布団も母から支給された。部屋のすべての元が破壊された前の家ではもちろんベッドも破壊されており、私は床に掛け布団を敷き、その上に寝ていた。寒かったら包まるのである。だから布団の上に寝るのは久々のことだった。私は自室に久々に布団を敷いたのだ。

自室。そう、私には個人部屋が与えられていた。もちろん妹も個人部屋である。母も当然個人部屋を持っている。このマンションは部屋数が多かった。母など個人部屋の他に寝室まで所有しているのである。その上で台所兼リビングも存在している。母は子供が二人とも付いてこなかったらこのマンションに一人で住むつもりだったのか。さぞ家賃は高かろう、そう思っ母にこの部屋の家賃を訪ねてみた。「八万円よ」異様な金額だった。安すぎる。幽霊でも出るのだろうか。

「私が幽霊みたいなものじゃないですか」と新居に早速やって来た榎本なごみは言った。しかしI M Eの変更によって私を取り巻く環境は変更されており（原理は不明のまま）、榎本なごみは実在の人物になったのではなかったのか。「私はずっと実在していますよ？

あなたが認識している限り、私は実在しているんです」と榎本なごみは言った。

母の荷解きは夜になってようやく終わり、それから新居での初めての晚餐を取った。晚餐の席で、私は少し傲慢なことを頼んでみた。ネット回線を私の部屋に引いて欲しい、と働いていないくせに頼んでみたのである。すると母は既に新しいプロバイダと契約しており、明日には回線工事が行われる、と私に説明した。なぜか母はパソコン関係にだけは私に甘いのである。それから、新居になっても晚餐には赤くて味のないキノコが含まれていた。このキノコは一体どこから仕入れているのだろう。スーパーにこんなに赤いキノコが売られているとは思えない。ベニテングダケにしか見えないからだ。

2011年12月5日（前書き）

この作品は作者の日記とは違います。

2011年12月5日

12月5日（月）

朝から起きていなければならなかった。こんなこと二日連続である。昼前に起きるような生活を続けていた身にはつらいものがあるが、そこは仕方がないだろう。なにせ回線工事人が来るのだ。起きずにいるわけにはいくまい。インターネットは重要である。

回線工事人は予定していた時刻通りにやってきて、私の部屋になぜかあった電話線にモデムを設置し、帰っていった。それから昨日母に渡されたインターネット接続マニュアルとインターネット接続ディスクを駆使し、2時間ほどかかってインターネットに接続することに成功した。私はパソコンの扱いが上手いわけではないので、この程度の時間はかかるのである。インターネット内の話題は、一日空けたただけなのに大きく変わっているようだった。しかし違和感に戸惑うよりも、インターネットに無事接続できたことの喜びの方が大きかった。

インターネットでしばらくいつも見ているサイトを巡回しているうちに、歩こう会のことを思い出した。早速「歩こう会」と検索してみると、近所にそのような団体が存在していることがわかった。地域活動支援団体、と銘打っていることもわかった。今日ものその会は相談室と談話室を完備して開かれているらしい。もう午後3時だったが、私はそこへ向かうことにした。近かったし。

到着してみると、そこはいかにもボランティアがやっていそうな感じの垢抜けない雰囲気のカフェで、その奥から私の担当者を名乗る人物が現れ、私は相談室に連れて行かれた。「何か言いたいことがあるんじゃない？」と妙なフレンドリーさで私の担当者は言った。

どうして自分がここに受け入れられているのか、と訪ねてみた。「登録したじゃない」と担当者は身に覚えのないことを言った。それから私は帰った。母に訊いておきたいことができたからだ。

晩餐の席で早速訪ねてみた。すると母は自室に戻り、登録書を持ってきて私に見せた。その紙には確かに私の筆跡で私の住所氏名年齢この施設を利用したい理由などが書き込まれていた。「住所変わったから、今日行ったのなら、それを報告して欲しかったんだけど」と母は言った。今日はもう晩餐に出されたキノコを口に入れてしまっていたから、明日に回すしかなかった。

2011年12月6日（前書き）

この作品は作者の日記ではありません。

2011年12月6日

12月6日（火）

インターネット調べによると歩こう会は月曜から土曜までやっていて、日曜と水曜が休みらしい。つまり今日もやっているらしいとのことなので、今日は歩こう会へ住所変更の連絡とその他確かめたいことを確かめるために向かった。到着すると昨日と同じ私の担当者名乗る人物が現れた。しかし今日は相談室には連れて行かれなかった。他の人がほかの担当者と相談中なので使えない、のだそうだ。住所が一軒家からマンションに変わったことを伝えたと、書類を手渡されたので、私はそれにマンションの住所を書き入れた。それから昨日は入らなかった談話室なところに入ってみたのだが、そこでは数人のぱつとしない見た目の、おそらく私と同じく狂っていると思われる若者たちが知らないアニメの話題で盛り上がっており、入りづらかったので私はすぐに帰った。

「それは大変でしたね」帰ってくるとリビングで榎本なごみが煎餅を食べており、どこへ行っていたのか尋ねられたので答えるこんなことを言われた。「本当に登録してよかったんでしょうか？」私は登録した覚えはない。「そうですか。でも、世界って自分の知らないところで大半が動いているものですからね」それでも少なくとも自分が触れる範囲くらいは自分で把握しておきたいものである。

晚餐の席で榎本なごみが「ちょっと帰っていいですか」と私に尋ねた。私にそれを止める権利などあるものか。榎本なごみは部屋から出ていった。晚餐が終わってキノコのせいで倒れて深夜に起きてこの日記を書こうとすると、榎本なごみが私の布団の隣に自分のものらしい布団を敷いて寝ていた。どうやら自分の布団を取りに一旦帰ったらしい。帰った、のか。今の榎本なごみには自宅が存在する

のか。だとするなら、どうして私なんかにかまつのだろうか。

2011年12月7日（前書き）

この作品は作者の日記ではなく、
実在する人物・団体等とは一切
関係ありません。

2011年12月7日

12月7日（水）

引越してきて大分落ち着いてきたので、今日は文章の続きを書くことができた。また心変わりした、人を殺した男とそれを慕う女の二人組は、二人を追う男からの逃走劇を再開する。夜中にこっそり逃げ出したので、追う男は朝になってから二人が逃げ出したことに気がつき、雨の中泣き叫ぶ。どうして、どうしてなんだ、といった感じで。どうして妹はあんな男のことが好きなんだ、と追う男は嘆く。私にもその理由はわからない。これから考えて決定しなければ、分からない。

分からないと言えば榎本なごみが私を構う理由も謎である。何度尋ねてもはつきりした答えが返ってこない。今日も私の部屋にいた。楽しいのか、と尋ねてみると、「楽しいとか楽しくないとか、そういう感情でここにいるわけではありませんから」と言われた、やはり謎の人物である。謎が解けたら、きっと二度と会えなくなるのだろう。なんとなくそんな気がする。

晚餐の席に新しい男が同席していた。編集者である。それでいて母の愛人でもある。父がいないから堂々と食卓についているのである。「やあ、できれば君と一緒に飯なんか食いたくなかったよ」と編集者は嫌悪の目を私に向けた。そんなこと言われても、私は母の家族なのだから諦めてもらう他はない。母からは家族扱いされていないかもしれないが、最低限の情けはかけてもらっている。「また君の持ち物を壊してもいいかい?」「駄目です」私の代わりに榎本なごみが答えた。「……帰ってこいよ、なあ」編集者は榎本なごみに言った。そういえば、編集者の名前は。

2011年12月8日（前書き）

この作品は作者の日記ではありません。

2011年12月8日

12月8日(木)

今日もマンションに居座る榎本なごみに、編集者とは親子または兄妹だったりするのか、と尋ねてみた。なぜなら編集者の名前も榎本なごみだからだ。親子で同姓同名という例は珍しい。兄妹である場合も同じく珍しい。しかし全くありえない話ではない、と思う。法律がそれを許すのか、法律の専門家ではない私にはそれを調べる術がない。ヤフー知恵袋で尋ねてみるしかないが、それも人との交流の一種である、苦手である。だから本人に直接尋ねてみることにしたのだ。「……ええ、まあ。兄妹です」話は繋がった。「でも、だから何だ、って思いませんか？」榎本なごみは家出してここに来ているのか。「いけませんか？ 守ってあげますよ」駄目ともなんと私は言わない。

今日は歩こう会が開いている日ではあるが、小説のネタ、つまり追う男の妹である追われる女が追われる男を想う理由を考えなければならなかったので行かなかった。家でネットしたり寝転んだり本を読んだりしていたが駄目だったので、読み終えた本を返却しに外を歩き、帰ってきたが何も思い浮かんでいなかった。返却した本は色川武大「狂人日記」である。その本によれば、狂人には幻覚がつきものであるらしい。そういえば最近は幻覚らしい幻覚を見ていない。榎本なごみに、君は幻覚か、と確認を取ってみた。「はい」すると相手は肯定した。家出少女のくせに。

晩餐の席で、榎本なごみが編集者の悪口を言うようになった。曰くあいつは性格が悪い、一緒になって幸福になった人間は一人もない、身内にすら陰湿な嫌味を言うのだからもし結婚なんかしようもんならストレスがマッハになる、等々。「家族を悪く言っちゃ駄

目だと思っただけれど」と母は言った。母は榎本なごみと編集者が兄妹であることを承知していた。「あなただつて家族を捨てたじゃないですか」榎本なごみは言つと、母は黙つた。母は果たして大人なのだろうか。それとも大人になれなかったから会社勤めではない、翻訳家などという仕事に就いたのだろうか。

2011年12月9日（前書き）

この作品は作者の日記ではありません。

2011年12月9日

12月9日（金）

起きて本を読んで文章を書いてぼんやりと過ごし、夜になってキノコ入りの晚餐を食べて狂って気絶して深夜に目が覚めて日記を書く、という生活を曜日にかかわらず続けているため、このところ曜日の自覚が薄い。今日は金曜日だったが、土曜日だったような気がする。しかし昨日は木曜日だったので、金曜日で間違いないのだろう。

幻覚を最近見なかった理由について、それは最近現実が比較的忙しかったからではないだろうか、という仮説を立ててみた。突如立ち上がった両親の離婚という大ハプニング、そして直ちに行われた別居、それに伴う引越し。どれも人生の大きなイベントの一種である。しばらくして生活がさらに安定するようになると、もっと曜日の感覚が薄くなり、幻覚もまた見えるようになるのだろう。それを望んでいるわけではないのだが。むしろそうでない方が世の中的には喜ばしいに違いない。家でばーっとなんかしてないで外に出て働くべきだ、世の中的には。個人的にはどうなのか、それは私自身に尋ねてみなければ分からない。

榎本なごみがゲーム機を持って家に現れた。異様に耐用年数が高いことで話題のスーパーファミコンである。しばらく遊んでみたが二人揃ってなかなかコース通りに走ることができない。ヘボなりに互角の勝負が続いた。夕方まで二人で遊んでいたので、今日は文章を書く暇がなかった。同じような日々が続いている、みたいなことを日記に書いた奴はこのどいつだ。

「しあわせの書」というタイトルの小説を読んだ。題名からしても

つと重い話かと思つたら軽いミステリだった。この本の仕組みを面白いと評価する人もいるかもしれないが、私としては人物の描写が甘いように感じられた。幻覚が見えないでいると、この日記は単なる引きこもりの読書感想文になってしまう。面白くない。でも面白いからといって誰が読むんだ、面白いとして面白いことを誰にどうやって伝えるんだ。

晚餐に白い焼き魚が出た。名前がわからなかったので母に尋ねてみると、介党鱈を焼いたものであるとのことだった。そうかこれが鱈というものか、と味を下に記憶させるように味わった。そしてキノコ入りの味噌汁は味わえなかった。キノコから滲み出る無味のエキスが味噌の味すら消してしまっていたのだ。

2011年12月10日（前書き）

この作品はフィクションであり、登場する人物・団体・地名とは一切の関係がありません。

2011年12月10日

12月10日(土)

果たして面白いのか分からなくなったので、今まで書いた日記を榎本なごみに読ませてみた。「私が前に読んだ小説にちよつと似てますね」という感想が帰ってきた。私もそのくらいは承知している。自分の書いているものが、図書館に返却しに行ったらなぜか自分のものになってしまった小説「このキノコ人間が。」に似てしまっていることくらい。しかし、仕方がないのだ。私の日常が、その日記体で書かれている小説に似てしまっているのだ。もしかしたら「このキノコ人間が。」は予言の書なのかもしれない。

図書館へ行った。田舎の図書館は予算がないせいか、本棚に空白が多い。その代わり、無償で寄贈されるせいだろうか、郷土関連の本は嫌になるほど充実している。しかし私は郷土関連の本には手を出さない。宮崎のことを深く知ったところで何の得にもならなそうだったからだ。だから私は、人生に於いて何の役にも立たなそうな娯楽小説を数冊借りて帰った。

晚餐の席で肉豆腐が出された。二日連続して白いものが出たのである。しかし、編集者も毎日来ていいのではないだろうか。せつかく家庭から父という存在が消えたのだから。「編集者って仕事はね、昼から朝まで働くことが多いらしいのよ」と母は言った。母も難儀な職業の人間と恋に落ちたものである。

恋か。私にはそんなものに落ちる資格などない。それに、狂っているのだからきっと恋愛感情など理解できないだろう。

というところまで書くと、急にいつものように私の部屋で寝てい

た榎本なごみが起きだして言った。「狂っているからといって、決してその人は知能が低いわけじゃないんですよ」それだけ言っていると、榎本なごみは再び眠りに入った。なんだったんだ。今の唐突な励ましは。

2011年12月11日（前書き）

この作品はフィクションであり、作者の日記ではありません。

2011年12月11日

12月11日（日）

人が粘液に包まれて生まれて来る様をグロテスクと感じてしまうのは人間特有の感覚なのだろうか。それともそんなことを感じるのは私だけだろうか。子供が生まれて来る様を壁の向こうに隠すのは人間くらいなものである。人間以外の動物は、子供が生まれて来る様を堂々と他者に見せつける。正確に言い換えれば、他者に自分の子供が産まれるところを見られても決して取り乱したりはしない。人間だったら、きっと家族と医師以外の人間に自分の子供が生まれるところを見られたら恥のあまり発狂してしまうだろう。私は誰の母親でもないのでそんなことを予想する資格などないかもしれないが、なんとなくそういう気がしたので。子供を産んだ母親というのは狂っている。我が子狂いである。

日曜日に出歩くことは愚である。人の目は必ず私に集まるだろう。好奇の目を向けるのだ、狂った人間は珍しいから。だから私は一日家に閉じこもって、上に書いたようなことを考えていた。考え終わった私は、とても無駄な時間を過ごしたような気分になった。

だから文章の続きを書く事にした。ネタはまだ浮かんでいなかったが、いくら考えても思い浮かばなかったので手が動くのに任せることにしたのだ。逃亡者の女が逃亡者の男を盲目的に慕う理由、が思い浮かばなかったので書けなかった。だから適当にでっち上げることにした。女は精神的に未成熟なため、何かに依存していなければ生きていけない。そこに都合良く手を差し伸べてくれる殺人者で逃亡者の男は、依存するのにちょうどいい相手だったのだ、ということにした。すると今度は、逃亡者の男が都合良く女に手を差し伸べる理由を考えなければならなくなった。文章を書く事は考えるこ

とだらけだ。いや、考えずに文章が書けるほうがおかしいのか。

「私はあなたに依存しているのかもしれませんが」と、ふと榎本なごみがつぶやいた。「あなたが私に依存しているように」と榎本なごみは続けた。私はその発言になんの反論も返さなかった。少なくとも私が榎本なごみに依存していることは間違いなかったからだ。

晚餐に鮭が出された。ソテーにしてあつてキノコ入りの餡がかけられていた。餡はキノコから無味のエキスが滲み出したのか、なんの味もしなかった。それがかけられている鮭のソテーも味が極めて薄くなっていた。うまきはなかったが、食べるよりほかはないので食べた。一日一食の私は、その一食を抜くと死ぬ可能性があるのだ。

深夜、この日記を書いていると編集者がマンションにやって来た。ドア越しに玄関で発せられる声まで聞こえてくるのだ、この部屋は編集者は母との密会を始めた。扉の向こうで、恐らくリビングで、こそこそと二人で喋っていた。肉親が他人にいちやついている様子を耳で観察するのは、とても気持ちの良いことではなかった。だつたら止めればいいのに、とは思うのだが、耳をふさがない限り勝手に聞こえてくるのだ。耳をふさぐには日記を書くのをやめなければならぬ。なので私はこれから耳をふさいで横になることにする。

2011年12月12日（前書き）

この作品は作者の日記ではなく小説です。

2011年12月12日

12月12日(月)

起きて水を飲むと吐き気が襲ってきた。このところ空気が宮崎にしては冷え込んでいるせいで、身体の温度も下がり、冷たいものを内蔵が受け付けなくなっているらしい。私はトイレに飲んだばかりの水を吐いた。引越してきてから吐くのはこれが初めてである。全然記念すべきことじゃない。

冷蔵庫を覗いてみると、なんとそこには酒瓶が入れられていた。引越してから母も油断したのか、それとも編集者がいつでも飲めるようにとの配慮か。早速飲んでみると、胃に落ちると同時に直ちに食堂の出口まで酒がせり上がってきた。私はまた吐いた。やはり冷たいものはだめだ。ましてや刺激物であるアルコールなんて全然だめだ。

平日なのだから健康のことを考えて歩いたほうがいいのではないかと、人の目も休日より少ないことだし。珍しくそんなことを考えた私は外へ出てみたのだが、家々の塀の上や隣のマンションのベランダや家の庭の植木の上などこちらに猿が鎮座しており、それらが一斉にこちらを向いたのでさすがに怖気付いた私はすぐさま家に戻った。引越してきてからこんなものが見えるのはこれが初めてである。全然記念すべきことじゃない。しかしなぜか安心していて、それがますます嫌だった。私は夜まで読書して過ごした。

榎本なごみが「このキノコ人間が。」を読み続けている。終わりのない本だから読むだけ無駄だ、と一応忠告してみたが、「じゃあ、ずっと読み続けられてお得ですね」と言うので、私は止めるのをや

めることにした。読み続けたいなら読み続ければいいのである。終
のない物語を読むなんて時間の無駄以上の何にもならないと私は思
うのだが。

終わりのない、という表現から、将来、という言葉を連想してし
まったため、晚餐には暗い気持ちで挑むことになってしまった。一
年後の自分すら上手に想像できない。まさか私は死ぬまでずっとこ
のままの生活を送るのか。そんなことを考えてしまうのだ。「一年
後のあんたは、安いバイトでもしてるんじゃないかしら」と母は励
ますのが目的なのか凹ませるのが目的なのかよく分からないことを
言った。

2011年12月13日（前書き）

この作品が作者の日記ではないことは明白です。

2011年12月13日

12月13日（火）

（ページの右上が吐瀉物にまみれていて何と書かれているのか分からない。何か書いたには違いないが、字が滲んでしまっている。せつかなので乾いた吐瀉物の上から、このノートについて記しておく。このノートは私が学生時代に使っていたものだ。学生時代、私はろくに勉強しなかったので、ページは大量に余っている。A4サイズなので1ページ1ページが大きいし、当分ノートのことで困ることはないだろう。しかしこのノートのページが尽きたとき、私はどうやって2冊目を確保すればいいのだろう）

座面の猿。そんな言葉があつたような気がする。テレビに猿が出ると昨日の大量の猿がこちらをむいた事件を思い出してしまつて腰が抜けてしまう恐れがあるのでテレビはなるべく見ないことにする。普段からほとんど見てはいないが。それからインターネットも控えておいた。精神が参っている時にインターネットをやっても決して癒されることはない。インターネットは癒しの道具にはならないのだ。だから私はインターネット依存には至らない。

それでも何かが見えそうな気がしたので私は昼間から目を閉じて布団に横になった。すると全てのものが4色に塗りつぶされた夢を見た。つまり単なるカラーの夢である。どこかの一軒家の玄関先にあるシャッター付きの駐車場で、体を地面に対して30度まで傾けて立っている、それだけの夢だった。誰とも何ともコミュニケーションを取らない、そんな夢だった。夢でも一人である。ディスプレイから生まれるエンターテイメントが通用していたのはゼロ年代までである。一体何を書いているんだ、今日の私は。そうだ、明日は病院の日だ。忘れないように書いておかなければ。

2011年12月14日（前書き）

この作品は作者の日記ではなくフィクションであり、登場する人物・団体等とは一切関係ございません。

2011年12月14日

12月14日（水）

最近、日記に「分からない」という表現を多用しすぎているのではないか、と気づいた。だから今日はその言葉を使うことを控えてみよう、と、朝、誓った。深夜となり日記を書いている現在、私はそれを忘れなかったことを後悔している。分からないことは分からないと書いたほうが明らかに分かりやすいからだ。しかし記憶してしまっていたものは仕方がないので、今日これからの日記は「分からない」という言葉を使わないで書く。

昼に編集者が部屋に仕事をサボりにやってきて、リビングで酒を飲んでいた。缶ビールである。「君も飲むかい」と尋ねてきたので、飲むと答えると「駄目だよ、君みたいな奴は」と編集者入った。じやあどうして尋ねたのか。嫌がらせのためだ。そうに決まっている。しかしその規模があまりにも小さい。小さすぎる。部屋の家具という家具を轟音と共に破壊しまくった在りし日の編集者はどこへ行ってしまったのか。母との恋にかまけて日和ったのか。大歓迎である。

部屋の中にいると狂いが加速していくような気分になっていく。文章を書いていれば、それか本でも読んでいればその気分は治まる。インターネット中は治まらない。不快な書き込みはどこにでもあるからだ。とにかく部屋に入ることによる狂いの加速を抑えるためには本を読むか文章を書くしかなかった。しかし私はそのどちらもやりたくなかった。飽きたからである。その理由は、理由を、考えようとしていると、「そろそろ病院へ行かないといけないんじゃないですか」と榎本なごみに言われたので、私は部屋を出た。榎本なごみは私の部屋に残った。何をやって過ごすつもりなのか。どうして帰らないのか。

晩餐にエビフライが出された。マヨネーズもソースもなしで食べるという。嫌がらせかと思ったが、面倒くさいだけだろうと思い直した。そして私は思い知った。味付けされていないエビにはほとんど味がない。ついでに出されたキノコしか入っていないスープにもいつものように味はなかったし、味の薄い晩餐だった。

ここまで、危ないところはいくつかあったが「分からない」という言葉を使わずに何度かかけた。なんとなく満足感に脳が満たされていくのがわかるが、私は一体何をやり遂げたのか。誰にも見えないうことをやり遂げて誰も認めてなくれはしない。無駄な努力とはこのことか、と私は痛いほど思い知った。もう寝る。さっきまで気絶してたけど。

2011年12月15日（前書き）

この作品はフィクションであり、作者の日記ではありません。

2011年12月15日

12月15日(木)

土曜日に借りた本のなかに珍しくライトノベルが混ざっていて、そのタイトルを「僕は友達が少ない」というのだが、少なくとも友達が存在しているだけ十分充実しているのではないかと私は思う。私の友人は私が狂い始めると同時に私への連絡を絶った。友達が少ないより友達がいないほうが明らかに悲惨なのではないだろうか。友達が少ない人間にも見向きもされないのだから。

母が「今夜は一家で外食だから」と言ってきた。父とは別れたのではなかったのか、と尋ねてみると、「最後にもう一度だけ、一緒に会いたいって。そうすれば離婚してくれるっていうから」だから、母は父と会うのか。条件があるから仕方なく従う。そうとは言い切れないかもしれないが、私にはその行動がとても子供っぽく写った。ただし狂った私の目にそう写っただけなので、本当に母の行為が子供っぽいものなのかは分からない。

その件について榎本なごみは「あっさりしたものです」と感想を漏らした。もっとドロドロした、口汚く罵り合うような別れのシーンを見たいのか。「いえ、一応家族なんでしょう？ 家族が別れることって、普通は悲しいことだと思うんですが。お母様も泣くのが自然なんじゃないか、と思いましたが」しかし榎本なごみも家族と離れて暮らしている。兄と離れて、このマンションの部屋で。「あいつのことはいいんですよ、あいつは嫌いな家族ですから」母も父のことを嫌っていないとは限らない。「そんな素振りは見せませんでしたけどね……」というか、私はあなたのご両親が話しているところを見たことがないので「私の両親は、晩餐の席に同席していたか、特になにも話したりしなかった。そんな感じになっていたか

ら、別れることになったのか。

本を2冊読み終える頃には夕方になっていて、母と私と妹は外食に出かけた。母はバッグに冷凍したキノコを入れていた。ファミリ―レストランで私たち家族4人は同じ席について、晚餐を摂った。食事しながら別れ話は進んでいった。別れ話の最中、父は泣いた。父以外の人間は泣かなかった。母は私にバッグに入れていたせいで自然解凍されたキノコを食べ終えたライスの皿に置き、食べさせようとした。私はそれを食べた。帰り道の最中で私は狂い、意識を失った。

日記を書き始めようとすると、「誰か、泣きましたか」と榎本なごみが起き上がって尋ねてきた。父は泣いた、と伝えると、「私の兄は、まだ泣いていないんですよ」と榎本なごみ入った。だからどうしたというのだろう、と私は思った。それとも、ここで何か気づかなければならないのか、私は。

2011年12月16日（前書き）

この作品は作者の日記ではありません。

2011年12月16日

12月16日（金）

来年から苗字が変わることになった。つまり正式に離婚が受理されるのは来年になる、とのことである。私は離婚について詳しく知っているわけではないのはっきりしたことは言えないが、離婚というものは何かと手間がかかるものらしい。どんな手間がかかるのか、それを正確に例を挙げて言い表すことは出来ない。知らないからだ。

来年から正式に他人となる父について自分はどう思っているのか、考えてみた。結果、どうとも思っていなかった。きっと母からもどうとも思われていなかったに違いない。だから離婚の話をしている際も父は泣き、母は泣かなかったのだ。妹も同様だろう。となると、父が哀れに感じられる。自分の子供に哀れまれるなんて、父が可哀想だ。自分の子供に可哀想がられるなんて、父が以下略。

榎本なごみは私の姓が変わることについて「あ、そういえば離婚といえばそうなるものでしたね」と言った。人生に一つ区切りがつけられることだし、いい加減尋ねてみなければなるまい。そう思ったので、私は榎本なごみに、どうして私に構うのか、と正面切って尋ねてみた。「んー……あなたは、狂っているじゃないですか。狂った人なら、私をかくまってくれと思って」なにかから匿わなければならぬのだ、私は。「真相を全部教えると、私は追い出されかねませんから」そんなに危うい事情があるのか。私は榎本なごみに畏怖の念を抱いた。

晩餐の席、私は箸が進まなかった。母の料理は外食に及ばないからである。つまりどうということかという、どうということなのか書

かなくてもわかるだろうからやっぱり書かないことにする。しかしキノコは問題なく食べることができた。味が無いせいだ。しかし、それが良いことだとはとても思えない。私が狂い続けることが、榎本なごみが私に構ってくれている理由だとしても。

2011年12月17日（前書き）

この作品は作者の日記でも夢日記でもありません。

2011年12月17日

12月17日(土)

夢を見なかった。というのも最近夢を見るとそれを必ずと言っていいほど日記に書いているような気がしたからで、それだとこれは現実の日記ではなく夢日記になってしまう。しかし狂いが見せた現実ではないものもこの日記は記録している。どうして私はそんなことを書いたのだろう。少し前までは、幻覚が見えないことを少し不安がっていたほどののに、この心変わりは一体どういうことなのだろう。私が狂っているからなのか、それとも人間の大半は寝て起きたら考えが変わっているものだからなのか。

榎本なごみに依存してはならない。そう私は決意した。決意はしたが榎本なごみは私の部屋に居座っていて、私はそれに対して出て行けと言わない。代わりに別の言葉で尋ねてみた。一生をここで過ごすつもりなのか。「そうですね……結婚しませんか?」私にそんなことができるほどの責任能力はない。

妹に不幸が起こった。誰かが死んだとかそういったことではなく、クリスマス目前なのに彼氏に別れを告げられたという、あまり重大ではない不幸だ。しかし妹はこの世の不幸を全て背負い込んだ、私よりも不景気な表情をして帰ってきて、それから母に八つ当たりした。「お母さんが離婚なんかするから!」と、別れの責任まで母に押し付けようとした。母はそれを無言で受け止めた。それを自分の部屋で扉越しに聞いていた私は、これまで書いた文章を読み直していた。まるで面白くない。困った。

狂っていることに依存してはならない、そう考えた私は、今夜は狂わないことに決め、晚餐に出されたキノコを口の中に入れたまま

食事を終わらせ、自分の部屋に戻ってから口の中のキノコを吐き出してゴミ箱に入れてみた。しかしゴミ箱の中身は母が回収する。このままではキノコを食べていけないことがばれてしまうことになる。まあいい。どうとでもなればいい。

2011年12月18日（前書き）

この作品は作者の日記でもなんでもありません。

2011年12月18日

12月18日(日)

いつも夢は起きる直前か、昼寝している時しか見ない。というか、そういう時に見た夢しか覚えていられないように脳はできているのだろう。これが狂っている人間特有のものだったら、私が小学生の頃に読んだ学年別学習誌の夢についての特集はなんだったんだ、ということになる。まあ、雑誌は嘘をつくものである、ということは、高校生頃になってから気づくようになったのであれも嘘だったのかもしれない。

そんなわけで今日見た夢は、逃亡生活を続ける男女にそれを追う男が追いつき、二人を刺殺するという夢だった。昨日文章の読み返しを行なったので、その続きのイメージが夢として現れたのだろう。しかし、こんな安易な話の終わりはやるべきではない。困ったときには登場人物を殺して終としておく、なんて怠惰な人間のやることである。私は狂っていることには自覚的であるし、それで仕方がないとも思っているが、怠惰でいようとは思わない。今の生活は十分怠惰なものではあるが。こんな生活猿でもできる。そういえば猿というペンネームの作家がいたことを思い出した。

図書館へ行った。いつもは土曜日に行くのだが、忘れていたのである。忘れたきっかけは思い出せないし、別にそこを追求しなくてもいいと思う。ふと、なんとなく忘れたのだ。いつもと通う曜日が違うからといって特に新鮮味があるわけでもない内装を眺めながら私は一日延滞した本を返却し、猿の書いた本を探した。「微動ファイ」というなんだかよくわからないタイトルの猿の本があったので借りることにした。それから町田康のエッセイも借りた。

「結婚が無理なら婚約しませんか」榎本なごみはまだ起きたまま寝言を言ってくる。私はそれを適当にあしらって町田康のエッセイを読んだ。とても愉快だが、自分にはこんな生活を送ることもこんな発想をひねり出すこともできないのだな、と思うと切なくなった。愉快的なエッセイを書くには豊富な苦勞譚が必要に違いない。結婚生活には苦勞が多いと聞く。町田康のエッセイを読み終えた私は、試みに榎本なごみと結婚してみようかと考えたが、金もないのに結婚できるわけがないのだった。それに狂っている人間と一緒になりたくないなんて、きつと冗談だろう。冗談を本気取るほど阿呆な行為はない。

晩餐の席で、母は食べる私を見張っていた。「キノコ、飲み込んだ？」と尋ねてきた。そういうえば図書館から帰ってきたらゴミ箱が空っぽになっていた。仕方がないので私はキノコを飲み込んだ。そして狂った。記憶を失った。深夜に目覚めてこの日記を開くまでの記憶がない。いつものことだ。

2011年12月19日（前書き）

この作品はフィクションであり、作者の日記ではありません。

2011年12月19日

12月19日(月)

夢に祖母が出てきた。病院の待合室で座っていた私に、祖母はその席をどくように手を振った。祖母の厳しい顔を私はその時初めて見た。夢の中だったけど。そんな祖母は去年の夏、死んだ。祖母は私が生まれてから死ぬまで、私に優しく接し続けた。もしかしたら榎本なごみは祖母の霊魂が具現化した姿なのかもしれない、と少しだけ考えたが、すぐに打ち消した。さすがにそれはファンタジーが過ぎる。ファンタジーとは逃避である。

昨日図書館に出かけた際、歩道に植えられている気に電飾が巻きつけられているのを見た。昼間だったので光ってはいなかったが、夜になればきつと光っているのだろう。外はクリスマスを意識している。テレビの世界でもクリスマスを意識した番組構成を行なっている。インターネットは案外そうでもない。我が家ではここ数年、クリスマスにやることといったらケーキを食べる位である。今年は私が狂ったこととクリスマス直前に妹の不幸があつたこともあつて、何もやらないような気がする。別に構わない。

「クリスマスなのに何もしないんですか？」最近、毎日のように違う話題で話しかけてくる榎本なごみがクリスマスの過ごし方についての話題を降ってきた。私は妹に不幸が起きたので今年はきつとないもやらないだろうと伝えた。「寂しいですね。聖夜なのに」聖夜だろうがなんだろうがうちの家族はケーキを食べることくらいしかやらない。神なんかに感謝もしない。榎本なごみは友達とパーティでもやるんじゃないのか。「私は、憧れてるんですよ。クリスマスにパーティ開くの」その友達はいないというのか。私は以前、榎本なごみが知らない女子高校生と歩いているところを見たことがある。

あれはおそらく友人だろう。「幼稚園の頃は、よく友達とクリスマスパーティーを開いてたんですけどね。私の友達の一人が、小学校に入ってからいきなり反抗期に入っちゃって。クリスマスパーティーなんてダサイ、って言い出したんですよ。それ以外は親に反抗するくらいでいい子だから仲間から外すこともできないし。だから私たちはその流れに逆らえなくて、小学校に入ってから以来、友達とクリスマスパーティーを開かなくなったんです」榎本なごみは珍しく身の上話を長々と語った。「その子とは今でも付き合いがあるんで、今年もクリスマスパーティーは開かれないうね」その友達と、クリスマスに会わないのか。「会いません。あってもやることがないので」今の私に友人はいない。2011年12月19日の私には友達がない。確認のため、再度書いておく。

晚餐に煮物が出された。手間のかかった料理である。大根の煮物まで冷めていたが、そんなことに文句をつける権利は私にはない。最近、起きている間に狂っている症状が出ない、と母に相談してみると、「今週、病院行った？」と尋ねられた。そういえば行っていない。薬も処方してもらっていない。飲み忘れが度々起こるので、少しはストックがあるが、それもあと数日でなくなってしまう。「明日行きなさい」と言って母は病院に電話した。どうして起きている間に狂っている症状が出ない、という改善の釣行の話から病院へ行っていないから行けという話になったのか。母が日本語の解釈が下手である、という可能性は有り得ない。母は翻訳家なのである。何語を翻訳しているのかは知らないが。

2011年12月20日（前書き）

この作品は作者の日記ではなく、実在する人物・団体等には一切関係ありません。

2011年12月20日

12月20日（火）

昨日病院の待合室で祖母にしつしつされる夢を見たのは、先週病院に行き忘れたことを深層心理で気にしていたからかもしれない。そんな想いを胸に、今日は病院へ向かった。待合室は昨日の夢で見たものとは全く違った内装をしていた。しかしやることは変わらず、ただ呆然と待つだけだ。急遽予約したのでいつもは40分待ちのところを、今日は60分待たされた。診察はいつもどおり5分である。主に処方箋をもらいに通っているだけなのだから仕方がない。

薬局に寄ってから帰って文章の続きを書いた。話の続きはこんな感じになった。人を殺して逃亡中の男女は疲弊していた。もとより大した準備もせずに逃亡生活に突入したのだから、毎日をやり過ごすのが精一杯だった。ゴミ捨て場を漁って食べられそうなものや売れそうなものを探し、食べ物やトラックの燃料代を得ることを繰り返すその日暮らしの毎日が続き、女の場合は荒れ始めていた。しかし文句は言えない、と女は悲壮な決意を固めていた。どんなに不便な生活をしていても、私はこの人が好きだから一緒にいるのだ、生活が本当に嫌になった時はこの人と別れなければならない、それは嫌だ。嫌だから我慢しなければならない。と、女は決意していた。女は男に自分から進んで囚われているのだった。一方で男も生活を加速させていた。これからどこへ向かうのかわからない生活は不安くれる女のため、それもできずにいた。二人は表面上は愛し合いながら、お互いにうんざりしていた。と、ここまで書いた。これからまた一展開加えなければならぬ。文章を書く事は苦難の連続である。

晩餐に卵焼きが出た。過度に甘い卵焼きだった。口に入れると、じやり、という食感と共に砂糖がその存在感を示した。母はおそらく目分量で調味料を入れたのだろう。それから、卵焼きにはキノコが入っていた。この無味の食材のせいで卵焼きからは卵の味が消え失せており、私はただ甘いだけの物体を口に入れ、咀嚼し、嚥下することを繰り返した。今日ばかりはさつさと狂ってしまいたかった。それほどまでに口の中が不快だったのだ。

2011年12月21日（前書き）

この作品は作者の日記ではありません。

2011年12月21日

12月21日（水）

クリスマスにはシャンパンを飲むものであるらしいが、私はまだ飲んだことがない。ワインも飲んだことがない。飲んだことがある酒の種類は、缶チューハイとビールと焼酎だけである。日本酒も一度くらい飲んだことがある気がするが、そんなシチュエーションで飲んだことがあるのかは覚えていないので答えられない。とにかくそんなことを考えてしまうほど、私は酒を欲していた。酔いたかった。狂ったように酔いたかった。元より狂っているくせに正気じゃない状態に自分を持って行きたがっているのだ。酔っていないでいると体が緊張して固くなってくる。こんな、何もしていない生活をしていても、である。

榎本なごみに昨日薬局でもらってきたリスパダールとセルシンを飲ませてみた。余っているので他人に飲ませて困ることはない。結果、「効きませんね」という感想が帰ってきた。「特に自分に何か起こった、といった手応えはありません」この二つは不安を抑える薬らしいが、患者である私ですらその効果を疑っている。だから患者でもない榎本なごみがそれを飲んででもなんに効果もないことは予測がついていた。「でも、実は中毒症状があつて、明日になればまた飲みたくなるかもしれませんよ」それはない。毎日飲んでいる私ですらあまりの効果のなさに飲み忘れる日がある位だし、それでも特に何か不具合が起こるわけでもないのだ。この処方薬は酒より効果が薄い。

晩餐后、その二時間以内に夜の分の薬を飲まなければならなかったのだが、今日も飲まずに晩餐に入っていたキノコのせいで狂って倒れた。そして起きて、この日記を書き始めた。薬は一日三回、毎

食後に飲まなければならない。しかし私は食事の出されない朝と昼だけ薬を飲み（たまに飲み忘れ）、晩は気絶してしまうのでいつも飲んでいない。結果、余った薬が溜まっていく。これを一辺に飲んだらどんなことが起こるだろう、そう考えた私は、これを書き終えたらとりあえず10錠一度に飲んでみることにする。もしかしたら死ぬかもしれない。

2011年12月22日（前書き）

この日記は作者の日記でも夢日記でもありません。

2011年12月22日

12月22日(木)

起きたいが夢から覚められない、そんな明晰夢を見た。もう何かなんだかわからない状態である。寝すぎてどうにかなくなってしまったのだろうか。このままこの明晰夢の分析を続けようとしても「分からない」が連発されるだけであることは明白なので、この夢についてはこれ以上考えないことにする。

昨夜、薬を一度に10錠飲んだわけだが、今朝の私には特になにも起こらなかった。いや、少しだけ変化はあった。体が重く、眠気がひどい。うつすらと吐き気もして、横になっても楽にならない。要するに二日酔いと同じ症状が出たのである。つまり私が飲んでいる薬の効き目はその程度のものである、と言うことができる。私がもらっているのは飲みすぎても二日酔いの症状が出る程度の弱い薬なのだ。それとも、こんなふうに一辺に飲まれることをあらかじめ予測して、弱い薬を処方していたとか。いや、それはないだろう。あの診察を5分で終わらせてしまう医師が私のことなどを真剣に考えているとは思えない。

榎本なごみに「私が寝たあと、何か無茶でもやっただんですか」と尋ねられた。私は何もやっていない、せいぜい薬を10錠一気に飲んだくらいだ、と答えた。「すごい顔色ですよ」と榎本なごみは言った。しかし薬を一度にたくさん飲んだ程度で起こる症状は軽い二日酔いのようなものであり、「今日は何もせず寝ていたほうがいいですよ」そんなにひどい顔色をしているのか、私は。「一目で異常だと分かる程度には」

そんなわけで横になった私を置いて、榎本なごみは一旦家に行く

といった。帰るのではなく、家族と交渉するつもり、とのことだった。どんな交渉かというと、年末もこちらのマンションにいてもいいのか、という交渉をしに行くのだそうだ。そんなに気軽に家族と顔を合わせられる程度の環境にいながら、どうして家に帰らないのかが不思議である。

不思議を放っておくのは良くないのでどうして帰らないのか尋ねてみた。「家族と一緒にだと息苦しいんですよ」反抗期か。「私の反抗期は既に終わりましたよ。反抗期が終わったある日、突然お兄ちゃん嫌いになって、家に居たくなかったんです。ある日突然、他人のお母さんと交際を始めたから」じゃあ尚更我が家には居ない方がストレスが溜まらないのではないか。「汚らしいじゃないですか、不倫なんて」榎本なごみは本当に都合が悪くなると私の言うことを無視するようになる。

榎本なごみは晚餐までに戻ってきたが、晚餐の席には出席しなかった。編集者が、つまり榎本なごみの兄が、そして母の恋人でもある人物が、リビングの机に座って飯を食っていたからである。晚餐が終わったあと、榎本なごみは「私、決心しました。兄にあなたのお母さんと別れるよう説得してきます」と言って、私の部屋から出ていった。私はその背中に、どうして晚餐中にそれをやらなかったのか、と尋ねたかったが、我慢しきれずキノコで狂って倒れた。

2011年12月23日（前書き）

こんな時期でもこの作品は作者の日記ではありません。

2011年12月23日

12月23日（金）

祝日である、確か今日は天皇誕生日だったように思う。天皇の誕生日を祝っている人間を、私はテレビの中以外で見たことがない。きっと明日も、キリストの誕生日を祝う人間を目にすることはないだろう。正確には明後日だが、日本では24日が終わればもうクリスマス事後、みたいな空気が蔓延している。日本人とはそういうものなのだ。何を偉そうなことを言っているんだ私は。

祝日といえども私にとってはいつもと変わらない金曜日なので文章を書く事にした。こんな内容である。逃亡生活に疲弊した男女は口喧嘩を繰り返すようになる。だんだん関係は悪化していき、口喧嘩以外で口を聞かない日が増えていく。そんな中、また追いかける男に追いつかれる。追いかける男は逃げる女と二人きりで話をする。二人は兄妹である。追いかける男は女の感情に訴えかけ、もうこんな逃亡生活はやめてくれ、と懇願する。というところまで書いた。まさかここで急に女に心変わりさせるわけにもいかないだろう。でもこの調子で毎日書き続けていれば年内に話を完結させることも可能かもしれない。そんな気力は無いが。

海外の小説を読んでいたが、日本人の作家が書いた本より読むべしは落ちる。知らない地名や馴染みのない人名が頻発するからだ。だから頭の中にイメージが沸かず、よって読むペースが遅くなる。猿の小説「微動ファイ」は読みやすく書かれている。本当に翻訳家を介して書かれた本なのかと疑わしくなるほど読みやすい。いや、海外語ではなく猿語を日本語に翻訳したのか。いや、猿は文字を使わないはずである。そしてこの本の訳者はやはり母である。母は何をどうやって翻訳して、猿の言葉を本にしたのか。謎である。

そこで、どうやって翻訳家になったのか、晩餐の席で母に尋ねてみた。「専門学校に通ったのよ」と普通の答えが返ってきた。一体何の専門学校なのか。「翻訳の専門学校だけど？」母は猿の言葉を日本語に翻訳したのである。そんなことを教える学科があるのか。「あるわよ、普通に」私の中の常識が揺らいだ。それともこれは狂った私の脳が見せたいもののやつなのか。

2011年12月24日（前書き）

こんな時期でもこの作品はフィクションであり、
実在する人物・団体・時候とは一切関係ありません。

2011年12月24日

12月24日(土)

「この世は闇だと誰が決めた？」そんな救世主の台詞を考えてみたが、ありがちである。どうも私の想像力は狂って以来減退しているようで、ありがちなことしか考えられなくなっている。たまに見える常人では見えないものも、見えたものを見たままに日記に書いているだけなので、少しも想像力があるわけではない。狂った頭が勝手に見せた幻覚で、私が想像したわけではない。狂いというものは自分の中に勝手に動きまわる野獣を飼っているようなものなのである。この比喩もありがちだ。

図書館に本を返却しに行く、同時に狂った私を観察する浮ついた人々を観察しようとしてみたが、街は通常の休日と同程度の人出であり、小学生の頃旅行で訪れたことのある東京なんかとは比べるべくもなく少ない。宮崎の人口から考えればこんなものか、と思いつつ、クリスマスなんだからもつとはしゃげ人々よ、と心の中で叱咤激励しつつ、凹むからはしゃがなくてもよろしい、と人々に言い聞かせつつ、私は本を返却しに行った。頭の中は忙しかった。

もちろん妹に不幸が起こった我が家でも何も催す様子はなく、いつも通り母は自室で翻訳作業に精を出し、妹は友達と集まって何かするそうである。残念会兼クリスマスパーティーとかそんなものだろう。いつもどおりである。よって私はいつものように孤独である。

「ずいぶん前から私がいるじゃないですか」と榎本なごみは言うが、都合のいい相手に都合良く甘えたくない、という気持ちが今日の私にはあった。「そんな気持ちがあるなら、福祉に甘えたりせず就職に向けて動いてみたらどうですか？」その通りである。しかしもうこんな日だ、今年はもう手遅れである。そして人間は寝て起きる

たびに考えが変わってしまう生物である。「結局、あなたは現状に満足してしまっているんじゃないですか」狂った私が働いたところで世間に迷惑しかかけられない、というのが現状での私の考えである。「いつまでこの生活を続けたいんですか」そのままの質問を榎本なごみになげかけてみた。「善処します」榎本なごみの返答は意味がわからなかったが、私も同感だったので黙っておいた。

晚餐の席に饗されたのは、狙ったかのように和食だった。キノコは味噌汁に入っていた。おかげで味噌汁が無味である。テレビでも点けてみようかと思ったが、母がリモコンに手を伸ばそうとしないので静かな夜の中で晚餐の橋をすすめた。「年明けに締切なのよ」母は言っていた。年が明ければ母は締切が迫るわ苗字が変わるわで大忙しである。私もそろそろ忙しくならなければならない。今日の私はそう思った。

2011年12月25日（前書き）

この作品は作者の日記ではありません。

2011年12月25日

12月25日(日)

爆発音がした。私は目を覚ました。するといつもと変わらない昼といったも変わらない部屋が私を出迎えた。夢の中で爆発が起こったのである。いや、火山の噴火だったような気もする。とにかくこれを書いている深夜、日付が変わってクリスマスがあっさりと何事もなく終わった今現在の段階では既に夢は記憶から消えかかっている。

当日の様子を見に街へ向かってみた。すると街は既に後片付けの雰囲気にも包まれており、昨日までの浮ついた様子が嘘のようだった。イブが本番なのは日本人の悪い癖である。いや、何が悪いというのだろうか。少しも悪くないではないか。こんなどうでもいいことを考えても許されるのではないかと思えるほどに、今日の街は祭りの準備に疲れているように感じられた。そういえば今日は視線があまり気にならない。薬を飲んだおかげなのだろう。自分の狂いが治ったとはとても思えない。なぜなら昨日から本を読むことができなかったからだ。こうして文字を書く事は出来るのに、文字をずっと読み続けるという行為ができない。

家に帰ると大きな包装紙がリビングのゴミ箱に突っ込まれていた。プレゼントのラッピングのようである。消去法で考えると、妹が昨日の友人との残念会で貰ったものに巻き付けられていたものだろう。プレゼントがなんだったのかは知る気もないし、素人してもきつと教えてもくれないだろう。私だったらそんなことを尋ねてくる相手は不審に思う。そして部屋に帰ると榎本なごみが頭にねじり鉢巻のようにリボン巻いていた。「これから悪い冗談をいいます。『プレゼントはわ・た・』それ以上の発言を私は許さなかった。

ここ最近幻覚らしい幻覚を観ないことを晩餐の席で母に報告してみた。「あら、そう」と母は言った。もう狂っていないのかもしれない、などと心に思っていない憶測も口にしてみた。だからキノコはもう不要かもしれない、と提案を続けてみた。「明日は朝も食べなさい」と母は言った。明日の朝に私は何を食べさせらるのだろう。私は不安になり、口に入れたキノコの味も分からなかった。

2011年12月26日（前書き）

年の瀬ですがこの作品はフィクションであり、作者の日記ではありません。

2011年12月26日

12月26日(月)

爆発音がした。と思ったら私の絵やの扉が叩かれる音だった。寝ていたために夢でそんな音がしたのだと勘違いしたのである。起き上がってみると時刻は朝だった。朝に目覚めるなんて何日ぶりだろう。確か引越しの日は朝に起きた気がするので、総感覚は空いていない。ずいぶん経ったと思ったが、引越してからまだ二ヶ月も経っていないのだ。いや、経ったか。もう引越したのが何日前なのかわからない程度に、私は新しいマンションに慣れていた。とにかく誰かが扉の向こうから私を呼んでいるのは確かだったので、私は部屋を出てリビングに入ってみた。すると食卓の上でスープが湯気を上げていた。母が「飲め」と言うのでスプーンを使って飲んでみると、それはキノコのスープで、味がしなかった。

それから夕方まで私は腹痛に襲われ続け、ずっと横になっていた。変な夢も次つにに見た。黄色い鳥がだんだん変形してうわづぐばみになっていく夢、ほんさずを通さずにえくとおさずに加工してしまつたため地獄を見る夢、シンパシーを感じたと思つたら相手はふへやをざるだった夢などなど、きつと読み返しても単語の意味がわからないであろう夢ばかり見た。そのどれもが悪夢と呼んで差し支えないものだった。なにせ意味不明なのだ、悪夢以外のなにものでもないだろう。

ようやく起きられるようになったので起きてリビングに入ってみると、晚餐が用意されていた。寝ているうちに空腹になっていたのではそれを食べた。晚餐にももちろんキノコが入っていた。母はどれだけ私を狂わせれば気が済むのだろう。尋ねてみた。「もっと本が売れて、生活が楽になればねえ」それまで私は狂い続けて福祉

を受け続けることを要求されているらしかった。

2011年12月27日（前書き）

この作品は作者の日記ではありません。

2011年12月27日

12月27日（火）

わけのわからない文学作品を読んだ。文学作品というものは大体においてわけがわからないと決まっているものの、今日読んだルナールの「にんじん」という本は群を抜いてわけがわからなかった。しかしそれは時代がそうさせているだけなのかもしれない。当時はエンターテインメント作品として受け入れられていたのかもしれないところで現在においてわけのわからない文学作品を書いている作家は一体なにがやりたいのだろう。誰に何を伝えたいのだろう。そんなことを文章を読み返しながら思った。

母の指に見たことのない指輪がはめられていた。ずっとまえから填っていたのかもしれないが、私が気づいたのは今日だ。なんなのかと思つて尋ねてみると、榎本なごみさんから貰った、とのことだった。それはいつもの榎本なごみではなく、それと同姓同名の兄であるところの榎本なごみを指して言った言葉なのだった。婚約でもしたのであるか。婚約や結婚以外の目的で人が人に指輪を送るといふところを、私はよく知らない。「いいからスープ飲んじやいなさい」と母は言った。時刻は朝で、私と母はリビングの食卓で向かい合つて座っていた。私の目の前にはキノコ入りのスープが置かれていた。

昼になる頃によやく母が諦めてくれたので私は部屋に戻つて文章の続きを書いた。好きな男と自分を追つてきてまともな生活を送らせよう（服役という形で）とする兄と、どちらに心の矛先を向けるべきか迷つた逃亡者の女は、妙なことを逃亡者の男とそれを追う男の二人に提案した。自分を取り合つて対決して欲しいというのだ。対決の手段は場所を限定した鬼ごっこで、その場所とは一つの小さ

な山だった。制限時間は二十四時間で……などと書いていて、これは妙なことになってきた、と私は思った。私は果たして何を書きたかったのだろうか。

「いいんじゃないですか？ 自分が満足できるなら」榎本なごみはそう言った。私が書いている文章は当初は猿に向けて加工としていたのだが、やがて自分のために書く事に切り替えたのだ。そういうメールをここ数日確認していなかったので、パソコンを立ち上げメールを起動してみた。数種のメールマガジン以外のメールは届いていなかった。以前猿から届いていたあのメールは一体なんだったのだろうか。などと書いた翌日に猿からメールが届いたりすることとは、多分ないだろう。

晚餐はキノコづくしだった。母が私を狂わせたいのはよくわかった。私は全く味のしない晚餐を食した。そして倒れた。そして深夜に目覚めてこの日記を書く直前、榎本なごみが深刻な顔を私に向けていた。「私は追い出されるかもしれませんが」母が唐突に榎本なごみに、そろそろ追い出すから、と言い出したらしい。理由は、榎本なごみが来たせいで私の狂いが治りかけているから、だそうだ。

2011年12月28日（前書き）

もうすぐ年越しですが、こんな日は年明けが遠くに感じられるものですね。ところでこの作品はフィクションであり、登場する人物・団体・企業とはなんの関わりもありません。

2011年12月28日

12月28日（水）

体を支配されることと心を支配されることのどちらが恐ろしいだろう。私はどちらも同等に恐ろしいと思う。例えば体を支配されて好きな人を襲えと命じられると、好きな人を襲うことになる。例えば心を支配されて好きな人を襲えと命じられると、好きな人を襲うことになる。どちらも結果は同じである。しかしこんなことを本気にしてしまう人間は、食事の選り好みをする資格はないと思う。何を食べようが栄養価さえ偏っていなければ同じである。

結局、榎本なごみは自宅へ戻っていった。榎本なごみは最後まで嫌そうな足取りで部屋を出ていった。確か榎本なごみが嫌っているのは、自分と同名の兄だけではなかったか。だったら帰ることくらい苦ではない……いや、苦か。確か榎本なごみが嫌っているのは家族全員だった気もする。だったら帰ることは苦であるはずだ。とにかく、家族に一人でも嫌いな人間がいる、ただそれだけで、人は一ヶ月以上も家を空けるほど家が嫌いになるものなのである。ところで、私は家族が好きか嫌いか。家が嫌になっっていない以上、少なくとも嫌ってはいないはずだ。かと言って好きかと訊かれれば、私は口ごもる。照れとかではなく。分らないのである。

病院へ行き処方箋をもらい、その足で薬局へ行って病院へ出かける前に手渡された代金を支払って荷物を薬だけにして家に帰った。そしてふと思い立ち、情性で飲み続けている三種類の薬のうち、一種類を止めてみることにした。今までに一日に一回や二回程度薬を抜いたことはあるが、丸一日以上薬を抜かなかったことはない。でも、きつと支障はないだろう。キノコという壮絶な効き目を持つ薬を毎日摂取しているのだから。

晩餐に出されたのはキノコの炊き込みご飯だった。炊き込まれていてもキノコ入りの料理は無味だった。珍しくもないことなのだが、晩餐はそれ一品のみだった。晩餐后、理由は不明だが自室に帰ると涙が出てきた。榎本なごみが居なくなつて本心では寂しいのか、それとも晩餐がわびしかったから泣いているのか、理由は不明だがとにかく悲しいので泣いた。

2011年12月29日（前書き）

この作品は作者の日記ではありません。

2011年12月29日

12月29日(木)

朝から原因不明の涙が止まらず、不潔なことに布団を涙で濡らしてしまった。起きてとりあえず読書を始めてみるも、その内容がちょうど発達障害という不憫な立場の人間が主人公の話だったので主人公が少し強めに人に当たられるだけで感情移入しすぎて泣いてしまう。最も小説というものは大体不憫な立場の人間が主人公になりやすいもので、この状態のままだと読書もままならないので、私は取り急ぎ対策を考えなければならなかった。しかし考えてもただただ悲しいばかりで、何も思いつかなかった。ただ悲しいだけで人間の行動力はこんなにも落ちてしまうのか。もとからくに行動していなかっただくせに、ちょっと悲しい程度でさらに行動力が落ちてしまった。このままではただの生きているやわらかい岩のようである。

パソコンを開いて特に癒されることもなく泣きながらネットを巡回していて、ふと思いついてメールを開いてみると、メールマガジン以外のメールが届いていた。榎本なごみからだった。内容は、初詣に行きましょう、というものだった。猿からも、「お久しぶりです。初詣に行きませんか」といった内容のメールが届いていた。私は泣きながらも、なんとかどちらにも「行きたいですね」と返信しておいた。どうするつもりだったんだ、私よ。

「どうして泣いてるの」と母にも問われた。晚餐の席でのことである。私は、理由がわからなくて困っている、としか答えられなかった。晚餐のキノコを食べても悲しみは増すばかりだった。「薬、飲んでる？」飲んでいなかった。もしや、と思って止めていた薬を飲んでみると、三十分足らずで悲しみは消えた。と同時に自分の中か

ら感情が消える気分でした。どうやらセロクエルという薬は、感情の激しい上下を抑える効果のある薬であるらしい。

2011年12月30日（前書き）

時間的には年内最後の更新となると思いますが、この物語はフィクションであり、作者の日記ではありません。

2011年12月30日

12月30日(金)

結局私は榎本なごみとも猿とも一緒に初詣に行くことに決めた。そして二人に(一人と一匹に)メールを返信した。数分後、メールが返信されてきた。榎本なごみからは、一日の初日の出を宮崎神宮で迎えましょう、といった内容のメールが書かれていた。猿からは日付と場所はそちらで指定していただいても結構ですが、いかがですか、といった内容にメールが帰ってきた。私は猿との初詣を二日と決めて時刻と場所も指定してメールを返した。私が狂ってからこんなにもメーラーがフル活用されたことなどなかったのではないかというくらい、今日はよくメールを書いた日だった。と言っても実質三通程度だが。

その勢いで文章の続きも書いた。こんな内容だ。女の提案通り、逃亡者の男とそれを追う男は場所限定の鬼ごっこを開始した。逃亡者の男が山に入っていて一時間後に鬼ごっこは開始され、追う男が山に入っていた。そして数時間後、日は落ち、逃亡者を追う男は危機に陥っていた。熊と対峙していたのである。追う男は生まれてこれまで夜の山に入ったことがなく、くまと出会ってしまった際の正しい対処法を知らなかった。というところまで書いた。最初に予想していた方向とは全く違った方面に話が転がってしまっているのはつきりと分かった。

明日の晩餐はきっとキノコ入りの蕎麦だろう、などと予想していると、今日の晩餐に蕎麦が出された。もちろん蕎麦にはキノコが入っていた。そして味がなかった。この設定をどうにかすることは出来ないのか。今まではパソコン内の設定を変更するたびに、現実のどこかに変更が加えられていた。そこで晩餐が終わり、晩餐後の気

絶から覚めた私はパソコンを開き、メールが届くたびに音が鳴るように設定した。音はデフォルトのそれである。これで世界は何か変更されるのか、明日になってみなければわからない。そういえば蕎麦でも思い出さなかったが明日は今年最後の日か。なんの起伏もない日が続いたのでなんの感慨もない。

2011年12月31日（前書き）

この作品はフィクションであり、
実在する人物・団体・組織等と
は一切関係ありません。

2011年12月31日

12月31日(土)

主義主張のない文章を書いている、ということになる。現在、私は、である。私が書いている文章には逃亡者の男と女が登場し、それを追う男が登場し、それらの登場人物が絡み合ったり絡み合わなかったりしながら物語は進んでいく。書くことによって主張したいことは、これといっていない。だから面白くないのではないか。そういう気がする。しかし主義主張が無くても面白い本は面白いので、単純に私に書く力がないのが悪い、主義主張のない文章は面白くないとかいう主張に逃げるのが悪い、ということになる。そんな気がして目が覚めた。これを書いている時点で既に年は開けていて、太陽は既に登ってしまったている。

12月31日の朝から、私は母のデートに付き合わされた。起きると母が急に友好的になっていたのである。まるで我が子を愛しているかのようにふるまうのだ。私に笑顔さえ向け、この豹変っぷりに私は背筋が寒くなったが、そういえば昨晚パソコンの設定をいじってメールが届くと音が鳴るようにしていたのだ、ということを出し、それにしてもこんな形の変化が訪れるとは、と私は心の中で驚きが隠せないでいた。

母のデートの相手は編集者だった。ここは変わらないようである。母は自分の子供を自分のデートに同行させたが、編集者は自分の家族を自分のデートに同行させたりしなかった。つまり榎本なごみの姿は見えなかったのである。寂しくなかったと言えは嘘になるが、当然だ、という意見にも賛成はできる。私たち三人は編集者の車でドライブに出かけた。母は免許を持っていない。私の免許は狂って福祉を受け始めると同時に失効扱いになっている。運転できるのは

編集者しかいなかった。前の席に母と編集者が座り、私は一人で後ろの席に座った。母と編集者は仕事の話も交えつつ雑談を楽しんでいた。

ドライブは長距離、長時間に及び、宮崎市に帰ってくる頃には日が暮れていた。私たちはファミリーでも入れる飲み屋に入った。そして母は酒を飲んだ。編集者も酒を飲んだ。私も酒を飲んだ。母は私にキノコを食べさせようとしたが、私がそれを拒否するとあっさり引き下がった。三人とも体温が上がったところで、店に車を置きっぱなしにしたまま平和台公園まで歩いた。平和大高遠に続く道はちょっとした上り坂がおよそ1キロ続くもので、酒を飲んだあとの体には決して楽なものではなかった。しかし私と母と編集者は歩いた。私たちの周囲にも歩く人々がいた。

平和台公園に到着すると、母と編集者はそこで日の出を待つらしかった。平和台公園は高台にあるため、初日の出を見るのに適しているのである。私はトイレに行くと言って二人から離れ、そのまま逃げ出した。編集者となるべく一緒に居たくなかったから、それと元日早朝に榎本なごみと一緒に初詣に行く約束をメールで交わしていたからである。私は約束の場所である宮崎神宮まで歩いた。かなり歩いた。続きは、一月一日の出来事になってしまっているので明日の分の日記に書く。

2012年1月1日（前書き）

この作品は作者の日記ではありません。

2012年1月1日

1月1日（日）

昨日の続き。日が登ってしまってから。初日の出が登り、新年となつてからも、しばらく私は歩き続けた。平和台公園から宮崎神宮までは相当離れていたからである。私は汗ばんでいた。その汗も乾いてかつてない寒気が体を襲い、それでも歩き続けているとまた汗ばんできた。しかし今度は服がさっきの汗で湿っていたので気持ちが悪かった。それを二回ほど繰り返し、ようやく私は宮崎神宮にたどり着いた。もはや早朝とは呼べない時間になっていた。

宮崎神宮に到着してから、私はあることに気がついた。確かに待ち合わせ場所を宮崎神宮と定めはしたが、宮崎神宮のどこである、とは定めなかったのである。宮崎神宮は広大な敷地を持つ県内最大級の神社であり、さらに元日ということもあって人通りが多く、この中から目的の人物一人を探すのは困難に思えた。まさか敷地内になぜか居着いている野生の鶏に尋ねるわけにもいくまい。まだ歩き回って探さなければならぬのか。そう考えてうんざりしていると目の前に突如として榎本なごみが現れた。遠くから走ってきたのではない、後ろから回り込んで現れたでもない、突如目の前に現れたのである。これは人間業とはとても思えない。榎本なごみは幻覚だった。パソコンの設定変更により現実の設定も変更され、幻覚になっていたのであった。

それから幻覚となつた榎本なごみと初詣をした。とは言つてもやることは人ごみをかき分けて賽銭も入れずに両手を合わせただけである。賽銭にするための小銭すら私は持たされていなかった。だからお守りを買うこともおみくじを引くこともなかった。幻覚となつた榎本なごみも金銭は持ち合わせていないようで、それらは不可能

だった。だから用の済んだ二人は別れるしかなかった。これから家に帰るのか、と私は尋ねた。「私にいえなんかありませんよ」と榎本なごみは言った。また現実の変更点を見つけた。

榎本なごみと別れて家に歩いて帰ると母が待ち構えていた。それから私は長いこと説教を食らった。無言で立ち去ったのだから当然といえば当然である。罰として、という名目で、私は茹でただけのキノコを食べさせられた。罰と言われれば仕方がないので、私はそれを食べた。そして倒れた。ついさっきまで私は横になっていた。今は多分、日の傾きからして午後である。しかしこんな時間に、私は二日分の日記を書いている。

2012年1月2日（前書き）

この作品は作者の日記ではありません。

2012年1月2日

1月2日（月）

昼間、疲れていたし他にやることも見当たらなかったで外を歩いていると、急に激しい嘔吐感に襲われた。しかし吐きたかったのに吐けなかった。これは狂いが見せた現象なのだろうか。幻覚が私の体、というか脳に作用して不快感を作り出したのだろうか。普通は見えないものが見える系の幻覚だったら見えても見えるだけなので特に困ることはないのだが、このような身体の不快感という形で狂いの現象が現れるとなると、それは実に苦しい。私はこれからこの現象がいつ起こるのか怯えながら暮らしていなければならぬのだ。早く狂いを治したい。しかしどうなれば治ったということになるのだろうか。

昨日の午後から深夜にかけての私は、パソコンの設定を元に戻すことに苦心していた。メーラーの設定を、メールが届いても音がならないように戻すために色々と操作を模索していたのである。メーラーは滅多にいじらないので、一度変えた設定を元に戻すだけで膨大な時間がかかった。夜になり、晚餐が出された。晚餐にはキノコが入っていないかった。パソコンの設定を戻しても現実の設定は変わらなかったのだ。

しかしそれでも、母が一日に一食しか与えてくれない、という基本設定だけは変わらなかった。母の態度は以前と比べて大幅に軟化していた。私の話に対して笑うようにすらなっていたのである。しかし今日も朝食は出なかった。昼食も出されなかった。夕食の匂いがリビングから漂ってきた頃になって、私はようやく晚餐であることをドア越しに呼びかけられた。晚餐にはキノコが入っていないかった。どうしてキノコが入っていないのか、と母に尋ねてみると、「

早くよくなつてほしいから」と、この前とは正反対の意見が母の口から飛び出した。この前までは福祉をもらい続けるために私に狂い続けることを要求していたというのに。

2012年1月3日（前書き）

この作品は作者の日記ではありませんって。

2012年1月3日

1月3日（火）

横になっっているうちに頭が覚醒したので目を開いてみると、額から足が生えていた。なんの感触もない。つまりこれは質量を持つ物体ではない。しかし人の足の足首から先は確かに私の額に潜り込んでいた。私は頭を起こした。すると足は何の抵抗も示さずにするりと頭を抜け、足の持ち主は元の位置に立ちっぱなしになった。そして起き上がって足の持ち主を確認してみると榎本なごみだった。「おはようございます」なぜ恥ずかしそうにしているのか私には理解できなかった。

「遊びましょう」と榎本なごみは行ってきた。しかし朝のように触ることのできない相手と何をして遊べというのだろう。もしや人間に触れないだけで物体には触れるのか。「そんなことはありませんよ？」と言って榎本なごみは壁に手を沈ませたり抜き取ったりしてみた。じゃあますますどうやって遊べるのか分からないではないか。「そうですね、じゃあ……私が先手で、7三歩」目隠し将棋はハードルが高すぎる。「じゃあどうしましょうか、ねえ。この体、使い勝手が悪いですねえ」そう言いながら榎本なごみは縦横無尽に飛び回り、私の体をなんとも通過した。まるで幽霊と戯れている気分だった。もしや今の榎本なごみは幽霊なのではないか、とすら思った。「そんなことないですよ。私はあなたの頭の中にちゃんといます」どうやら幽霊ではなく妄想の産物になってしまったらしかった。

晩餐の席、リビングの済に巨大なゴミ袋が置かれていた。中に入っていたのは大量のキノコだった。捨てるつもりなのか。というか今までどこにこんな量を保管していたのか。冷蔵庫にも入りきらないぞ。「なんでこんなに持ってたのか、自分でもわからないわ」と

母は言った。晩餐にはキノコが混じっていなかった。

2012年1月4日（前書き）

この作品は作者の日記ではありません。

2012年1月4日

1月4日（水）

テレビを点けると日用品と車のほかには保険とローンのCMばかりやっているような気がする。謙譲な生活を送ること、これ即ち車を乗りつつ日用品を買いに息がたらローンを組んで保険に入るべしとテレビは指し示しているような気がする。自動車保険に入ることがそれほど必要なことなのだろうか。やはりテレビを無条件で信じてしまうこと、及び信じてしまう人間には注意が必要だ。要注意人物たる狂人である私のようなものが言っていることではないだろうが。

母が友好的になつてしまったと以前書いたが、それは態度だけのものではあつたらしく、今年初の病院へ出かける際にも最低限の金額しか手渡してもらえなかった。それに前回の通院から一週間しか経っていない。いつもは二週間ごとに通院していたはずである。ここで体内時計が狂ってしまったのか。分からなかったので40分待たされて5分診察があつた後、一週間後に予約を入れた。薬も一週間分だけ受け取ることにした。これで一週間分の薬代が私のものになったわけである。たかだか数百円ではあるが、金銭というものを持つことを禁じられているような生活を送っている私にとって、この金額は貴重である。貴重なので数百円は一枚ずつ分けて自室のあちこちに隠しておくことにした。これなら一つや二つ見つかつても偶然で済ませられるし、取り上げられてもダメージは少ない。きっと見つかったら取り上げられるに決まっている。態度が変わっただけで本質が変わっていない母は、そういう性質を持っているのである。

そう考えながら帰ってくると編集者が私を待ち構えていた。正確に言つとキッチンで料理をしていた。そしてそのまま私に「やあ、

おかえり」と声をかけたのである。編集者まで友好的になったのか、と驚きつつ、まだ部屋のあちこちに隠しておらずポケット一つにまとめて入っている小銭たちがジャラジャラ音を立てないように気を付けて歩きつつ、編集者が構えているフライパンの中を覗いてみると、そこではほうれん草とキノコが炒められていた。どこかで見覚えのあるメニューである。「ソテーだよ。君が食べるんだ」キノコの色は赤だった。食べると狂うキノコの色をしていた。

食べないでいると何をされるかわからないのでほうれん草とキノコのソテーを食べ、すぐさま部屋に戻ってそのまま気絶し、目覚めると隣に榎本なごみが横たわっていた。榎本なごみは面白そうに微笑んでいた。「大変な状況ですねえ」少し前まであの編集者は兄だったのではないのか。あんなのが肉親だったらと思うと、ぞつとしますよ」榎本なごみは編集者を嫌うという点に変更は加えられていないらしい。

2012年1月5日（前書き）

この作品は作者の日記ではありません。

2012年1月5日

1月5日（木）

あるところに貧乏な男ありけり。貧乏な男は金持ちの少女に恋をした。しかし経済状态的に釣り合わない。だから男は頑張った。頑張った結果、男は国一番の金持ちになった。しかしその頃には男は六十歳。少女だった人物も六十歳。計算しとけよ。みたいな歌をネットで聞いた。しかしアーティスト名も曲のタイトルも思い出せない。だからとりあえず歌詞の内容だけ書き留めておくことにする。

昼間、部屋のあちこちに隠しておいた小銭の中から百円玉を一枚、そして五円玉を一枚取り出してひっそりと出かけた。目的地はコンビニ、目標のものは清酒鬼ごろしである。早速コンビニに到着し、目的のものを買い、ストローで飲んでみた。鬼ごろしから漂う普通に生活する分には必要のない風味に涙を流しそうになりつつ、なんとか喉の奥に久しぶりの酒を流しこんだ。そして帰ろうと思った矢先、私は吐いた。内容物が水と酒と胃液だけの、つまらない嘔吐物だった。

嘔吐の疲労感を抱えつつ家に帰ると、母がリビングの机に突っ伏していた。編集者が仕事初めに行ってしまった、と嘆いていた。つまらなくてとても仕事何かやってられない、と愚痴をこぼしていた。「そしてあんた、酒臭いわよ。あと胃液臭い」と指摘もされてしまった。私は疲れていたこともあって、馬鹿みたいに正直に事情を説明してしまった。母は弱っている様子だったが、私だって弱っていたのである。そして私は夕食抜きを言い渡された。酒を勝手に飲んだ罰則として、それから薬代のお釣りを勝手に使った罰則として、私は丸一日の絶食が決定した。

晩。空腹で腹が鳴りっぱなしである。明日になればどんな状況に陥っているのか、想像もつかない。喉の奥からはまだ酒の借りが漂ってくる。「嘘ついときましようよ、そこは」と榎本なごみにも言われた。計算って大事だ、と痛感した。馬鹿正直は馬鹿を見る。

2012年1月6日（前書き）

この作品は作者の日記ではありません。

2012年1月6日

1月6日（金）

朝、起きようとする身体に力が入らなかった。たった一日の絶食がこんなにも激しい体力不足という形で現れるとは思ってもみなかった。力が入らないが一応通常通りの思考はできる（できている筈）なので、私はゆっくりと時間をかけて起き上がり、自室の中を歩き回った。すると宙に浮くような不思議な足取りになってしまった。まるで酔った人間のような、と私は思った。

それから気持ち悪かった。二日酔いも併発していたようである。昨日は酒をほとんど吸収せずに吐いてしまった筈なのに、私の胃は予想以上のダメージを受けていた。昨日は少量とはいえ酒しか摂取しなかったのが原因だろう、通常の人間は酒と一緒にのおつまみというものを摂取する。私は水を飲んだ。ところが荒れていた胃は予想以上に手ごわく、飲んだ水すら履きたくなくなってしまった。仕方がないので私は自室で横になった。そのまま夕方まで寝ていた。

晚餐は出された。罰則は済んだようである。晩になる頃にはようやく気持ち悪さが引きつつあり、なんとか食物を一日ぶりにいに収めることができた。しかし、ほんの少しの酒を胃に当てただけで一日寝込んでしまうほどの激しい二日酔いになってしまったのは。私はいつの間にかこんなに酒に弱くなってしまったのか。こんなことでは部屋に隠したまま回収されていない残り百二十円の使い道が無いではないか。

2012年1月7日（前書き）

この作品はフィクションであり、
実在する人物・団体・事件
とは一切関係ありません。

2012年1月7日

1月7日（土）

百二十円と返却予定の本を持って図書館へ行った。歩きで。引越したことにより図書館が以前より近くなったことが自転車を使わない理由の一つ、そして引越しの際に自転車を運ぶのを忘れてしまい、父が過ごしている前の家に自転車を置きっぱなしにしてしまっているのが理由の二つ目である。自転車は嫌いなので取りに行く予定はない。

図書館の出入り口には自動販売機が置かれている。百二十円を使ってフアントを買ってみた。寒空の下、冷たい炭酸飲料を飲むと気持ち悪くなってきた。少し冷やしただけで吐き気に襲われてしまうとは、まだ胃は完全に回復しきっていないようだった。

それから久しぶりに図書館で一日過ごしてみることに決め、返す本と借りる本を受付に持っていったあと、検索機を使ってみることにした。このところ気になっている作家の名前である「猿」を著者の欄に入力して検索してみると、百二十件の該当図書があると表示された。こんなに書いていたのか、と思ったが、猿渡や猿谷などという苗字の作者の本も含められていた。猿岩石日記も検索結果に含まれていた。もちろん読むつもりはなかった。

猿渡哲司の「金のトリック銀のトリック」という本を読んできた。もしかしたら猿と何か関係があるかもしれない、という蜘蛛の糸より細い可能性に賭けて読んでみたのだが普通のミステリーだった。容疑者四人中二人が犯人で、探偵役と思われていた語り部は共犯者だった。あまり珍しくないな、と思ってしまうのは殺人者が語り部を務めることが多々ある西尾維新の本を読みすぎたせいだろうか。

夜、キノコの入っていない晚餐を食べたあと、部屋のノートパソコンでメーラーを開いてみると、猿からのメールが久しぶりに届いていた。「あけましておめでとうございます」から始まり、「ところで最近、キノコを抜いたりしていませんか」という文面が目についた。猿は私の何を知っているのだろう。どうやって知ったのだろう。気になったのでその質問を返信してみた。それから日記を書き始めた。キノコによって気絶する時間がなくなったので、日記を書き始める時間はいつもより早い。

2012年1月8日（前書き）

この作品は作者の日記ではありません。

2012年1月8日

1月8日（日）

私に才能はあるのか、それともかつてあったのか定かではない。子供の頃はあったのだろう、もしくはあると信じられていたのだろう。現在の私に才能はあるだろうか。何らかの才能が。具体的に書けないあたり、才能はないと考えるのが適切である。才能は伸ばすより育てる方が利益が大きい、経営者の本を読んでいるとそんな気がしてくる。

「今年も残り358日ですね」と部屋の中を相変わらずクラゲのように漂っている榎本なごみが言い出した。それは正月休みの期間中に言わないと成立しない冗談ではないのか。世間一般では1月8日など、既に正月は終わっている時期である。今日まで冬休み、という学生たちはいるかもしれないが。それとも明日は成人式か？今年の成人式は何日なのか。調べる気力すら沸かない。「一月中ならきつと有効ですよ」と榎本なごみは冗談を成立させようと躍起になっている。それから吐き気が襲ってきたのでトイレに入って吐いた。相変わらず胃液しか出なかった。

榎本なごみが私の腹に自らの頭を突っ込み、「特に胃とかに異常があるわけでもありませんねえ」と言った。体に頭を突っ込むと内臓が見えるのか。気持ち悪くないのか。「人間誰しも、内臓くらい持っているものなのです」今の榎本なごみはもっていなさそうである。何せ半透明なのだ。「まあ、もう死んでますからねえ」この瞬間、榎本なごみに新たな設定が追加された。

それから榎本なごみは今作ったのか前からあったのか分からない身の上話を始めた。それによると、榎本なごみは仲の良かった家族

との旅行中、一人で露天風呂に入っているところを野生のタヌキに首元を食いちぎられて死んでしまったらしい。「痛々しい事件でした。家族が泣いているのを空中から眺めるのは、いたたまれない気分でした」私はその話を信用しなかった。

晚餐を食べてもいつものように倒れないのは落ち着かないので、日記を書く前にひと眠りしようと横になってみた。「キノコは食べないんですか?」母が出さないのだから仕方がない。「それ、危なくないですか?」昨日メールで猿にも指摘されたことを榎本なごみは言った。私の頭の上を漂いながら。

2012年1月9日（前書き）

この作品は作者の日記ではありません。それは明白なことです。

2012年1月9日

1月9日（月）

毎日図書館に通えばこの生活は退屈ではなくなるのではないか、
と試みてみたが毎週月曜日は図書館が休みである。だから今日は退
屈である。ハローワークへ行け、と自分を叱咤してみたがなぜか起
き上がることができなかった。物理的に、である。「私の体を完全
にあなたの体に潜り込ませてみました」身体の内部からそんな声が
聞こえてきた。声に合わせて私の口も勝手に動いている。「こうす
れば、私は人間を操れるようです」榎本なごみは恐るべき幽霊であ
る。

榎本なごみが抵抗しようとしないうちに私の体に飽きて出て行ってから、
私は榎本なごみから逃げ出さなくなつて外に出た。ところが榎本な
ごみは私の後方上空を漂い続けた。しばらく目的地もなく早足で逃
げ続けていると、すれ違う人があった。その人は榎本なごみを見て
ぎょっとした顔になった。榎本なごみは私にしか見えない、とかそ
ういうものではないらしい。「幽霊は楽ですよ。人の目も気にしな
くていいし、食事も睡眠も必要なんです」しかし死ぬのは嫌だ。
「どうしてですか？」榎本なごみは家族が泣くのを見ていたたまれ
ない気持ちになつたのではなかつたのか。

マンションから少し離れたところに小さな森を突つ切る道がある。
田舎である宮崎では市街中心部でもない限り少し歩けばすぐ自然と
毛虫がたつぷりの道に入り込むことができるのである。その森の中
の道端に赤いキノコが生えているのを発見した。まるでベニテング
ダケのようである。私はそれを摘み取った。それを持って家に帰り、
勝手に刻んで炒めて食べた。自分でもどうしてそうしたのかわから
ない。私は狂いのあまり気絶した。もしかして深層心理でキノコを

求めていたりするのか。そういうわけではないことを私は深層心理に期待する。

2012年1月10日（前書き）

この作品は作者の日記ではありません。

2012年1月10日

1月10日（火）

「火曜日はセールの日だから荷物を持つのを手伝って欲しい」と母に頼まれたので、母とふたりでスーパーへ向かった。そこではセールの品が積まれておる大きな籠に赤いキノコが山と積まれていた。食べる人間がいるから、こんなに仕入れられているのか。食べると狂うのに。味もないのに。それにしても安い。ひと袋に詰め放題で30円とは。もやしより安いではないか。「食べたいの？」と母に指摘された。私は無意識の内に赤いキノコの山を凝視していたらしいのだ。森で無料で取れるものにひと袋30円の値をつけるのは高いのではないだろうか。実際、この前森で見た。と、私は言った。

キノコをひと袋とその他の食料品を抱えて私と母は家に戻った。それから母が昼食を作ってくれと言い出した。母が昼食を作るなど久しぶりのことである。やはり友好的に設定が変更されたいらしい。早速赤いキノコが使用されたカレーが振舞われた。キノコが入っているので味はなかった。食べたあと、倒れる寸前の朦朧とした足で自室に戻りながら、いつものパターンを踏襲していることに安心している自分に気がついた。狂った人間は生活をパターン化させることで心の平静を保とうとする、と本で読んだことがある。

しかしこんなパターンはあってはならないことなので、夕食にはキノコを入れないで欲しい、と母に頼んだ。「自分からせがんだのに」と母は不思議そうな顔つきだった。そして晚餐の席、饗された食事にはキノコが入っていなかった。味のある食事だった。そして深夜となった現在、落ち着かない。晚餐から眠らずにこの時間まで過ごすことは、パターンから外れているからである。「キノコ、食べなかったんですか」榎本なごみは見透かしたような表情で尋ねて

くる。実際、見透かされているのだろう。キノコを食べなかったことを悔やんでいることを。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8369v/>

このキノコ人間が。

2012年1月11日02時45分発行